
スキマクラブ

麻技淮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スキマクラブ

【Nコード】

N5935I

【作者名】

麻技淮

【あらすじ】

第4話、11話のみ残酷描写あり。

「定規」「ストーリーカー」などの、あまり取り上げられない隙間の属性を題材に、少年少女の恋愛模様を描くラブコメシリーズ。

定規的な彼女「前編」(前書き)

よければ感想下さい。

定規的な彼女「前編」

僕の名前は、かみなみちようじゅうえもん神並長寿右衛門。

右衛門という名前の青年が主人公だからといって、別にこの話は江戸時代の話ではない。

僕の母が日本人で一番長寿（112歳）のお爺さん次郎右衛門にあやかれるようにとつけてくれた、多分有り難い名前だ。

神並に長寿なんてとんでもない姓なんだから、別に普通の名前でも、かなり長生き出来るんじゃないかと思ったりもするけれど。

この物語は、そんな僕と、定規的な彼女の物語。

「あちい…」

校則の通り短く切り揃えられた髪は汗に濡れ、すつと通った鼻やパツチリとした瞳が熱さへの苦悩により歪む。

都内に住む平凡な高校生である僕は、夏休み明け二日目の今日も普通に高校へ行き、普通に義務教育を受け、今まさに普通に家に帰る途中である。

公立高校の夏休み明けといったら、席替えなどのホームルームや委員長交代などで時間がつぶれる、と思っていたが、普通にみっちり授業だった。

愚痴の一つもでる、というものである。

しかし、もう放課後だ。

自由な時間なのだ。

思い切り羽を伸ばし、僕は家に帰って寝ようと思った。

暑過ぎるため、外出する意欲すら湧かない。

このまま、何事もなく一日は終わるのだ…と、この時は思っていた。

そう、あんな事件が起こるなど、僕は全く予想していなかった――

「しかし、夏休みもすぐ終わっちまったなあ」

学ランのボタンを明けた僕は、うなだれながら隣の少女に同意を求めた。

「そうね」

僕の隣で本を読みながら歩いている少女、てんびんばかり天稗計利は眉一つ動かさずに素っ気ない言葉を返す。

カチューシャで後ろに流された長いストレート髪は風に揺れ、すらつとした長身と、その真つすぐな瞳は少し大人びた印象を周囲に与える。

彼女は僕の数少ない友達で、幼なじみだ。

高校のクラスでは委員長をしており、風紀委員の他に、生徒会役員も兼任している。

「このままどこか遠い所にも行くか？ ちょっとハメでも外してさ」服をわさわさと動かし体を冷やしながら、僕は冗談を言った。

勿論それは冗談であるため、彼女に即座に否定されるだろう。

彼女はそういう人間なのだ。

人間定規、それが彼女のあだ名。

風紀委員である彼女は、ルールに厳しい。

生まれつき真面目な性格ではあるが、いつ頃ルールに厳しくなったのか僕は正確に覚えていない、いつの間にかそうなっていたのだ。

「それは、いい考えね」

僕は耳を疑う。

思わず、間抜けな声を出してしまった。

「え？」

呆気にとられている僕を見て、彼女は不思議そうに顔を傾ける。

「何を驚いているの？」

こいつは……何を言っているのだ？

人間定規である彼女がルールを、規則から外れている事を承認して

いる。

このギャップはガリレオが天動説を唱え、ザビエルが踏み絵を踏み砕き、ヒトラーが博愛主義を唱える事くらいの衝撃なのである。

「おーい、右衛門、目立つから動いて。」

計利の言葉に我に返る僕。

確かに登下校する同じ高校の奴らがクスクス笑っていた、不覚であった。

「え、だ……だって寄り道すんの校則違反じゃね？」

計利は眼鏡をクイツと直しながら僕を見つめた。

この癖は彼女が法律やら校則やらを引用する時に出る癖で、彼女も知らず知らずに行っているようである。

「校則には寄り道は禁止と書いてあるけど、遠い所でハメを外してはいけない、とは書いてないわ」

ふふん、と得意げに言う計利。

僕は思わず反論しようとする。

「え……でも、お前」

「鈍いのね右衛門」

しかし、彼女はそれを遮る。かなり絶妙なタイミングでのカットだ。完膚なきまでに僕の言葉が遮断された。

「さあ早く、その名前の通り四次元ポケットからどこでもドアを出すのよ」

名前をネタにすんな！

と叫びたかったが、止めておいた。彼女は多分華麗に受け流すと思うからだ。

因みに僕を某ネコ型ロボット呼ばわりするのは、感情を余り表に出さない彼女の数少ないネタだ。

だが、どこでもドアを出せなど言われたことはない、彼女はルールを越えた願いは口にしない。

おかしい。明らかにおかしい。

人間定規である彼女があらうことか、逃避行を望んでいるなど。

おかしい。

「…チャリでいいか？」

恐る恐る、僕は訪ねる。

自転車はそろそろ到着する僕の家にあるので、そこから海岸沿いに走っていけばいいだろう。

その後は僕にはわからない。

彼女次第だ。

海とか空を見て満足してくれればいいが、生憎僕達には見慣れた景色だ、彼女のお気に召すか、全く分からない。

かといって僕は高校生だから車を出して遠出、というわけにはいかない、巨人の星の花形じゃあるまいし。

「いいわ、某ジブリアニメ… 耳をすませば、みたいな構図になるのが、少し引つ掛かるけど」

確かに、と少し気になった。

だが僕はあのアニメに出てくる少年ほど爽やかじゃない、どうでもいいが。

歩いている内に僕の家に着いてしまった。

平屋であり、正直ボロい、狭い、使い勝手悪い。

そんなボロ家には目もくれず、僕は小さな庭先にある自転車の鍵を外し、跨いだ。

「小四の頃までよくやってたろ… お前は後ろで六法全書読んでたけどな」

小学校五年にもなると、僕も男の子だったから恥ずかしかったし、何より彼女は「法律に触れるから」と二人乗りを拒んだ。

それは、今の今まで彼女の中で守られてきたルールであるはずなのに、彼女はそれを破ろうとしている。

おかしい。彼女が法律を破ろうとしている。

「あら、あの本は面白いわよ、あなたの愛読書であるプレイボーより」

にやり、と笑う計利。

彼女が僕の誕生会の時に、どさくさに紛れて部屋から「そっち系列の本」を数冊奪取し、焼却した記憶が蘇る。

因みに僕の名誉のために言っておくが、プレイ。ーイはキン肉マンが読みたくて買っただけである。

「もういいから、行きましょうぜ奥さん」

僕はこれ以上話すと、更に自分の痛い部分を突かれそうな気がして、彼女に催促し自転車のサドルの後ろをポンポンとはたいた。

「そうね」

彼女は頷き、長い髪を払った。

そしてサドルの後ろに乗り、僕の服につかまった。

僕達は海沿いの曲がりくねった公道を、自転車に乗って駆け出した。不思議と、後ろに乗った計利が久しぶりに、本当に久しぶりに、少しだけ、ほんの少しだけ笑っているように感じられて、僕は少し嬉しかった――

つづく

定規的な彼女「前編」(後書き)

最後まで読んで頂き有り難うございます。
これからもよろしくお願いします。

定規的な彼女「後編」(前書き)

僕は都内に住む高校生「神並長寿右衛門」(かみなみちようじゅうえもん)。

夏休み明けの学校帰りに、幼なじみである定規少女「天秤計利」(てんびんばかり)にどこかへ連れていってくれ、と頼まれ、彼女を乗せて自転車を走らせたところで、前回の話は終わっている。

定規的な彼女「後編」

「濡れてるモノに刺さった、棒が傾いているわ」

「そんな事言う必要ないだろ…てか棒に触れるのは反則だろ計利！」

「セーフよ、セーフ」

「うっ！大胆過ぎんだよ計利！」

「ああっ！しっ、潮で濡れたのが壊れちゃうのっ！やああっ！」

「うっ！駄目だ計利！棒が…うっ！」

「棒が太い、倒れるわ！！」

夕焼け空が赤く染めた海岸に、男と女の叫び声が響く。

「いや、これくらいの太さの棒じゃないと棒倒しゲームにならないだろ？」

そう、僕、神並長寿右衛門は、幼なじみのクラスメイト、天秤計利と砂浜で座り込んで棒倒しゲームをしていた。

僕達は結局、自転車で家の近くの砂浜に来ていた。九月の初めでありまだ暑い砂の上で学ランと制服を着ている僕達は汗をかいており、ゲームに白熱している。

棒倒しゲームとは、砂浜に小さい水を含んだ砂の山を作り、一番上

に刺してある木の棒を倒さないように砂を取り除いていくゲームである。暇な海水浴客が泳ぐのにも、砂の城を作るのにも日光浴にも飽きた時にやる、本当はあまり盛り上がりがないゲームである。

「ああ、倒れちゃった」

因みに僕の負けである、思い切り砂を崩したら、そのまま棒は倒れてしまった。

学ランの袖についた砂を払いのけ、僕は棒を海に投げ捨てた。

このゲームはバランス感覚が難しい。

「というか僕達はなんで、こんな叫んでたんだ？」

冒頭の叫び声は僕達が出したものだ、考えてみたら、海岸で行う棒倒しはそこまで白熱するものではない。

明らかに場違いな叫びであった。

「さあ、我ながら、よほど白熱していたようね、たかが棒倒しに」
ふとした疑問が浮かんだが、彼女に軽く受け流されてしまった。

「なんか腹減ったな」

とは言ったものの、この海岸は泳ぐのにも適していないため、人があまりいない穴場になっている。

そのため、海の家やコンビニは周囲には皆無だ。

因みに僕は素潜りで魚を捕まえるテクもない。

「店：この辺りないんだよなあ」

「別に、買い食いはルール違反なんだから、そんなの認めないわ」
即座にぴしゃりと釘を刺す計利。

「とか言って俺のサツポロポテト食うなよ」

自転車のカゴの中にあつた学校のバックから拝借した僕の数少ない貴重なおやつを、計利はぱくぱくと食べている。

さも、自分のもののように。

「これは校則の範囲内よ」

「日本国憲法に違反してる、窃盗罪だ」

「あなたのものは私のものよ」

ふふんと得意げに言う計利。

「どこのジャイアンだお前は」

呆れたように呟く。

しかしそんな愚痴を聞き流した計利は、細くて長い指先に一つ、サッポロポテトを挟み、僕に差し出した。

「はい、あーん」

ふふつと笑いながら、サッポロポテトが僕の口に迫る。

僕は顔を少し背けるが、彼女の指先とサッポロポテトはそれを追尾する。

「いつ！いいよ別に！」

僕が言うのと同時に、計利の指先はひよい、と旋回し、結局サッポロポテトは彼女の口の中に入った。

「冗談よ」

ニヤ、と小さく笑う計利。

僕はやれやれ、といった感じで肩をすくめた。

べ、別に食べさせてもらえるなんて期待してなかったんだからね！
そういえばこの前も、缶ジュースで同じようなことをされたような気がする。

全く、少しは学習してくれよ、僕は。

「なんか調子狂うな」むくれた僕を見て、計利は体育座りの格好になり、サッポロポテトを食べるのを止めた。

いや、正確には食べるサッポロポテト自体が無くなってしまったようだ。食うのが早い。結局僕は一口も食べられなかった、まあ、いいけど。

数秒の沈黙の中、計利は表情を曇らせていた。

「ごめんなさいね、付き合わせて」

少しだけバツが悪そうな表情で、計利が謝罪する。

サッポロポテトを食べた事ではなく、この僕に「どこかへ連れていってくれ」とせがんだ事について。

「んなことないって、僕も結構楽しかったし。だけど…お前がルールを無視すんのはビックリしたが」

僕はこの際だから、今日どうしても引つ掛かっていた事を聞いた。彼女は俯き、そつぱを向いた。

やはり、ルール違反をしたという自覚はあったようだ。

別に寄り道くらい、僕はいいとは思っけれど、いつもの彼女ならまず許さないであろうルール違反である。

「ああ、寄り道ね。これは私的にはかなりの反抗だわ、」手帳に明記されてない」なんてルール違反の常習犯と同じようなことを言っ
て貴方を押し切っと。はつきり言って自分の信念とは真逆ね、でも
息抜きがしたかったの」

彼女は突然立ち上がり、背伸びをした。
すかさず僕も立ち上がる。

「疲れる事もあるのよ、私も。全てを定規で、ルールで縛りながら
周りに合わせて生きることが。だから遠くに行きたかった」

眼前の海を見つめながら空になったサツポロポテトの袋を弄びなが
ら、計利はため息を漏らす。

「そつなのか… 悪い、僕は知らなかった」
僕は素直に言う。

そう、僕は知らなかった。

今、言われて知った。やっと彼女の気持ちを察する事が出来た。
彼女は本当に、ただ疲れていたのだ。

僕達普通の人は大体がルール通りに生きていない、どこかでルール
の間の抜け道みたいなものを作っている。

例えば、一般の40キロ制限の車道を普通の車は確実に50キロ以
上出して走っているし、学生は学校に様々な私物をもってくる。

でも彼女はそれが出来ない、何でも上手くこなしてしまう彼女はそ
れ自体に不便を感じないのだが、周囲との間でズレのようなものが
生まれ、ストレスになることがあるのだろう。

だから、僕に自転車を走らせ、どこかへ、どこでもいいから、どこ
かへ行きたかったのだ。

そつすれば、日頃のストレスが解消されると思ったのだろう。

「でもお前はそういう生き方を自分で選んでいる」

そう、彼女はルールに厳しい自分を嫌うような人間ではない。

彼女は自分の性格を自覚していたし、その事について相談を受けたことなど一度もない。

「そうよ、分かってくれて嬉しいわ。それが私なの」

でも僕は知らなかった。彼女でもストレスはそれなりに溜まっていたのだ。

普段の彼女を知らない人間なら、ルールを守る人間がストレスにさらされる事など当たり前だろう、と思う奴もいるだろう。

だが、普段の彼女はストレスや疲れなど表に全く出さないのだ。それこそ、幼なじみの僕ですら気づかないくらいに。

だから僕も分からなかった、彼女が、世間一般の高校生並みに疲れているなんて。

「でも、疲れる事もあるわ。だって私、ただの人間ですもの」

「そうだったのか…悪い、僕は計利がストレスなんて感じない、超人だと思ってた」

謝罪の言葉を口にする僕。

素直に申し訳ないと思った。

幼なじみなのに、こんなに長く隣にいたのに、気持ち察してやれなかった自分が。

「いいのよ。私、分かりにくい人間だと思うから。しかも、いつも右衛門をからかっちゃってるし」

確かに、さっきのサッポポテトの件といい、猫型ロボットのネタといい、僕はよく彼女にからかわれてしまう。

それが周囲とルールの折り合いをつけている彼女の楽しみになっていたのだと、初めて気づく。

でも、それでも僕は彼女の気持ちを察してやれない自分が少しもどかしい。

「そんなしおらしい顔をしないで右衛門。私は貴方に、御礼したいくらいなのよ。そう、こんな風に——」

そう言うと、彼女は一気に僕に寄り添った。

それこそ、僕が驚く隙すら与えないくらいに早く、そして自然に、そして――

「ん？う……あっ……！」

僕の唇を、彼女が奪う。

熱い感触が口に広がり、計利の長い髪の匂いが僕の鼻をくすぐる。一瞬、ほんの一瞬のことであつた。ほんの一瞬で、僕の唇は解放された。

「うっ…… は、は、は、計利さあん！？」

思わずどもり、計利の事をさん付けで読んでしまう。

僕は余りに突然の事に気が動転し、目をパチクリとさせる。いきなり過ぎる。

「さて、これで私は明日からまた頑張れるわ」

この少女は、天秤計利は、僕との接吻で復活したというのか？

粘膜同士の接触で、栄養を補給したのか？

それよりも初めてのキスを、計利に奪われてしまった。

そして多分、彼女も初めてであろう。

まだ「好き」と伝えてないのに、男の僕から言うべきなのに。

僕は彼女にとって幼なじみ以上の、異性だったのだ。

しかし、あまりに唐突な接吻であつた、室町幕府の頃に黒船とペリ―が来て開国させられ、その翌年にマクロスが地上に落下するレベルの唐突な出来事である。

僕にとつて「気になる幼なじみ」がキス一つで、いきなり「異性」に変化した、もう思考が追いついていなかった。

何が何やら、そして僕は彼女に何を言うべきなのか。

「こ……こ、こここれは反則だ！」

言いたいことは山ほど、それこそチヨモランマほどあるが、気が動転したとんでもないヘタレである僕は、そう叫んでいた。

本当に、こんな僕「神並長寿右衛門」の唇を好き好んで奪おうとする女は、どこの世界においても天秤計利しかないのではあろう。

そして多分、そんな唐突過ぎて訳が分からない、定期的な彼女「天秤計利」を好きで放っておけない男も、この僕だけなのだろう、と思いたい。

「あら？知らなかった？恋愛にルールなんてないのよ？」

クス、と嬉しそうに笑い指先で自分の唇をなぞる計利。

薄暗い中、海面に反射する月明かりに照らされた彼女に、僕は見取れてしまう。

確かに女が先に唇を奪ってはいけないなんて、恋のルールブックには書いてはいない。

どうやら僕の完敗のようだ。

後世でヘタレと言われてしまうかもしれないが、構うものか。

僕は素直に嬉しかった、彼女が久しぶりに笑ってくれたことが。

困った彼女が、僕を求めてくれたことが。

「私は今日、気づいたわ。ありがとうね右衛門」

僕は、ついさっき気づかされたよ。

呆気にとられている、僕を置いて彼女は軽い足どりで、薄暗い砂浜を裸足で走り出した。

そんな彼女を、僕は――

定期的な彼女「後編」（後書き）

「定期的な彼女」を最後まで読んで頂きありがとうございます。

このスキマクラブシリーズでは、「定期少女」天稗計利のような少し変わった（？）少年少女がラブコメディを繰り広げる、という内容になっています。

次回は「ストーキング／マイウェイ」というタイトルで執筆予定です。

もしよかったら感想下されば、嬉しいことこの上ないです、はい。
では、また。

ストーキング／マイウェイ「前編」（前書き）

今回は、ちょっと変わったストーカー少女と、「彼女を作らない主義」の体質をもった少年のお話です。

ストーキング／マイウェイ「前編」

俺の名前は夜乙女朝男^{やおとめあさお}。

変な名前と言ってくれるな、俺もつくづくそう思っている。

俺は青森県内にある、数年前に過疎地となってしまったエコネコ商店街に住む、普通じゃない高校三年生だ。

どう普通じゃないかは、あまり言いたくない。

親は二人とも仕事で海外出張、兄は既に自立しているため、二年前くらいから一人で暮らしている。

背が高くキレ長の目で、少し怖いイメージを第一印象で持たれるが、俺は基本的に動物と庭の手入れが好きなオトメンもどきである。

因みにスポーツは剣道なんかをやってる、弱いが。

俺は自分で作った朝食を済ますとキッチンを飛び出し、狭い玄関で靴紐を結び、思い切り扉を開く。

はずであつた…

「先輩！見て下さい手紙来てますよ！」

猫の耳のような突起のあるフード付きの黄色いジャンパーをセーラー服^{セーラーふく}の上に着た少女、極楽追尾音子^{ごくらくおしな}はまるでひまわりのような…

いや、まるで虫眼鏡で見た直射日光のような明るい笑顔で玄関から出て来た俺に手紙を突き出した。勿論、俺の家のポストに入っていた手紙である。そんなわけで、俺は朝一番のツツコミを入れる。

「バカタレ！何してやがる！」

「にやふっ！」

小さく変な唸りをあげ、音子はよろめく。

フードを被った頭の中で耳のような突起がピクリと動く。

栗色に輝くセミロングの髪がなびき、音子はその大きな目を見開く。そして態勢を立て直すと、またしても満面の笑みで俺に接近する。

「え…だから先輩のお家の手紙を拝見してました！不正な請求、その他諸々怪しい物がなくて良かったです！にやは！」

良くないわい！

俺は音子の手元から手紙を取り戻すと、こつん、と頭を軽く叩いた。
「にはは！じゃねえ！お前が一番怪しいわ！」

「にゃふん」

音子は再び小さく呻く。

そして俺から少し離れると、スカートをひらひらとさせ、ニコニコと笑い変なステップを踏んだ。

「ささ、学校行きましようよう、ほら！こんなかわいい美少女と一緒にに登校出来るなんて、先輩は凄く幸せな男子ですよ！」

スカートをひらひらさせて可愛いアピールをしているのだろうが、そんな幼児体型の童顔の誘惑が俺には通用しなかった。俺は音子のフードの首部分を掴み、彼女を捕縛し、つまみ上げる。

「きゃん！」

甲高い、でもなぜか嬉しそうな声を音子が出す。

が、そんな事気にも止めず、俺は音子へ向かって反論する。

「お前みたいなストーカー紛いのちんくしゃ、サツに突き出してやるわい！」

つまみ上げた音子の顔に向かって、俺は勝利宣言（？）をしてニヤリと笑う。

明るく爽やかに、そしてまるで自然に行っているから紛らわしいが、彼女の行っている行為は確実にストーカーである。

朝一で来た手紙を漁る。その他にも登下校中、追いかけてきて、ひつついて来る、俺にベタベタ触る、腕を組もうとする。

一日の終わりに必ずメールが送られてくる、しかも俺はメルアドを教えていない。

隣にいる時、携帯を見やがる。

他多数。

とにかく二ヶ月くらい前に、どっかの町から転校してきたくせに、やたらと俺に詳しい。これだけ事実が揃えば、お巡りさんも善良な市民を守ってくれるだろう。

そんなことを考えていると、彼女は俺の捕縛からひよい、と抜け出す。不覚であった。

「まあ、そんなことより先輩！昨日のカラオケは楽しかったですね！先輩、歌、とても上手かったですよ、惚れ直しちゃいました！ぽっ」

ああ、そういえばこいつは昨日も勝手に俺と数人の友達の遊びについて来たのである。

しかもカラオケ店内で、俺の歌う時だけ合いの手を入れ、隙あらばデュエットしようとしやがった。

しかも、厄介なことにこいつは他人とのコミュニケーション能力に長け（俺の話は聞かないが）、すっかり俺の友達と仲良くなっちゃった。

終盤では「朝男を宜しくお願いします！こいつ、面構えはちよつと怖いけど、根は本当にいい奴なんです！」と言われている始末であった。

本当に厄介である。

「お前はただ俺達に勝手について来たただけだ！それと、お前は俺の話聞け！話はそれからだ！」

「にやははは！先輩！ほーらほらほら！私を掴まえてっつ！」

話を聞けという俺の話を一言も聞かない彼女は、坂道を猛烈に走り出す。

すると漫画みたいに、砂埃が立ち、根子は一瞬で俺の視界から消えてしまった。

馬耳東風、という言葉がこれ程までに似合う人間も稀である。

「というかストーカーが相手を追い越してどうするんだ……」
まあ、別にいいんだが。

これでゆつくりと登校出来るしな。

「いいよなあ朝男は、あんなかわいい女の子に好かれてさあ」

俺の真横から、感慨深げに頷く丸眼鏡をかけた少年が言う。

「うわっ！おっ、おはよう長崎！つつかあいつは彼女じゃない！」

ハッ和我に返る俺。

その隣で歩いている声の主は、ながさきかすてら長崎貸照。俺と同じクラスの友人である。彼はそれなりにイケメンの部類の顔やスタイルなのに丸眼鏡にオカッパ頭という、なんとも惜しい少年である。

俺は挨拶と同時に彼の誤解を解く、あいつが…音子が転校してきてからは、それが恒例になっていた。

「というか、俺は全っ然、嬉しくないぞ。あいつはただのストーリーだ。なまじバカみたいに明るいから、みんなそう捉えていないだけだ！」

俺は腕を振り上げオーバーリアクションで否定する。

「そう言ったら可哀相だよ。」

俺と貸照の幼なじみの長髪の少女、ましろゆき真白雪も貸照に同意し困り顔で俺を責める。

「音子ちゃん、転校してきてから、いつもお昼ご飯作ってきてくれるじゃない」そして、まるで透き通るような頬をふくらませ、俺の学ランを人差し指でつついた。

「それは…確かに助かってるが」

全く、女子は考えもなしに女子の味方をし過ぎる。

確かに、音子が俺に弁当を作ってきてくれるのは、紛れもない事実である。

何故かいつも猫飯（ご飯に味噌汁をぶっかけたもの）なのだが、悔しいことにこれが美味しいのだ。

猫飯のくせに。

「俺は彼女は作らない主義なんだよ。そこん所、分かってないんだ、奴は」

因みに彼女作らない主義といっても、別に男が好きなわけでもない。女が嫌いなわけでもない。

彼女を作らないのは、体質のようなものなのだ。僕の意味では、どうにもならない問題であった。

あくまで噂で聞いたんだが「過剰なまでにルールを遵守する人間」

がいるみたいで、俺もその類なんだと思う。

いや、「彼女を作らない主義」である俺はそれ以上の体質だと思う。何せ、彼女を作らない体質、なのだから――

「そ……そうだね、確かに朝男君、それがあつたんだよね。体質さえなければ、彼女明るいから、お似合いなのに……」

静かにそう言い、雪はしゅん、となつてしまった。
ん？

まるでこれでは、俺の体質だけが問題で、俺はあいつと付き合うことについては概ね同意、と言っているようなものではないか！
ないないない！

あんなちんくしゃ、超チビAカップ、童顔ド天然ストーカー女、例えこの体でなくとも無理だ全く！

俺はロリコンではないし、ストーカーに愛されて喜ぶ特殊な性格をしていないのだ。断じて。

確かにバカみたいに明るくて、美味しい猫飯作りはするが、それはそれ、これはこれ、だ。神に誓う、俺はあいつを彼女にすることはない、と。

「ま……それは、仕方ないよな」

さつきから羨ましがっていた貸照は急に真面目な顔で頷く。

彼も俺の体質の事を昔から少し知っており、この話題になると詮索せずに、話題を変えてくれる。

本当にいい奴だと思う、ただスケベなのがタマに傷なんだが。

「あつ、そういえば今日一時限目、体育に変更なんだって」

空気を読んだ真白が他の話題を自然に振ってくれた。正直ありがたい。

「ふぁーあ、面倒くせえ。纏わり付くんだよなあ音子の奴」

しかも授業を抜け出して、である。

欠伸をしながら、俺は坂道を歩いていく。

今日も一日あいつがやかましいんだろぅなあとと思うと、なんだか気が重かった。

「また音子ちゃんの話か、朝男」

ぼつり、と貸照が言い、眼鏡をくいつと上げる。

「ぶっ！！」

確かに、と僕は思い何故か吹き出してしまった。凶星過ぎる。

脳内で「にやははは！」という奴の声ハウリングする…までにはなつてないが、口を開けば奴の話に（文句ではあるが）なりそうだ。奴のペースにはまり過ぎだ。気をつけねば――

「にやはは、まーた先輩追い越しちゃったよ！何やってんの私！」

私が先輩を追いかけて転校した、公立パルナス高等学校へ続く坂道の左右に広がる商店街の路地裏。

そこで私は、数匹の猫達と戯れていた。

彼らは私の友達であり、家族。だからここにはよくご飯を持ってくるのです。

「ニャーオ！」

三毛猫のカサブランカが、私の肩に乗り、あくびをする。

私は嬉しくなり、思わずカサブランカを抱きしめる。

「慰めてくれるかカサブランカ！もうっ！先輩ったらなんたるツンデレ！」

本当、先輩つてば、こんなに可愛い女の子なのに、全く振り向いてくれないんだよねえ。

「ミヤミヤミヤミヤ！！」黒猫のフィラデルフィアが魚の骨をしゃぶりながら、私の靴にもたれ掛かる。

「そうかぁーなるぺそ！頭いいなあフィラデルフィアは！あの状態がツンなら、デレた時に凄く優しいんだ！きつとあんなことや、こんなことを…ふふっ！くっふふう！」

桃色の妄想をしている私の周りで、猫達が飽きれ顔をしている。そんな猫達の頭を撫でて上げると、すっかり元気になった私は、鞆を振り回して路地裏から飛び出した。

「にはは！ありがと！じゃ！今日も勉強してくるよ！！」

「ニャーゴ！」

日光を浴びた私は路地裏に手を振ると、坂道に戻り学校へと一気に駆け出した。

昨日のカラオケで誰が歌ってたか忘れちゃったけど、恋は紛争だね。頑張れ、私。

負けるな、私

きっと先輩も振り向いてくれるはず、私の本気の愛に――

ストーキング／マイウェイ「前編」（後書き）

ストーキング／マイウェイ「前編」読んで頂き、ありがとうございます。

よかったら感想を頂けたら幸いです、今後の執筆活動に役立てたいと思います。

ストーキング／マイウェイ「中編」

小さい頃、俺がまだ小学6年生だった時の話だ。

俺はよく家に来ていた一匹の小さな栗色の子猫と遊んでいた。

初めての出会いは俺の趣味である庭の手入れを、玄関先からそいつが見ていたのがきっかけだった。

俺はそいつを「ネココ」と名付けていた。

猫の子だから、ネココ。

手鞠くらいの大きさのネココは首輪がついており多分飼猫だったのだろう。

だが、俺は構わず名前をつけていた。

そして夏休みに入る頃、友人の貸照、雪と一緒に遊んでいた俺は、ネココが捨てられているのを見つけた。

「ねえ！見て見て朝男ちゃん！」

雪が、僕の服の袖を引っ張る。

僕はけだるそうに半ズボンのポケットに手を突っ込みながら、渋々彼女についていった。彼女に連れていかれた空き地には、段ボールが追いてあった。

「なんなんだよ雪！」

僕の問いに答えたのは、段ボールの中を凝視していた丸眼鏡をかけたオカツパ頭の少年、長崎貸照であった。

「捨て猫みたいだ… 朝男」

小さな段ボール箱の中には毛布が敷き詰められており、栗色の子猫が眠っていた。

それは、俺にとってはよく見慣れたネココであった。

「こいつよく俺ん家に来る猫じゃん！ネココって名前なんだぜ！」

得意げに言う俺。だが、貸照と雪は表情を曇らせ、互いの顔を見合わせていた。

「元気ないみたい、その…ネココ？ちゃん」彼女の言う通り、ネコ

コはいつもの元気が無いようだった。

あんな小さな体でも街中を元気に俺と遊んでいたネココが今では箱の中に収まっていた。

「俺もさつき見つけたんだが、動かないでふるふる震えてるだけなんだ。しかも、この貼紙を見てくれ」

貸照が段ボールの側面を指差す。「誰か飼って下さい」と綺麗な字で書かれていた。

「助け… なきゃだよな」

貸照は冷静だが、その口ぶりから助ける事自体に躊躇している様子である。

雪は何をしていいか分からず、慌てふためくだけであつた。

俺が助ける以外に、ネココが助かる道はなかった。

「病院行くしかないだろ！俺が直接連れてくから、雪は電話しといてくれ！！広島の家動物病院だ！！」

広島とは小学校のクラスメートの男子であり、親が小さな動物病院をしている。

だから、話をすれば分かってくれるはず。

お金は後で小遣いと、お年玉でなんとかしよう。

今はとにかく、助けなきゃいけない。

「あ！ああ分かった！！でも… 誰が飼うんだ、そのネココ？！」

貸照が言う、多分冷静な彼が一番考えていたことであろう。

捨て猫を助けても、こんな小猫、一匹では生きていけない。

だから、彼は助けるのを躊躇したのだろう。彼は冷たいわけではない、現実的なのだ。

だが、俺は叫んでいた。

「俺が飼う！！俺はいい子だから、親は頼みを聞いてくれるハズ！ちゃんと面倒見る！だから今は助けなきゃ…この猫は俺が助ける！力を貸してくれ！」

「ああ分かった！！走れ朝男！！俺は家で電話してすぐ駆け付ける！！！」

「う… うん！！私はネココちゃんのために家からタオルケット病院へもつてく！！」

二人の協力もあり、友達の親が経営してる小さな動物病院に連れていったネココは、すぐに元気になっていった。

俺は嬉しかった、ネココが小さなベッドの上で立ち上がった時には、泣いてしまったほどである。

ネココが退院し一週間程度で、ちゃんと一匹で街中を歩けるようになっていた。

俺は毎日、ネココを特別可愛がった。

そのせいとは言わないが、いつもは七月中に終わっている宿題が全く終わらなかった。

でも、楽しい日々は長く続かなかった。

八月の中頃の、雨の日だった。

ネココは道路に飛び出し、車に轢かれてしまっていた。

俺が家の前で動かなくなっていたネココを見つけたのは、登校日から帰ってきてからであった。

もうその時には全てが遅かった。

ネココは頭から血が出ており、形こそ全くといっていいほど崩れていなかったが、息をしていなかった。

だから俺は、今度は動物病院に行くことすら出来なかった。

「ネココ！！ネココ… 嘘だろお！！」

行き場を失った俺は、商店街中をあてもなく走った。

死んでしまった猫をどうすればいいかすら考えられなかった、死んだ事実を認めることが出来ていないのだ。

俺は泣いた、泣き叫んだ。声の限りに、叫ぶ。

「俺はどうなつてもいいから！だからネココを助けてよ！！神さま
ああ！！」

降りしきる雨の中、カサもささずに、冷たいネココを抱いて静かな街中を走っていた。

常日頃からいい事をしてきたから、家族を困らせたこともなかったし、宿題もサボったことはない。

だから、だから神様。

どうかこの小さな猫を助けて下さい。

こいつはまだ、生まれて何年も生きてません。

こいつはまだ、俺の作った猫飯を食ったことがありません。

こいつはまだ、オス猫と楽しく春の程よく暖かい縁側を知りません。

だから、俺はこいつに猫としてのありったけの幸せを教えてあげたいと思っています。

だから、神様――

冷たい雨に打たれながら、俺は普段は存在すら信じていない神様に頼んでいた。

「?!！」

「朝男… 落ち着いてくれ!! 落ち着くんだ朝男!!」

街中で俺を見つけた貸照と雪の二人に引き止められても、それでもネココの亡きがらを抱いて泣いていた。

悲しくて、悲しくて仕方なかった。

「朝男くん! もう土の中に入れてあげよう! うっ… 確かに、確かに可哀相だけど、死んじゃったんだよ!!」

「土の中だつて冷たいだろ! ネココは! ネココはお日様の下が好きだったんだ! 縁側でまた俺と一緒に寝るんだ!」

手放したくなかった、信じたくなかった。

あのネココが、死んでしまったなんて。

もう、一緒に遊んでやることが、出来なくなってしまったなんて。

俺は全然納得出来なかった。

しかし、それでも二人に説得された俺は、その日のうちに商店街から少し離れた墓地の近くにネココの墓を作ってしまった。

俺は最後まで傘をささなかった。

雪や貸照が自分で使っている傘を差しだそうとしていたが、俺は拒

んだ。

雨に打たれていないと、少しでもネココの痛みを共有しないと、と幼かった俺は無力な自分に小さい、小さい罰を与えた。

俺は離れる際、墓にその日の学校の帰りに買った金属製のタグを置いておいた。

本当なら、奴の新しい首輪に付くはずだった、ネココと名前が刻まれた真っ赤なタグ。

雨に打たれて朦朧としていた俺にはその目立つはずの赤いタグが、涙で滲んで見えなかった。

全く傘をさしていなかった俺はずぶ濡れになり、翌日、高熱を出して倒れた。

そして、その風邪が治る頃、俺の体にある変化が起きていた。

雨の夜になると、俺は猫のような耳と尻尾が生えるようになってしまった。

最初は困り、悩み、苦しんだ。

そして数週間後、俺は雨の夜に自分が猫人間モドキになってしまうようになったたその「意味」を、考えるようになった。

俺は、この人間の体の変化と引き換えに、ネココが人間に生まれ変わったんだ、と思うことにした。

その考えは高校生になった今も変わっていない。

中学生の頃に、あいつの墓に置いたタグが無くなっていたからだ。

奴が生まれ変わって、今、あの真っ赤なタグを持っていてくれるに違いない。

ただ無くなっただけ、とは俺は考えない。そんな悲観的な考えは持たない。

だから俺は、この体になってしまった事に後悔はしていない。

それが「彼女を作らない主義」の本当の理由。

正直に言えば「女と付き合えない理由」というのが正しいのだろうが、俺は恥ずかしいから、「彼女を作らない主義」と名前をつけている。

俺が普通の高校生ではない部分。

この体になった事には、後悔していない。

だけど、こんな体を誰かに晒す勇氣など俺は持ち合わせていない。
無理だ。

でもネココが人間になって今、幸せになってくれたのなら御の字だ、
素直に神に感謝する。

そう俺は、今でも思っている――

今までの回想は、俺の見た夢だったらしい。

家の2階の自室で寝ていた俺は、背中にもぞもぞした感覚を覚えて
目を覚ました。

「ひいっ!!」

そして、隣に寝ている音子に気づき、情けない悲鳴をあげた。

音子は昨日と同じ制服とパーカーを着ており、体から石鹼のような
いい匂いがしていた。

「あ、先輩おはようございますう……」

寝ぼけ眼を擦り、音子はベッドから起き上がった。

「な……何をしている、音子」

恐る恐る質問する俺。

しかし、彼女はいつものように笑わず、表情を曇らせた。

初めて見る、表情であった。

「起こしに来たんですが、なんか眠りながら泣いているから心配で
……添い寝してました」

しゅん、となる彼女からそれを聞いて、俺は俯いた。

「そうか……」

ベッドに再び寝そべろうとする俺だったが、何かが引っ掛かる。

こいつ……俺の部屋に入って来ていやがる。

「って!! ついに不法侵入を働いたか貴様はーっ!!」

「でも、先輩泣いてた!! 私は先輩が泣いていたら放っておけない
んです!」

なぜか今日の音子は引かない。

謝らない、鑑みない、人の話を聞かないのはいつものことだが、俺はあんな夢を見た後だ、気分が大変悪かった。

本当に、理不尽に怒ってしまうほどに。

「だって先輩は… だって私は、あなたの——」

言いかけて、音子は口を押さえた。

はつきり言っていていつもならば軽く小突くくらいで済ませているが、今日はそうにもいかなかった。

俺の、一番入って来てほしくない土足で入って来られた気分になってしまっていた。

「そんなの… 誰が頼んだんだよ」

彼女にとっても、例え彼女がストーカーであつても、俺の怒りは少し理不尽であると思う。

方法はどうであれ、彼女は俺が心配だったわけだから。

だが、止められなかった。

「もう本気で俺に付き纏うな!!」

俺は、叫んでいた。

「!!」

彼女はベッドの横に立ち上がり、ぽろぽろと大粒の涙を流して泣いていた。

我に返った僕は、初めて見る彼女の泣き顔を見つめて、驚いた。

あんなに明るい音子が、太陽みたいに笑う彼女が、今は顔をぐしゃぐしゃにして泣いていた。

「な…」

「さっ! さよなら!!」

音子は身軽にジャンプするとベッドを飛び越し、その横の窓際に移っていた。

「なっ… 音子っ!!」

俺は叫ぶが、音子はそれと同時に屋根から飛び出していた。勿論二階の窓からである。

屋根づたいに、どこかに行ったというのか。

ありえない、猫じゃあるまいし――

「なんなんだあいつは……」

追いかける気力が湧かない、第一、追いかけて俺に何が出来るのだ。彼女と俺の生暖かさが残ったベッドに倒れ、俺はうなだれる。

後味の悪さだけが、俺の胸に残った。

そんな俺の視界に、何か小さなものが映った。

「これは――タグ？」

窓際に古ぼけた、小さなタグが落ちていた。

俺は横になったままそれを手にとり、眺めた。

多分、音子が落としたものである。俺の家にはこんなタグは無かった。

が、俺はその赤いタグを二度見してしまった。

そう、そのタグに見覚えがあったのだ。

……

まさか、彼女は、もしかしたら。

「音子――ネココ、猫……」

俺は彼女の名前を、そして思い出の猫の名前を口に出していた。全てが、繋がったような気がした。

「まさか――奴は……」

俺はベッドから飛び起き、2階から駆け降り、靴を履いて玄関を飛び出した。

音子を、俺は追わなければいけない。

音子を見つけて俺は確かめなければいけない。

俺は、曇り行く空を見上げながら寂れた商店街の中を走り出していた――

ストーキング／マイウェイ「中編」(後書き)

ストーキング／マイウェイ、次回は完結です。

中編を最後まで読んで頂き、ありがとうございます。

ストーキング/マイウェイ「後編」

暗くなっていた街中を探していた俺は、数十分で音子を見つけだすことが出来た。

商店街は小さく、彼女も流石にそこを離れることはないだろうと思っただけ、彼女がネココだった時に行った場所を重点的に探していたのだ。

「ふえええん！！先輩のばかあー！！」

俺が見つけた音子は、泣きじゃくっていた。

場所は、ネココの墓の前であった。

「お前： やっぱり、ネココだったのか」

泣きながら走ったからであろう、音子がいつも被っていたフードが外れた。

そしてセミロングの髪の毛の頭の左右に、猫の耳が生えていた。

そして猫の尻尾がスカートの下から覗かせていた。

俺は、これで彼女がネココの生まれ変わりであることを確認した。

俺も雨の日に猫人間になるが、ほぼ同じものが生えるのである。

もっとも彼女は、耳だけは常に生えていたのであろう、だからフードを被っていたのだと思う。

「ひつぐ… えつぐうぐっ！」

こくんこくと頷く音子。

「ごめん… 気づかなくて、ごめん」

俺は謝った。

謝るしかなかった。全面的に俺が悪かったのだ。

「ふええっ！謝るなら優しく… してぐださいよー！！」

しかし彼女は単なる謝罪では納得してくれなかった。

優しく… 俺は女の子と付き合ったことがないから、どうフォローしていいかわからなかった。

「音子…」

俺は泣き続ける音子の頭を撫でようとする。
すまない音子、思い切りネコ扱いしてしまったかもしれない。
だけど俺はお前を撫でるよ、家の縁側でやった時みたいに。
今の俺には、それくらいしか出来ないから。
俺の前に再び現れてくれてありがとう、俺を好きでいてくれてありがとう、という精一杯の気持ちを込めて――

「ちょっとは… 落ち着いたか？」

数分後、音子は泣き止んでくれていた。

俺はひたすら気持ちを込めて、撫でて、撫でて、撫でた。

すると彼女は気持ち良さそうにしてくれて、少しずつ落ち着いてくれたのだ。

そして俺達は先のお墓の近くにある、小さな川岸の草むらに座っていた。

草と砂と川の匂いがした。

「先輩、ずるい。デリカシーが無くて女の子を大泣きさせておいて、弱点をついてすぐ機嫌を直させて…」

「自分でも調子いいな、と思ってる。悪い」

すっかり泣き止んだ音子は草むらに寝転び、俺の膝枕に頭を乗せた。
「でも先輩、ごめんなさい。私のせいで… 体が変わっちゃったんですよね？ 神様に聞きました」

音子の顔は膝の上で真っすぐ俺を見つめる。そして謝罪の言葉を口にした。

「神様が… いたんだな、神様」

自分の体の変化や、ネココが生まれ変わった事自体がかなり驚くべき事であるため、神様がいても俺はあまり動揺しなかった。

いる、と前々から思っではいたからだ、良し悪しは別として。

結局、全ては良い方向へと向かってくれたが。

「はい、でも先輩には私がネココだって言えないペナルティーを神様に付けられて。」

神様もわけのわからない事をするなあ、と思った。

だが、その神様のおかげで今、俺はネココと……いや、音子と一緒にいられるのだ。

だから感謝こそすれ、文句を言うなんてことは有り得ない。

全ての願いは全て、全て叶えられたのだ

「だから私……気づいてもらえるように頑張ったんですよ、空回りだったみたいですけど」

しゅん、となつてしまった音子の頭を、俺はまた撫でた。

「最終的に気づけたんだから許してくれよ、ギリギリ合格だろ？」

ネココの飼い主としての自分に合格を出してみて、俺は思った。

願いを叶える代わりに神様は試したのかもしれない、俺を、俺達を。彼女がネココの生まれ変わりと、気づけるかどうかを。

二人の繋がりには本物だったのか、を。最後にタグを落とされてやつと気づいたので、本当にギリギリの合格ラインだと自分でも思うがあとは、しゅんとなつてしまった彼女を笑顔にしてあげられれば万々歳なんだが。

「やーです、猫的には感謝しきれませんが、女の子としてはまだ先輩に泣かされたままです。」

そうもいかないようである。

膝の上で、そつぽを向く音子。

「どーせ私みたいなちんくしゃロリコン御用達体型のうるさいストーカーなんて相手にされませんもん」

むくれる音子、まるで甘える猫である。

確かにちんくしゃとも言ってしまったし、色々なことを言ってしまった俺が悪い。

だから俺は言葉にしなきゃならない。

今の自分の気持ちを、全て。

「ストーカー呼ばわりして悪かった、音子。年頃の女の子なのに、いっぱい傷つけたと思う。でも俺は……俺はお前が好きだ、抱きしめてやりたくなる小さい体型も好きだ、俺を真つすぐ見つめてくれ

る瞳も、猫みたいな語尾のかわいい声も、耳も尻尾も、頭の先から爪先まで、中も外も、前世も現世も来世まで全部、全部、全部大好きだ！！これからもずっと、ずっと永遠に俺と一緒にいてくれ！！」俺の告白で、一瞬で音子の表情に太陽よりも眩しい笑顔が蘇る。本当にコロコロと表情が変わって面白い女だよ、と俺は思った。

「ふにゃーん！！」

音子は立ち上がり、俺の背後から抱き着く。

俺も立ち上がり、その小さな体を抱きしめる。「ちょっと調子良すぎか？俺… あんだけ拒んどいて」

俺の頭にも罪悪感が残る。だが、それも彼女なら否定してくれると思う。

なぜか、そう思う。

「い、いいえ！！ふにゃーん！！大好き先輩！！」

彼女はぐりぐりと俺の胸に顔を埋める。

「ふにゃーんいい匂い！！先輩… 大好き！！大好きい！！」

終わり良ければ全て良し、ということなのか、ありがたい。いや、終わりではないか。

ここから、始まる。新しい日々が。

「俺は、もつと好きだと思うぞ。だから、キスする。させてくれ。」顔を埋められ、抑えの効かなくなった俺はとんでもないことを言っていた。

今、俺は赤面していると思う、自分でも分かる。

したことがなかった、キスというものを。

だから、こいつにくれてやりたいのだから。

そんなヘタレな俺の、初めてを。

そして奪ってやりたいと思うのだ。

こんな純情で無垢な、猫みたいな女の、初めての接吻を。

「ふにゃー！！」

音子は真っ赤に赤面し、手をジタバタとさせるが、俺は一気に迫っ

た。

「ふあっ…」

「ん…」

俺達は何度も、何度も、何度もキスをした。

今まで会えなかった分、今までお互い寂しかった分。想い続けた分。俺が音子に冷たくした分。音子が俺にイチャイチャしたかった分。あとは、今の互いの欲望にまかせた分…

音子の家までの、帰り道。

両端に数軒の家があり消えかけた電灯が数本並ぶ、下り坂。

俺と音子は手を繋ぎながら、ゆっくりと歩いていた。

「ご… ごちそうさまでした、うっぷ。ちょっと酸欠気味ですっ」
真っ赤になった音子は耳をピクンピクンとさせながら、余韻に浸っていた。

「ふう…」

俺も、余韻に浸りながら、音子を見つめていた。

他の物が視界に入らなくなるぐらい、音子を見ていた。

「もう… 何処にも行くな、ずっと傍にいてくれ。ずっと、ずっとだ。」

俺が言うと、音子はいくんと頷く。

そして笑ってくれた。

「離れるわけじゃないですか、先輩！…私、ストーキングは得意なんですから」

俺の手をギュツと握りしめる音子、俺もその手をギュツと握りしめる。

そして、俺達はもう一度軽くキスをしていた。

今まで気持ちがいずれ違っていた分、互いに積極的になっているようであった。

「ははっ！よし、今度二人でなんか食べに行こうぜ！」

「じゃあ私、ファミレスでの伝説のストロー二本刺しやってみたいです！」

音子が目をハートにして懇願し、ぴよんと跳ね上がる。

「俺にぁーんするんだぞ、音子！」

今度は俺が音子にねだっていた。

「はい！」

音子は笑って、またぴよんぴよん跳ね回る。

もう俺と音子は離れることはないだろう。

いや、ない。

そう断言する。

今、俺は神様に再び誓いを立てた。

一度は叶えることが出来なかった、誓いを。

彼女はまだ、恋人と食べるランチの美味しさを知りません。

「食い終わったら、またキスするんだぞ！」

彼女はまだ、恋人と散歩する景色の美しさを、知りません。

「は…はい！」

彼女はまだ、恋人と共にまどろむ日だまりの暖かさを知りません。

だから俺はそんな彼女に、男として出来る全ての幸せを与えてあげたいのです。

彼女と幸せに生きていきたいのです。

また生まれ変わっても、例え今度は人でなくても、ずっと、ずっと共にいたいのです。

「そんなキスで始まり、一日中イチャイチャして、キスで終わる毎日が、ずっと続くんだぞ！音子！」

勿論俺は、そのための努力は惜しみません。

俺は俺に出来る全てを彼女に捧げます、だから――

「はい！！にやんでも来いです！！」

だから神様、こんな俺達を、どうかこれからも見守っていて下さい――

ストーキング／マイウェイ「後編」（後書き）

ストーキング／マイウェイはこれにて完結です。
最後まで読んで頂き、ありがとうございます。

因みに後編をコタツの中で執筆してる時に、戸を器用に開けた黒猫が縁側から私を見つめていました（笑）

この黒猫は最近よく家に来て台所のパンを袋ごとパクっていく悪い奴なのですが、ネココみたいに車に轢かれないか心配です。

私も車を運転する身なので気をつけなきゃなあ、と思いました。
すみません、余談でした。

それでは、また不思議の世界でお会いしましょう。
感想お待ちしております。

変空2 僕の初変を君に捧げる (前書き)

変な男に恋をした、ボーイッシュな高校生が見上げる空、略して「
変空」

これはその「変空」の続編。

変空2 僕の初変を君に捧げる

私の名前は真昼之空月我、まひるのそら・つきが公立高校に通う女子高生。

私には、好きな人がいます。

その人はヒーローに憧れ、ヒーローになろうとする、緋色先輩。

この物語はそんな先輩を好きな、私の物語。

神奈川県田舎町、あかつき町。

そこにある公立アヴァランチ学園高等部の屋上で、その物語は始まります。

晴れやかな空が広がる春の日、私は屋上で緋色先輩ともう一人の先輩と一緒に昼食をとっていました。

「あ、先輩。お茶飲みますか？」

少年とよく見紛えられるショートカットに、すらつとした体、そしてそれを包むセーラー服。それが私であった。

私は弁当箱に蓋をしながら、赤いバッグからペットボトルのお茶を取り出す。

最近はい出しをせず、朝お弁当を作ることが多くなったが、飲み物だけは自販機で買っている。

「あ、欲しい欲しい！下さいプリーズ！！やっぱ食った後はお茶だよな！！」

緋色先輩はナハハ、と笑いながら、私からお茶を受けると、ペットボトルの蓋を開け口をつける。

彼が私の好きな先輩、もゆま・ひいろ最優真緋色先輩。

この学校では変な名前とか言われてるけど、私はこの名前好きです。最も優しき真のヒーロー、まさに彼の生き方を現した名前だと思います。

緋色先輩は今日も学ランの中に青いジャージという着こなしをしており、最近伸ばし始めた茶髪をかきながら、ペットボトルのお茶を飲み干す。

「もう、緋色。食べてる時は髪いじんないの」

緋色先輩の隣に座る少女は、あおきみどり・ももこ青黄緑桃子先輩。

肩まで届くふわふわとした髪にぱっちりとした瞳、完璧なモデル体型、故に私と違い、出ている所が出ている。

ボーイッシュとよく他の女の子と違い、女の子らしい女の子だった。桃黄先輩は二週間前に転校してきた緋色先輩のクラスメイトで、活発で快活な少女。

「ったく、桃子は細かいところさいよなあ……」

小さく愚痴をこぼす緋色先輩の頬に、私はご飯粒を見つけた。

これはチャンスなのだろう、多分。よく私が読んてる漫画でありがちな展開。直接口で取ってあげる変則パターンもあるが、ここは基本パターンでいってみようと思う。

私は勇気を振り絞る。

「あ、先輩！ご飯つぶが！」

私は勇気を出して、先輩に向かって指を伸ばす。

「お、ああ……わりわり！」

先輩は少し照れると、鼻をポリポリとかいた。

「偉いのね、真昼之ちゃん」

ふふつと笑いながら桃子先輩が言う。

「え？いいえ！！そんな事ないですよ！ハイ！」

謙遜する私の気持ちとは裏腹に、緋色先輩はうんうんと頷いていた。「そうだな、俺がいつも突っ走れるのは、月我が支えてくれるのが大きいと思う」

緋色先輩が感慨深げに頷く。

私はこの上なく嬉しかった。

私は確かに、自慢でも何でもなく先輩のために頑張っていた。

お昼ご飯も用意するし、小さな怪我だったら手当する、何でもしてあげたいのである。

無力な自分に出来る精一杯のことを。

その精一杯を、認めてくれた。

これはチャンス！と私は思った。

自分の気持ちを伝えるには、もう今しかない。

屋上には私と桃子先輩、そして緋色先輩しかない。

言うなら、今だ――

「せ……先輩」

どもらないように、一気に言おうと思った。

が、大きな声が出て来ない。

だが私は続けた。

「先輩……その、わ……私」

「ん？」

けたたましい警告音が、先輩の腕のブレスレットから屋上に響き渡る。

「ん？！また怪人か……！」

『B地区にて怪人出現、あかつき町329番地、シヨッピングモール街の近く――防衛隊に応援を要せいせよ、「サザンクロス」出動要請――』

ブレスレットは青く点滅し、先輩達の表情が変わる。

ブレスレットは先輩が自作した警察や防衛軍の無線を傍受するための機械であり、先輩は警察や防衛軍の関係者などではない。

ただの高校生である。

だが戦うのだ。

相変わらず、この世界には怪人による殺傷事件が起こっており、それを倒すヒーローや防衛軍も存在しており、そのヒーローの中で最も生身で最も普通の人間である緋色先輩の戦いも続いていた。

ちなみに通信の中で呼び出されていた「サザンクロス」とは最近巷で有名なヒーローで、銀河連邦警察に所属する宇宙刑事のあだ名である。レーザーブレードで敵を十字に切り裂くため、サザンクロスと呼ばれている。

しかし、そういったヒーローと違い無所属で、先輩はほぼ生身で戦う。

悪の秘密組織に改造されたわけでもなければ、超古代の力を秘めたベルトを持っているわけでもなく、未来の精神生命体が憑依するわけでもない、普通の普通の普通の少年である。

大怪我が多いから少しだけ、怪我の回復が早い、くらいしか特出した能力はない、あとは全てその精神力でカバーしている。

だから、先輩は戦える。

先輩は、最優真緋色はヒーローだから。

「行くわよ、緋色！！」

桃子は立ち上がり長い髪をポニーテールのように縛りあげ、スカートの埃をぱんぱんと払う。

「ああ！」緋色先輩は学ランのまま、一足先に走り出していた。

「無理すんじゃないわよ！！フオローが大変なんだから！！」

桃子先輩は、どこからか取り出した折り紙を枚折り込み、三つの紙飛行機を作り上げる。するとその三つの紙飛行機はふわふわと宙に浮き、その材質は鋼と化した。

桃子先輩は私や緋色先輩のような普通の人間と違い、特殊な能力をもっていた。

それが、「鉄折紙」はがねおりがみ折った紙が鋼のように硬くなり、自分の意思自在に操ることができるようである。

「分かってる！！」

ヘルメットを被り、木刀を構える緋色先輩。

金属バットを使った方がいいのでは？と以前提案したが「ヤンキーみたいでやだ」という事で却下されてしまった事があります。

「着装！」

先輩が被ったヘルメットの黒いバイザーの中に、二つの黄色い鋭い瞳が光る。

このヘルメットは、防衛組織の隊員が使っていた純正品のヘルメットをインターネットのオークションで落札し（いいのかな？）、額にVの字のアンテナをくっつけた代物、と緋色先輩が説明してくれた。

因みにアンテナは、完全な飾りみたいです。

確かに今まで事あるごとに大敗してきたバイクのヘルメットよりも頑丈みたいで、今だに傷一つついていないようです。

ただ首から下は今までと同じように生身なので、私は不安だ。

毎回、頭以外のどこかしらに擦り傷、打撲などの痛々しい怪我をして帰ってくるので、毎回とても不安である。

十数回、骨折したこともあり、その時は毎日お見舞いに行った。

でも、私は緋色先輩を応援しています。

私は、ヒーローである緋色先輩が好きだから。

「ひ… 緋色先輩!!」

呼び止める私に対し、ヘルメットを被った緋色先輩が振り返る。

「わりい！弁当とシート片付けといてくれ！俺も早く片付けてくる!!」

黒いバイザーの中に二つの鋭い黄色い目がありヒーローとして成立しているデザインの頭部から、似つかわしくない日常的な台詞が出る。

緋色先輩は、屋上から校内へとドアを開けて階段を駆け降りていく。

そして、その後に全く生身の先輩が続く。

「あんたが先に片付けられんじやないわよ!!」

桃子先輩は軽口を叩きながら、緋色先輩を追い鋼の紙飛行機と共にドアの中に入り階段を駆け降りる。

「うつせえ!!」

校内から、緋色先輩の叫び声が響く。

ぽつんと一人残された私は三人分の弁当箱を一カ所に集め、シートを畳む。

暖かいはずの春風が、私に吹きすさぶ。

緋色先輩がヒーローならば、ヒロインは桃子先輩なのだろうか。

特撮ヒーローや漫画なら、あのポジションにいる人をヒロインと呼ぶのであろう。

そして私は、結局花を添えるために出された追加キャラ扱い、なん

だろうか。

「… はあ」

ため息が、出てしまった。

「大丈夫？」

階段を上がり、校内から二人の少女が現れる。

親友のまっぴーとよっぴーである。

「あ、まっぴー、よっぴー」

シートを畳み終えた私は振り返り、二人に気づく。

「あ、… じゃない、大丈夫なの？あの先輩手強そうだよ？」

まっぴーは短い髪をくしゃくしゃとかきながら、首を傾げる。

「まだ転校して二週間くらいだよ？なんなのあの泥棒猫！」

小さな体、眼鏡に腰まで届く長い髪、という出で立ちのよっぴーは眉間にしわをよせ、ふるふると拳を振り上げる。

二人がそれぞれに桃子先輩についてきつく言っていると、私はいつもフォロ―に入る。

あの人は別にそんなんじゃないよ、悪い人じゃないよ、と。

「大丈夫。私、頑張るから… 多分、大丈夫」

ブイサインをして、笑ってみせた。

少し前の私と違い、今の私は少し強い。

先輩も強い、多分恋敵になる人も強い。

だから私も、私なりに強くならなければ。

「健気やのおー！その気持ち詰まった胸、ちょっとオジサンに揉ませてみ？」

「私の嫁にくれ！」

二人がおよよと泣きながら感動し、勝手な事を言う。

「だが断ります！」

私が笑顔で断ると、二人はわははは、と笑う。

そして私も、笑った。

そうだ、今度は学ランにも防護するための鋼鉄を縫い付けてあげよう。

笑いながら、私は閃く。

そう、現実 is 厳しい。

ヒーローもヒロインも女の子も負けてられないのだ。

私は私のやり方で、様々なものと戦うのだ――

変空2 僕の初変を君に捧げる (後書き)

最後まで読んで頂きありがとうございます。

今回は私が「高浜ゆりえ」時代に書いた「変空」の続編でした。

「変空」はいろいろな感想を頂けたため、前々から続編を作りたい作品の一つでもあります。

また、「スキマクラブ」内で続きを作りたいな、なんて思いますが、でも、どうなんだろ…

桜咲く坂を君と「前編」(前書き)

普通の青年、終刀刀刀刃刃は幼なじみの東園寺他界さいおんじたかいの紹介でクラス
の美少女、桂包丁裏葉かつらばちうらはと付き合い始めた。

しかし他界も刃刃のことが好きだと言うことを気づいてしまい、刃
刃も魔がさしてしまい、関係をもってしまう。

そして、英雄王である美少女サイバーに助けられ「直死の魔眼」に
目覚め、無限のメモリー「インフィニット」を巡るオルタネイテ
ェブ聖杯対戦に巻き込まれていくことに…

桜咲く坂を君と「前編」

僕の名前は、しゅとうちかたな・ばじん終刀刀刀刃。

変な名前と言ってくれるな、知ってるよ。

僕は神奈川県あかつき町にある公立アヴァランチ学園高等部の二年生で、普通の、ごく普通の少年である。

でも、僕には今までコンプレックスがあった。

僕は未だに女性と付き合ったことがない、悲しい運命の少年である。勿論、童貞である。

女の子の体に触れたことが、ない。

しかし、最近おかしいことが起こっている。

妖精が見える魔法使いになりたくないな、と思っていた僕に、ついにモテ期が来たのである。

クラスの女子全員が僕に優しいのだ、僕の勘違いではなく、熱い視線が学校ではいつも突き刺さるのだ。そして、今日も――

春、別れと出会いの季節。

いつもと変わらない朝、学校へと繋がる幾つもの桜に挟まれた坂道を、カカシのように縦に長い体つきをした青年が歩いていて。

青年はあの山本裕典をデチューンしたような顔をしており、肩まで伸びた長髪をかきわけ、寝ぼけ眼をこすっていた。

モテないオーラが、黒い学ランに包まれたそのカカシのような体漂う。

その青年こそ、僕である。

「ふあゝ今日の授業も、授業なんてなくなればいいのに」

でも、授業もクラスの女子に優しくしてもらえるから、あってもいいかな、と思った。

「うふふ、おはよう刃刃君！一緒に学園行こ？」

僕の背後からまるで鶯のような綺麗な声が響き、僕の眼前に少女が

回り込む。

この少女の名前は、至高宝しこうたから・かれん可憐。

可憐は綺麗な金髪をポニーテールを揺らし、モデルのような体型で僕に近寄る。

二重の瞳が、真っ直ぐに僕を見ていた。

「あ！…ああ！俺で良ければ」

僕は少しどもりながらも、嬉しそうに答える。

可憐は成績優秀で品行方正なお嬢様だが、最近よく僕に話し掛けてくれるのだ。

まさか、僕に好意を？と思っていたが、その予感は今この瞬間、確信に代わった。

「というか…俺でいいの？」

一応僕は確認をとる。人違いかもしれないからだ。

確かに僕は山本裕典をデチューンしなような顔をしているが、彼女にはもっと釣り合う男性が五万というはずである。

解りやすく説明するなら、彼女のスペックはMSで言うならばキュベレイ、僕はせいぜいジムである。

解りにくい？ごめんなさい。

「うん！！というか…刃刃君じゃないとだめなの、お願い！」
どうやら人違いではないようである。

続いて、ドッキリじゃないよな…と、僕は不安になる。

だが、こんなモテ期、満喫しないテはない。

「な、なんだか嬉しいや！行こう行こう！…至高宝さん？」

一応、周囲を見回して、僕は答える。

そして、至高宝と、姓で呼ぶ。

人生始めてであった、女子と一緒に登校することは。

「ふふっ、よかったあ…でも、名前で呼んで、刃刃君？」

可憐はニコツと笑うと、僕のすぐ隣に寄り歩きだした。

「え？あ…うん、可憐さん」

彼女の要求に答え、名前で呼ぶ僕。

舌が、甘い名前で溶けるところであつた。

そして僕も彼女の歩幅に合わせて、歩きだす。

お互いの体が、近かつた。手を伸ばせば、彼女のすらっとした手に触れてしまう距離。

「ねえ、刃刃君？」

可憐が更に近寄り、僕は赤面する。

「なっ？ふははっ、なんでしょう可憐サン？」

彼女に触れないように慌ただしく腕を組み、余裕の表情をしてみせる。

「刃刃君はどんな女の子が好きなの？」

にこにこ笑いながら、彼女は僕に問い掛ける。

僕は耳を疑った。

「?!」

声にならない、声が出て、一気に挙動不審になる。

何を言っているのだ？と僕は思った。

「え、えっとうですね、ん」

僕は困った。

普段からモテてる気の利いた人なら、「可憐さんみたいなおしとやかな娘かな」と、返せるのだろう。

だが、スペックの低い僕にはそんなスキルはない。

「そ、そういう可憐さんは？」

と、これが精一杯の返しであつた。

「ん」それは、私に言わせるの？刃刃君……」

赤面して立ち止まり、静かに俯く可憐。

そして、こほんこほんと咳ばらいして、意を決したように顔を上げた。

僕といえば、先ほどから全く動けなかつた。

よく考えてみたら、もし、もしの話であるが。

あくまでもし、もし彼女が僕のことを好きだとしたら、彼女に告白を要求するような行為ではないか。

僕は自分が必死で返した言葉の意味を、噛み締める。

「それは、ね…」

だが、彼女は口にしようとしている。

おそらく僕が、例えに出した、告白の言葉を。

彼女と同じように赤面し、ゴクリ、と生唾を吞んでしまう。

横目でちらつと一目を気にする。誰もいない。

不思議なほどに、誰もいないのである。

「それは…」

僕は口を開き彼女の言葉をオウム返しにしていた。

「それは… ね」

「!？」

彼女は、僕の手を掴み真っ直ぐに見つめる。

僕の心臓は、爆発しそうになっていた。

そして彼女は唇をまるで雛鳥のように突き出し、一気に接する。

「え?!」

僕は心臓が爆発しそうになった、いきなり過ぎである。

告白ですら、こんないつもの朝の登校時

には早過ぎるし、何より彼女と僕はあまり話したことはない。

何もかもが早過ぎた、少女漫画で言えば、新連載の巻頭カラーでベ

ツドインしているようなものであった。

先程からかなり地の文が無駄に長いが、この瞬間を僕がかなり長く感じているという、スローモーション的表現なので、悪しからず。

そして今、桜が舞い散る坂の途中で、名前の通りに可憐な少女が僕の唇に向かってキスを――

「刃刃く――」

そして。

そして、有り得ないことは起こらなかった。

いや、有り得ないことは起こった。

しかしその、有り得ないことは、彼女の突然のキスではなかった。事態は、一瞬であった。

「は… あ?! え… ?!」

僕は目を疑った。

そして、次は眼球とこの頭蓋骨の中に収められた脳みそを繋ぐ視神経を疑った。

次に、脳自体を疑った。

確かに僕の頭に入っているのは、毎期末テストで追試ギリギリのお粗末な脳みそである。

だが、まさか現実を起こっている事象を正確に把握出来ないほどに異常をきたしているとは、自分では思えなかった。

勿論、僕は尿検査にも引つ掛からないはずだ。ならば、今この自体は何なのだ?

彼女がキスをする所までは納得出来る。

だが、その次の瞬間からだ――

いや、もしかしたら最初から夢だったのかもしれない。

夢オチという奴だ、それならば全ての説明がつく。

そもそも、僕がモテること自体が嘘だったのだ。

全てが作り話。

そんな都合のよい展開、小説サイトでちびちびラノベモドキを晒している奴の妄想に過ぎない、ということなのだ。

そう、思うことにした。

。全ては夢、幻、妄想だったのだ、と。

しかし、目の前の事象は現実であった。

なぜなら――

「うそ… だろ!？」

そう、僕は夢から覚めないのである。

覚めない夢ならば現実、と思うしかないのだ。

僕は、やっと声が出ていた。

そして、目を擦る。が、震える足は姿勢を崩し、カカシのような体はそのままその場に尻もちをついた。

彼女は、至高宝可憐は僕と唇と唇が触れる瞬間――

真っ二つに割れたのだ。

切り裂かれた、と表現した方が正しいのだろうか。

全く見えない刃物のようなものが、まるで刺身になる魚よろしく、彼女の体の中心から、鼻、ヘソ、股間の真ん中という真ん中を通過したのだ。

「こ… こんなの、こんなの… ありえない」

その結果、彼女は周囲のアスファルトを赤く染めて、尻もちをついた僕の眼前で、二つの生暖かいタンパク質の塊になっていた。

血飛沫を浴び、僕の学ランの黒は滲む。

「な… なん、なんだ？」

恐怖のあまり叫ぶことすらまもなく、同じような言葉を繰り返す。もし叫んだとしても、誰もいないのだ、桜が両端に並ぶ一直線の坂の周りに。

恐怖の中ですら気づくことが出来た、というか、やっと気づいたのだ、人の気配が、ない。

僕は、腕と足を使い地面を這い、腰を抜かした態勢のまま、可憐だった塊から遠退く。

立ち上がることも出来ない。

すると、肉塊のすぐ後ろから少しずつ、人の形をした影が姿を現した。

「ふふふふ… 汚い星の生き物は、散る様も汚いのねえ」

恐らく、可憐を真っ二つにした化け物は低い声で笑った、まるで殺戮を楽しむかのような、恐ろしい口調。

その声に僕は戦慄を覚えるとともに、化け物の輪郭がやつとはつきり見えた。

その化け物は、女性であった。

腰まで届くくらいに長く艶やかな銀色の髪、前髪は眉に触れるくらいの長さ。

切れ長で釣り上がった大きな赤い瞳に、すっと通った鼻。紫色のルージュが引かれたぷりつとした唇。

「ふふふ…」

そして顔以上に異質なのは、その服装である。

衿の部分と長い裾に爪のような突起がついた、まるで彼岸花の花弁を象ったような赤と黒のグラデーションが目によくないドレス、巨大な瞳が横一線に描かれた黒いスカート、すらっとした生足に赤いヒール。声優である井上喜久子さんを24歳まで若返らせ、死に神のようなドレスをコスプレさせたような姿である。そして露出された胸元や生足と相まって、この存在が普通の女性なら妖艶さすら醸し出すのだろうが、僕はあまりに人間離れしたその化け物に恐怖するしかなかった。

「あっ」

その女性の姿をした化け物は、しまった、というような表情で、思い切り肉塊を踏み潰していた。

あまりにリアクションが簡素で、人間の命が、その化け物にとってまるで小石に躓いたくらいの軽さであるように思えた。

「いやだわ、一張羅が汚れてしまった。気に入っているのに、コレくすす、と長い指で口を抑え、ヒールにへばり付いた臓物をアスファルトに擦り付け、化け物は再び僕に向かって歩き出す。

「どう、落し前をつけてくれるのかしら」

化け物とはいえ、とても理不尽なことを言う。

そして、冷たく笑ったまま、僕の眼前、3メートルくらいの距離に接近し、赤い眼で真っ直ぐに見つめてきた。

僕は戦慄すらする暇がない、まるで全身の血を全て吸い付くされたような感覚であった。

化け物の瞳に、腰をぬかしたまま動けない僕が見えた。殺される。

確実に、殺される。

僕は、死ぬ。

シヌ。しぬ。息をしなくなる。死んでしまう。

走馬灯が回るのを、感じた。様々なことを、思い出していた。

僕はまだ人生の中で楽しい事などまるでなかったのに、真つ二つに
されて、血飛沫で、冷たい肉の塊になってしまふのか。
僕は死ぬのか。

死んだら、どこへ行くのだろう。

雑然と考えてしまふ。

多分、可憐と同じように切り裂かれ、血飛沫を散らしながら死ぬの
だろう。

そうだ、そしたら多分天国に行くのだ。

まさかこんな死に様で地獄に堕ちるほど、神は理不尽で残忍ではな
いだろう。

今のままでも十二分に理不尽極まっているというのに。

もし天国に行ったら、なんで僕を好きになったのかを、可憐に聞い
てみようと思う。

そしてあわよくば、天国で童貞を卒業するのだ。

そう、死ぬのだ。

受け入れよう、仕方ないのだ。

どうせ人はいつか死ぬ。

美しい女性の皮を被った、恐ろしい化物を前にして、僕は気を失い
そうになる。

受け入れよう、この死を――

だが。

しかし。

だがしかし、僕は嫌であつた。

このまま終わるのは、嫌であつた。

納得できない。

どうせ死ぬのだ。

僕は、もう死ぬのだ。ならば最後に、せめて最後に一矢報いてやろ
う、と思つた。

世界は理不尽である、僕を童貞のまま殺戮するのだから。

僕はその世界に対して、最後に何かを残したかった。

開き直った僕は、周りを見渡す。

そして奇跡的に、アスファルトの道路の端の並木の中の一本の桜の木の下に、鉄のパイプが打ち捨てられていた。

もう恐怖などないのだ、僕は死んだのだ。この後、全ての爪を剥がされようが、眼前でハラワタを全て食い破られようが、怖くはない。「――！」

声にならない声を出していた、おそらく断末魔になるであろう叫びである。一瞬で、声が出なくなった。

あと一步の所で手が届くという至近距離まで迫る化け物を前に、僕は立ち上がり、横に跳んだ。

「まあ、すごい」

呑気な声を出し、感心したように釣り上がった目を見開き、胸の前で手を合わせる化け物。

奇跡的に桜の下にあるパイプに、奇跡的に手が届き、僕は横つとびの体を上手く着地させられず地面に転がる。

痛くはなかった。アドレナリンなどのせいであろうか、もう感覚がほぼ無かった。

多分、火事場のクソ力というやつだ。

僕は立ち上がり、パイプを構えた。

多分普通の人間が出していない百パーセントの潜在能力を、今なら出せる気がした。

今なら、あの化け物に届くかもしれない。

この、錆びた鉄パイプが。

「……」

僕は口を閉じ、化け物に向かって一気に駆け出した。

別に一撃与えなくていい、届けばいい。どうせ倒すことなど叶わない。

あの一張羅を、この可憐の血にまみれた体で汚せば、御の字だ。それでいい、それなら奴もさぞ不快になるだろう。

だがクリーニング代は出してやらない、その前に華々しく絶命して

やる。

それがこの終刀刀刀刃の、あの化け物への、この世界への最後の抵抗だ。

それだけを目的に、僕は駆け出した――

桜咲く坂を君と「前編」（後書き）

聖杯対戦は終焉を迎えたが、刃刃は最後のサイクロンジョーカーアンテットを倒してしまい、自分自身がルナジョーカーアンテットになってしまった。

その隙をついて、ゴルゴミとクライスシ帝国が作り上げた最強の存在、シャドウブルームに殺されてしまう。

そしてサイバーも悪魔大將軍が率いる大悪魔超人軍団の悪魔大超人バツファローカイザーのトルネードミキサーによりバラバラにされてしまう。

もう地球のピンチと思われたその時、刃刃に埋め込まれた超キング石が太陽の光により覚醒、刃刃は田村ゆかりRXとなり、覚醒する！そして集まったキン肉ライダースーパーフェニックス軍団とディケイド率いるノリダー軍団と共に、死ね死ね団撲滅のためにポケットビスケットの再編を、コンボイ司令官と共に画策するのであった。しかし、東京上空を数百のゼオンライマーが襲う！

この状況を打破できるのは、奴しかない！
頼む！ウォーリーを探せ！

桜咲く坂を君と「中編」(前書き)

太陽の光により覚醒した、しゅうとうちかたなばじん終刀刀刀刃は田村ゆかりRXとなり、覚醒した。

そして、ポケットビスケットの再編により、世界はコーディネイターと猿により支配されてしまった。

その支配された世界を破壊出来る奴は、彼しかない。

ロックオン・ストラトス。

この物語は、ロックオン・ストラトスとティエリア・アーデが世界の変革を成し遂げるために戦った、記録の全てである。

桜咲く坂を君と「中編」

その化け物は、女の姿をしていた。

腰まで届くくらいに長く艶やかな銀色の髪、前髪は眉に触れるくらいの長さ。

切れ長で釣り上がった大きな赤い瞳に、すっと通った鼻。紫色のルージュが引かれたぷりつとした唇。

そして顔以上に異質な、服装。

衿の部分と長い裾に爪のような突起がついた、赤と黒のグラデーションが目によくない、まるで彼岸花の花弁を象ったようなドレス。巨大な瞳が横一線に描かれた黒いスカート、すらつとしたした生足に赤いヒール。

まるで声優である井上喜久子さんを24歳まで若返らせ、死に神のようなドレスをコスプレさせたような姿である。

今なら、この錆びた鉄パイプが、そんな出で立ちをした、あの化け物に届くかもしれない。

高校へと繋がる桜並木に囲まれた緩やかな坂道の途中で、僕は死を覚悟する。

空はまるで雲を全て掃除してしまったかのように、晴れ渡っていた。

「……」

僕は口を閉じ、化け物に向かって一気に駆け出した。

別に一撃与えなくていい、届けばいい。どうせ倒すことなど叶わない。

あの彼岸花に似た奇妙な一張羅を、この可憐の血にまみれた体で汚せば、御の字だ。

それでいい。

それがこの終刀刀刀刃の、あの化け物への、この世界への最後の抵抗だ。

それだけを目的に僕は駆け出す。

しかし――

僕は、抱きしめられていた。化け物女は念力か何か、見えない力で、僕の両足を地面へと引き寄せ、大股開きの体勢で倒れさせる。

そして、あるうことか化け物女はアスファルトに片膝をついて、そんな姿勢の僕を抱擁していた。

「なっ?!」

僕は、間の抜けた声を出してしまった。

化け物女の腕が、僕の体を抱きしめ、その恐ろしいほどに綺麗な顔が、僕の顔のすぐ隣に迫った。

「ふふふ、いい匂い」

そう言う化け物は、桜のお香のような匂いがした。

「なんなんだ… お前は」

訳が分からなかった。

大股開きの体勢のまま化け物女に抱擁され、冷たい腕の感覚が僕の背中に伝わる。

細い指先が、背骨をなぞっている。

「え… なんだッ?!」

そして、僕は再び目を疑った。

至高宝可憐^{しこうたから・かりん}だった無数の肉塊が黒い炎をたぎらせているのが、僕を抱擁している化け物女の肩越しに見えたのだ。周囲はいつの間にか紫色の煙で覆われており、青い空は黒い雲により完全に埋め尽くされてしまった。

『刃刃ゲン… アタシとキスをシテ、一つニナリマシヨウ?』

そして、バラバラであった塊はまるで、ビデオの逆再生をかけた映像のように元の美少女に戻り、歩きだす。

「ふん、醜い死骸風情が、鏡を見てからものを言いなさい」

振り向かず、僕の胸板に顔を埋めながら、まるで僕が自分のものであるかのような態度で、化け物女は冷たく言い放つ。

『貴様… 邪魔ヲするなア!!!』

可憐は、元に戻ってはいなかった。

可憐の顔面から、六つの赤い瞳がせり出し、唇から指先ほどに大きな蜘蛛の足のようなものが突出する。

その直後、制服が破れ、全身が黒いマダラ模様に変化し、それは完璧な怪物と化した。

『ギヤアアアッ!!』

そのマダラ模様の怪物は奇怪な声で叫び声をあげ、巨大な斧のような形となった両腕を振り上げた。

「かつー可憐?!」

化け物女と可憐だった怪物が、俺を取り合い修羅場を迎えた、と言うのだらうか。

化け物にすら、モテるようになってしまったのであろうか、僕は。

「あの醜い怪物が奴の正体。かわいいクラスメイトの姿で油断させ、あなたを狙っていたのよ。」

慌てる僕に向かって、化け物女は対照的に淡々と説明をしていた。

なるほど、マダラ模様の怪物が、可憐の姿をして僕を狙っていただけなのか。

だから、僕に急接近していたのか。

では僕は、間一髪のを、この化け物女に助けられたというのか。ふざけるな。

僕は、思った。

ではお前は、僕を助けるために現れたとも言うのか。

「そうよ、私はあなたを助けるために26583の世界を巡っていたのよ―」

ふうっ、と耳元に吐息をふきかける化け物女。

ずぞぞっ、という感触がする。

思考を、完璧に読まれていた。

しかし驚いている暇もなく、更に奇怪な事が起こった。

「ふふふっ、感じるでしょう? 私も感じてるわ。欲しいの、貴方の刀が―」

化け物女は、右手で僕の背中から物干し竿のように長い刀を引き抜

いたのだ。

と、同時に僕の体の中に穴が空いたような、まるで臓器が一つ駆け落ちたような感覚に襲われる。

どこに入っていたのだろう、と僕は一瞬考えてしまった。

どうせ考えても無駄だというのに。

そう、無駄な抵抗だ。

もう、全ての事態が、僕の理解の範疇を逸脱し、世界があまりに目まぐるしく変化をし過ぎていた。

化け物女の恐怖と、その左手と唇が与える正反対な快楽。

そしてクラスメイトだと思っていたものが、怪物だったという受け入れることしか出来ない真実と恐怖。

そして体から出て来た刀。

もう思考は、完全なパンク、エンスト、廃車状態であった。

「ふふふ、耳い… 甘いわ」

そして、化け物女は振り向きもせず、僕の耳を甘噛する。と全く同時に、右腕で背後にその長い大刀を振るった――

『?!』

呆気ないものであった。

まさに一瞬で、化け物対怪物の勝負はついてしまった。

一撃、化け物女が背後に振った刀が、マダラ模様の怪物に突き刺さる。

怪物は黒く輝く粒子と化していき、今度は完全に消滅した。

僕の目には、そういうような感じにしか映らなかった。

「お前は… 何者なんだ？」

その化け物女に、僕は聞く。

体は、もう自分の意識ではもう自由に動かなかった。

多分、パイプを持って化け物女に最後の抵抗をした時に、全ての力を使い果たしてしまったのだろう。

まるで、30分ほど正座したような感覚が全身を覆っているのだ――
「私の名前はエルマ。はじめまして、人外の中の人外、世界を終

わらせる存在、そして――」

化け物女だからって、好き勝手に言ってくれる。

化け物女に、人外呼ばわりされる言われはない。

確かに、背中からは刀が出てしまったが。僕は普通の高校生だ。

だからこそ、今、思考も気力も何もかもが限界なのだ。

普通でなければ、とつくにヒーローに変身してお前らをライダーキックで倒してくれているわ。

「ふふ… んっ」

「ん――?!」

エルマ、と名乗った化け物女は、頬を赤らめながら僕の唇を奪う。ぷりつとした唇の感触から、痺れるような感覚が広がる。

そして彼女は、僕の右手に手を添え、指先の感触を好き勝手に楽しんでいるようであった。

何でこんなにしてくるんだろう、そして何故僕も拒まないのだろう。

「そして、私の旦那様、終刀刀刀刃君」
名前を呼ばれた。

そしてエルマは長い舌をぺろつと出すと、二つの唾液の匂いがする吐息をほうつと漏らし、右手に握られた刀を僕の背中に突き刺す形で、戻していく。

すると、僕の体の中の何かが欠けていた感覚が無くなり、額にどつと汗が出る。

空を覆っていた黒い雲は消え、元の青空が広がっていく。

桜の花びらが、風に吹かれて舞い散る

「わけ… わからねえ」

僕は太股開きのまま、坂道の途中で背後に倒れた。

体の力を使い果たし、あまりに様々な事態が起こってしまい、それを正確に把握、処理出来なくなっていた僕は、完全に意識を失ってしまったのだ――

気絶してしまったようだから、あなたの意識に直接語りかけることにするわ。

これなら、かなり一方的に説明出来るから便利なのよね。

しかし、気絶するほど気持ちのいいキスだったのかしらね。

うふふ、からかってごめんなさい。

私は化け物女、エルーマ。いやいや、本当は化け物などではないのよ、もつと高位の存在。

刀を納める、「鞘」としての存在。

あ、私の説明をする前に、まず貴方の説明をしなければいけなかったわ。

先程も言った通り、貴方の方が私よりよっぽど「特殊」なのよ。

貴方は、「終刀刀刀刃刃」は体の中に五つの刀を持っているの。

理由なんて聞かないで、誰も知らないわ。

一つが「惨殺^{みんざつ}之大刀」

さつき私が使ったやつね。

あらゆるものを殺すわ、それこそ神や悪魔もね。

二つ目が「消死^{けしかたな}刀」

その名前の通り相手の存在を完全に消す刀よ、全ての平行宇宙に存在する相手を全て消すわ。

この刀は、刃が見えないの、回避はほぼ不可ね。

勿論、消されたら元には戻せないわ。

三つ目が「返死^{かえしほ}刃」

相手の攻撃を完全に返す刃よ。これで防げない攻撃はないわ。

因みにこれは貴方が本当に死にそうな時にも勝手に発動して、勝手に危険を排除するわ。

まあ、私がいる限り使うことはないでしょうけどね。

四つめが「幻無^{げんむじん}刃」

これは、世界を移動するための刀ね。

何？

能力被ってるのがあるし、あまりに厨房くさいですって？

ふふふ、確かにそうね。

そうかもしれないわね。

でもね、事実よ。

全て、あなたの体の中に入っているわ。

そして、この四本までなら、貴方はまだ人外中の人外、世界の規格から大きく外れた存在で済むのよ。

この四本なら、あなた達人間が神と呼ぶような存在の更に上位の存在が、数億の犠牲を払えば何とか対処出来るの。

でも、問題なのは五本目。

終刀刀刀刃の体に隠された、最後の刀。

その名も「終刀」おわりかたな。

さっきの君のクラスメイト、至高宝可憐とかいう女に化けた怪物も、この刀が目当てね。

この刀だけは、本当に危険なのよ。

なぜなら、使ったら全てが終わるの。

比喻ではないのよ、刃刃君。

本当に全て、終わるの。

さっき多次元宇宙とか、平行宇宙という言葉を出したでしょう？

もしも、の世界よ。

しかし、その無限に存在するもしもの世界すら、全て一瞬で終わらせることが出来るのが「終刀」なのよ。

イメージで言うなら、全ての世界の強制終了ボタンね。

怖いでしょう？

でも安心していいのよ、刃刃君。

私がいる限り、その刀は使わせないわ。

なぜなら、その「終刀」はあなたの股についているのよ。

そう、それが「終刀」。

ふざけてなんかいないわ、私は本気よ。

だから無数の怪物がクラスメイトに化けてあなたを狙っていたのよ。

まあ、あなたに触れる前に全て私が殺してあげたけど。

ん？

安心しなさい、本物のクラスメイトは無事よ。

でも、これで本当に危険なモノであることが分かったでしょう？
あなたがそれを女性に対して使った時、世界は全て終わるわ――

桜咲く坂を君と「中編」(後書き)

ロックオン・ストラトスはツインドライブ搭載機、00デュナメスライザーを駆り、真のイノベーターであるシュタインベルグ・カウザーが乗る最強のベルセデウスガンダムと激突する。

彼は、リボンスの自我を暴走させ、イオリア計画を歪ませた、世界の真の歪みである。

「ロックオン！気をつける！そいつは普通じゃない！」

新たなMSラファエルガンダムを駆り、ガデッサ部隊を撃滅し、道を開くティエリア。

「ああ！分かっている！シュタインベルグ・カウザー、俺はお前を――狙い撃つぜえ――！」

ロックオンの叫びと共に、トランザムデュナメスライザーはGNスナイパーライフルを構える。

その標準に、ベルセデウスガンダムが映る。

「やってみるソレスタルビーイングのガンダムマイスター――！この私を、シュタインベルグ・カウザーを世界から排除してみせろお――！」

今、月面を舞台に、最後の戦いが始まるうとしていた――

桜咲く坂を君と「後編」(前書き)

公立アヴァランチ学園に通う高校二年生、しゅうとうちかたなばじん終刀刀刀刃は、数週間前からクラスメイトにモテモテであった(死語)。

だが、そんなある日、怪物のような女。「鞘」としての存在、エルマに、そいつらがみんなクラスメイトに擬態した怪物である真実を伝えられた。

怪物達は全てエルマの手によって惨殺され、クラスメイトは助けられた、が――

桜咲く坂を君と「後編」

僕の名前は、しゅつとうちかたな・ばじん終刀刀刀刃。

変な名前と言ってくれるな、知ってるよ。ずっと前から、知ってるよ。

僕は神奈川県あかつき町にある公立アヴァランチ学園高等部の二年生で、普通の、ごく普通の少年であった。

そう、つい三日前までは、普通の少年であったのだ。

しかし僕は今、世界で一番普通ではない少年になってしまった。

僕は、未だに女性と付き合ったことがない。勿論、童貞である。

そして、一生童貞である。

もし卒業した時は、世界が終わる時。

僕の体の中には五つの刀があり、その中でも、一番危険な刀を使うわけにはいかないからである。

あわりかたな
「終刀」

僕の股間にあるそれを使うことが出来るのは、「鞘」と呼ばれる存在だけ。

「鞘」は女性の姿をしているが、人間ではない。怪物ですら発動する、「終刀」が発動しない唯一の例外らしい。

その「鞘」が、この前俺を助けた化け物女、エルーマなのである――
「ふあゝあ、つまらん。学校なんて」

欠伸をしながら、高校へと真っ直ぐに繋がる両側を桜並木に囲まれた坂道を歩いていく。

少し前までは、学校も悪くないと思っていたが今は違う、断言出来る、学校なんぞ本当に行きたくない。

家にこもってPSSをやりまくりたい気持ちだが、家にこもると、更に悪夢が待っていていそうな気がするのだ。

なぜなら、今、僕の家には――

「おはよう」

そんな事を考えていた僕に、クラスメートの至高宝可憐しこうたからかれんが挨拶をして、緩やかな坂道を歩いていく。

「お、おはよう」

離れていく彼女の背中に、僕は小さな声で返事をする。

素っ気ない、挨拶であつた。

当たり前である、三日前のあの可憐は、怪物だつたのだから。

本物の可憐はただのクラスメート、僕とは釣り合わない。赤の他人なのだ。

だから僕のモテ期は、終わったのだ。

いや、始まつてもいなかっただけなんだが。

世界は、元に戻つたのだ。

「うふふ、おはよう刃刃君。今日も上下共に元気かしら？」

そうだった、完璧に元に戻っていなかった。

この世界の一番の歪みが、残っていた。

低く美しい声が、僕を呼ぶ。

腰まで届くくらいに長く艶やかな銀色の髪。

前髪は、眉に触れるくらいの長さ。

切れ長の大きな赤い瞳に、ずっと通つた鼻。

青色のルージュが引かれた唇は、今日は笑っていた。

この女性こそ僕の「鞘」を自称する存在、エルーマ。

今日は赤いスーツを着て、下もスカートをはいており、女教師のコスプレのような出で立ちをしていた。

いや、問題なのはこれがコスプレなのではなく――

「う、おはようございます。」

言葉につまりながらも、挨拶する僕。

そんな僕を品定めするような瞳で、見つめる。

「ふふつ、名前を呼んで欲しいものね。」

小さく笑いながら、更に要求するエルーマ。

「お・は・よ・う・ご・ざ・い・ま・す、エルーマ先生」

分かりやすく、思い切り強調して言う僕。

エルーマを、僕は「先生」と呼んだ。

そう、エルーマは公立アヴァランチ学園の高等学部の先生となったのだ。

しかも、僕のクラスの担任である。

どうやってなったのかは、知らん。知りたくもないが、

彼女曰く「世界を越えるよりよっぽど楽」らしい。

因みに授業は科学を担当で、とても分かりやすい。

「似合うかしら？このスーツ。ほら、刃刃君、ストッキング好きでしよう？」

そんないかがわしい手段で教師になったエルーマは、スカートをぱんつと小さく叩いて両足を強調し、モデルのようなポーズをとる。

しかし、僕は適当に返す。

「似合ってんじゃないの？あの珍妙なドレスよりは。」

適当に返すと共に、ちよつと嫌味をトツピングする。

「ふふつ、冗談として受け取っておくわ。」

嫌味を華麗に受け流し、エルーマはにこつと笑う。

そして再び歩きだす僕の真横に、エルーマはぴつたりと張り付くように歩いている。

傍から見たら、ただの教師と生徒には見えないであろう。

「っていうか、一応先生なのに、俺ばつかに付き纏っていいのかよ」

僕はエルーマから数歩、横に離れる。

「何を言っているの、私は平等よ。ただ、女の子と話す機会のない刃刃君のために、サービスしているだけよ」

しかし、エルーマはその歩幅の分近づき、あくまで並んで歩いている。

「そんなことを言ったら、うちのクラスの男子の恋愛負け組三割にもサービスしなきゃいけないぞ」

「知らないわ、そんな馬の骨」

即答するエルーマ。

「駄目じゃん」

呆れたように言う僕、全然平等ではない。

「ふふふ、いいじゃない。一途な女は嫌いかしら？」

くねっと体をねじらせ、スーツに包まれた女の体をアピールするエルーマ。

「僕は、自分のペースを崩されるのが嫌なんだ」

自分のペースで歩きながら、僕は言った。

そうなのだ、僕は僕のペースでいたいのだ。

必要な時以外は他人に介在しないから、他人も僕に出来るだけ干渉して欲しくないのだ。

干渉するなら、僕のペースに合わせてほしいのだ。

「ふん、いかにも童貞らしい物言いね。かわいいクラスメートとはすぐキス出来るくせにね。」

「ぐっ！」

あまりに正論なことを言われ、言葉を失う。

「まあいいわ、ずっと私が相手をしてあげるから、安心なさい。」

そう、迷惑なことに今、このエルーマは僕の家と同棲している。

両親はなぜか、三日前から海外出張に出ている。電話は二日おきにかかってくるから安心なのだが。

多分、エルーマの仕業であろう。いや、確実に。

「ちょ、お前、ここ通学路」

赤面して、僕は周囲を見回す。

奇跡的に人は数人しかおらず、こちらを意識している者は皆無であった。

しかし、それすらもこのエルーマの仕業では？と思ってしまう自分がある。

ゴルゴムかよ、南光太郎かよ、と。

「ふふふ、なら続きは家に帰ってからね。さあて、今日は私の授業があるわよ。水兵リーベ、戦艦大和」

謎の元素記号の歌を歌いながら、僕よりも速くすたすた歩いていくエルーマ。

自分の一方的な主張を散々した挙げ句、自由気ままに不規則に形を変える。

まるで僕を取り巻く、全ての理不尽を人の形にしたような女がエルマーであった。

続きなんかねーよ、多分――

と、言いたかったが、あまりにペース過ぎて、ツツコミが追いつかなかった。

「ふふ、ツツコミですって？何を突っ込んでくれるのかしら、このコは」

クスクスと笑いながら赤面し、再び僕の眼前に現れるエルマー。まるで瞬間移動である。

まあ、本当に瞬間移動したのかもしれないが。そして平然と、下ネタを耳元で囁く。

朝からやられっぱなしで、僕のペースが乱れる。

こうして一日が始まるのだろうか。
納得出来ない。

「くっ！この淫乱教師がああー！！」

僕は叫ぶ。

周囲の視線が僕に突き刺さる。

エルマーのやつは既に僕の眼前から離れ、数十歩先の緩やかな坂をすたすたと歩いていった。

いきなり叫んだ僕を、完全に他人のフリを決め込みやがったのだ。

あ、いや、確かに他人だが。

ひそひそと、道行く人達が喋っているのは、僕の気のせいではない。通りすぎていく皆の視線が痛い、釈明する気にもならなかった。

どうせ、世界は理解してくれないのだ。

僕は、深いため息を漏らした。

桜が咲く坂の上で――

桜咲く坂を君と「後編」(後書き)

桜咲く坂を君と、を最後まで読んで頂きありがとうございました。
このお話はまた、続編でも書きたいな、なんて思っています。

というか、アクセス数がハンパねえのでかなり嬉しいです！

皆さんこれからも、ゆびふらいの作品の応援を宜しくお願いします。
俺達の戦いはこれからだ！

ストーキング／裸エプロン／ロデオ（前書き）

ストーキング／マイウェイの続編になります。

ストーキング／裸エプロン／ロデオ

俺の名前は、夜乙女朝男。やおとめあさお

俺は青森県内にある、数年前に過疎地となってしまったエコネコ商店街に住む、普通じゃない高校三年生だ。

どこが普通でないかだって？

雨の夜に猫人間になってしまふ特異体質なのだ。

だが安心してくれ、コンプレックスは解消された。

なぜなら猫の生まれ変わりと、付き合っているのだから。

親は二人とも仕事で海外出張、兄は既に自立しているため、二年前くらいから一人で暮らしている。

背が高くキレ長の目で、少し怖いイメージを第一印象で持たれるが、俺は基本的に動物と庭の手入れが好きなオトメンもどきである。

因みに最近通販でロデオボーイを買った、付き合うようになったから、彼女の手料理をよく食べるようになったので、腹周りが着になるようになったので、魔がさしてしまった。

まあ、三日前から使っていないが。

今日は全国的に日曜日である。

誰が何と言おうと、何の疑いの余地もなく、日曜日、もしくはサンデーである。

「ふあゝ何作るかあゝ」

自宅の自室で惰眠をむさぼっていた俺は、2階から降り、キッチンのドアを開く。

何か朝食を自分で作らねばならない、まあ、俺はそれを手間と思ったことはない。

一応オトメンもどきだから。

「ふにゃゝん！先輩！おはようございます！」
ドアを開いて現れたのは、音子であった。

栗色に輝くセミロングの髪がなびき、まさに猫のように大きな目である。体は小さく、幼児体型である。

極楽追尾音子ごくらくおしび・ねこは俺が幼い頃に助けようとして、最終的に死んでしまった猫の、生まれ変わりである。

「なっ?! 音子?」

台所で何かをグツグツと鍋を使い、トントンと包丁を使っていた音子は、俺の声に振り向くと、にぱっと笑いこちらに接近する。

「ご飯にしますか? お風呂にしますか? それとも、た・わ・し?」

音子は、ニコツと笑って新妻台詞とウイंकを決める。
だが。

俺に朝シャンする趣味はない。

束子を食べる趣味もない。

三択のようで、俺にはご飯しか選択肢は無かった。

「というか、その格好はなんなんだ?! 見てるこっちが恥ずい!」

そう、最大の問題なのは実質一択の三択ではなく、今の音子の格好であった。

普段は学校のセーラー服の上にフード付きのジャンパーを着て、そのジャンパーに付いたフードで頭の猫耳を隠している。

だが、今音子が着ているそれは、「裸エプロン」であった。

もう着ている、というより、裸にただ一枚フリル付きの布がついているだけ、といった感じである。

「にゃはーん」

フードこそ被っているものの、元氣よくステップを踏む音子の小さい体に、白いフリル付きのエプロンが追いついていなかった。

「え…でも、先輩の隠してる本にこういうシチュエーションが」
因みに彼女が見つけた隠している本はまだ、危険度ランクで言えば「B」のブツである。

流石の彼女も危険度ランク「A」のブツを見つけることは出来なかったようである。

流石、俺。

フリル部分をピロツと上げ、音子はかわいさアピールをしようとするが――

「ぶっ！つつか、やめなさい人の部屋を漁るのは！」
そんなアピールを拒絶するため、俺は目を閉じる。

音子の色々な所が見えてしまうのに、音子の奴はいつの間に露出狂になってしまったのだろうか。

「ふにゃん、ごめんなさい先輩！」

よしよし、分かってくればいいんだ。

音子はしょぼくれたような声を出したため、俺は彼女を背にして目を開けた。

ちょうど廊下から入ってきたキッチンのドアの前であつた。

「にゃーん制服は、確かりビングだ！よっと。」

その僕の顔を、謎の歌を歌いながら音子が走っていく。

勿論、裸エプロンのまま、である。

「リビングには！先輩が買ったまま手付かずのオ！ロデオボーイがあるよオ！にゃーん！私を上に乗せて！サディスティックな欲望を満たそうとするよオ！多分！」

音子はまだ珍妙な歌を歌っている。

純情な俺は、鼻血を出してしまっていた。

出ている所が全く出ていない彼女の体に、俺は魅力を感じてしまうのだ。

最初からそうだったわけではない、彼女を好きになってから、そう思うようになったのだ。

ん？純情な高校生はいかがわしい本を読まないだらうて？

言うなよ。

「でもオ！先輩はア！優しいから大丈夫！、因みに！エロ本の隠し場所は！ベッドの下だよ！っと。ねこねこもがちょ！」

謎の歌の二番目の歌詞は、ちよっと反応に困るものであつた。

だが、ベッドの下までならばまだ大丈夫だ。彼女が「A」ランクのブツを捜し当てることは無いであろう。

そう、思いたい。

何かが、俺の中で引つ掛かった――

何かが、やりっ放しな気がする。

キッチンの窓から、差し込む朝日。

オイル切れのライター、は無い。

俺は、キッチンの中を見回す。

卵焼きだ、包丁で綺麗に切り揃えてあった。さっき、音子が切っていたのはこれか。

「美味しいな、音子」

卵焼きをぽりぽりと一切れ口に入れながら、再び周囲を見回す。

あと、漬物。

これはさすがにスーパーで買ったものだ。

マトリョーシカ、なぜかキッチンに置いてある。音子が拾ってきた

ものだ、よく洗ってあるが、中国製の安物のため、顔が怖い。

何か、忘れている気がする。

あ、鍋の火つけっぱだ。

中身は味噌汁だった。

危ねえ、危ねえ。

ストーキング／裸エプロン／ロデオ（後書き）

【制服はリビング】

原曲：ゆびふらい

こくろくつにいびね

歌詞改編：極楽追尾音子

歌：極楽追尾音子

制服は、確かにリビングだよ。

リビングには先輩が買ったまま手付かずのロデオボーイがあるの。

私を上に乗せて、サディスティックな欲望を満たそうとする。

でも先輩は、優しいから大丈夫。

私は全てを受け入れる、全てを。

因みに、エロ本の隠し場所はベッドの下だよ。

私は気づいた、ある日。

裸エプロンもその本で勉強したの、貴方のために、大人のスタディ。

でも貴方は、また猫扱い。

いつか手に入れてみせるわ、貴方の全てを。

だから今は撫で撫でで十二分に満足してあげる。

「ふにゃーん」（台詞）

ねこねこもがちょ！

ブルサーマル「前編」(前書き)

多分この物語は皆も一度は経験したであろう、青春の物語。

いじめを受けている少女、筑衛つくえ・なげこ投子は、とある少年との触れ合いにより、人と係わり合うことの幸せを知る。

今、苦しんでいる人にも、苦しんでいた人にも、苦しまなかった人にも知ってもらいたい、そんな物語――

ブルサーマル「前編」

多分、世界というものは私が思う以上に楽しくはない。そして、神様がいるとしたら人間を平等に作ってない。

生きているだけで幸せ、なんて言う人もいるだろうけど、私は幸せではない。

そんな世界に作られた小さなこの教室の中は、私にとって少なくとも地獄である――

――
14時27分。

お昼の休み時間。

都内の男女共学の高校生に通う私は、一人でお勉強を食べようとしていた。

教室ではなく、学校の屋上で。

教室は、もう私が居ることが出来る場所ではなかった。

授業以外の時間で、そこにいたくなかった。

だから私は、このフェンスに囲まれた、何もない屋上にいた。腰まで届いている長い髪が冷たい冬風に揺れ、至る所に汚れが見えるブレザーを着た私は、屋上の床に一人用の小さなブルーシートを敷いた。

居眠りがすぐにバレてしまう丸くて大きい目、普通の高さの鼻、少し細い顎に、ガリガリといえないまでも、不健康に痩せた少し背の高い体。

そんな出で立ちの私は座り込み、ブルーシートから伝わる冷たい感触を感じながら、弁当箱を開けた――

「ひゃう!!」

私はまた、悲鳴を上げていた。

やっと机の落書きを消して屋上に上がったかと思うと、次は弁当箱の中にゴキブリの死骸が入っていた。

黒光りした茶褐色の死骸が、白いご飯と卵焼き、そして冷凍食品のメンチカツに数匹乗っかっていたのだ。

私が作ったお弁当に、いつ、誰が入れたんだろう。

こんなにいっぱいのごキブリ、よく集めたね。私は見るだけでも無理なのに。

ああ、もうこのお弁当箱使えないよ…

「くっ…」

悔しさと自分の惨めさで、涙がぼろぼろとこぼれた。

私が、何をしたっていうんだろう。

確かに、ちよつと空気が読めないところもある。

集団の中に馴染めない、というのも昔から変わってないし。

けど、それだけの理由で、なぜこんなことをするのだろう。

先生は、なぜ、こんな私を放っておくんだろう。

クラスのいじめグループ以外の生徒も、何で見て見ぬフリをしているんだろう。

巻き込まれるからだよね、当たり前か。

私はまるで、触れること、存在するだけで人に害をなす放射能のようなものなのだろうか。

いや、放射能とかは扱い一つで人の役に立つから、私はそれ以下のただの毒、災いそのものなのだろうか。

案外、そうなのかもしれない。

「飛び降りちゃおうかな…」

フェンスにもたれ掛かり、小さな校庭の向こうに広がる町を見つめた。

けれど、私には全てが空虚に思えた。

そこに、人間が誰もいないような感覚。

この小さな街に、私一人だけが残ってしまったような感覚。

むしろそうなってくれたら、どれだけ、幸せなことか。

どれだけ、この胸のつかえがとれるだろうか。

私は苦しみから解放され、私を責めた人達は、きっと喜ぶのだろう。

親は多分泣くのだろうが、出来のいい兄がいるから、多分大丈夫だ。昔からよく比較されてきたし、私がいなくても大丈夫。

私が生きつづけるより、よっぽど世界に害を与えないだろう。

そんなことを考えながら見下ろす街は、やっぱり私にはモノクロにしか見えなかった。

「さむ… いなあ」

思わず、私は声を漏らす。

低くてクセがあつて、ハスキーで、私自身も嫌な声。

からっぽのお腹に冷たい風が刺さり、私は俯いて再び泣いた――

私の名前は筑衛^{つくえ・なげこ}投子。

1992年3月4日生まれ、血液型はB型。

高校二年生。趣味は読書とお菓子作り。

家族は父親が一人、母親は私が幼い頃、外で男を作つて家を出ていつてしまったらしい。

父親は殆ど家にいない、嫌な家庭だ。

兄弟は社会人になった兄がいる、もう一緒には住んでいないが。

部活は帰宅部、コンビニのバイトをやっていたが、先月辞めてしまった。

私は今、生きるのが辛い。

いや、昔から私は何かといじめなどの対象になることが多くて、いつも生きるのが辛かった。

辛い。

同年代の若者達が青春を謳歌しているこの時間を、私は地獄の中で生きている。

ああ、死にたい。

なぜ、私は生きているんだろう。

きつとこうした悲しみや苦しみを、死ぬまで感じながら生きていくのだろう。地中の地層深くに埋まったような、そんな感じで、終わるまで、続くのだろう。

そう、私は思っていた――

「寒……い」

冬の風に吹かれとお腹が冷えてしまったので、私はお手洗いに向かった――

私のクラスがある校舎とは別に建てられている、科学室や音楽室などの特別授業用の教室がある校舎。

その校舎のトイレに、私はいた。

女子トイレの中には三つの洋式トイレと掃除用具入れがあり、私は真ん中のトイレを使用していた。

「……」

私はトイレを済ませ、洋式トイレのドアを開けた。

その瞬間であつた。

「きゃああッ！！」

冷たい水が、私に向かってぶち当たる。

バケツ二杯ぶんほどの水を正面から受け、私は個室トイレの中に倒れてしまう。

また、やられたのだ。

「ははははっ！汚ったない！やああねえ！」

「ホント！ゴキブリ並に汚いよね！」

いじめグループの女子AとBが空になったバケツを振り回しながら、笑う。

因みに個人情報関係でAとBと呼ぶわけではない。私はこの二人の名前など、どうでもよいから覚えていない。

髪が短くて目が細くて、鼻と背が低いソバカス顔がA、脂っこくて清潔感のないデブがB、私の中で、二人はそれだけの存在だ。名前など、覚える気にもなれない。

「二人とも真冬になるのに水なんかかけちゃってひどーい！でもホント汚いわよね！あはははは！」

一番汚い人が、それを言うか。

AとBの背後で、恐らく指示だけを出した女子、かけて・せめるこ影出責留子がけら

けらと私を指差して笑う。

洗髪料で染めた金髪にけばけしい化粧、そして茶色い肌に、ほっそりとした体、そして私を見下すためだけについている瞳。

私はこの人の名前だけは忘れない、この人が、クラスで私が疎外されるように仕組んだ張本人。

だけれど、自分からは直接手を下さない。

とても汚い部類の人間。

でも、私は――

「っっっ」

倒れたまま、何も私は言えなかった。

唇を噛み、私は俯く。

何も出来なかった。

何かをすれば、必ず報復される。

だから怖くて、私は何も出来ない。

こうして倒れたままなら、蹴りを喰らうなどで済む。

それ以上など、もうされたくない。

生殺与奪を完全に相手に握られているから、本当に生きた心地がない。

もうこの校舎のトイレも使えない。

私の逃げる場所が、この学校から、この世界から完全に無くなってしまったように感じられた。

死にたい、私は何度も心の中で呟く。

「ケツ！つまんねーの！」

「早く死んどけよな！」

唾を私に吐き捨て、AとBが立ち去る。

「死んだ真似が上手くなったわね投子、でも、死ぬより辛い教室に来なきゃだよ！あはははは！」

洋式トイレの壁を蹴り飛ばして、責留子は私を見下して笑った。まるで、いや、本当の悪魔のようであった。

死ね、死ね、死ね。

くたばれ、消えろ、殺されろ。

生きるな、地獄に落ちろ。

息をするな。

蛆とゴミと汚物とありとあらゆる物を喰らえ。

男に襲われる、見知らぬ男の子供を妊娠して中絶しろ。

四肢をもがれて、内蔵を引きちぎられ、眼球をもぎとられてしまえ。
生き地獄を味わって死ね。

死ね、とにかく死ね。今すぐ死ね。

死ね、死ね、死ね。

死ね、死ね、死ね。

死ね、死ね、死ね、死ね、死ね、死ね、死ね、死ね、

死ね。

死ね、死ね。

死ね。

死ね、死ね、死ね、死ね、死ね、死ね、死ね、死ね。

死ね、死ね、死ね。

死ね。

死ね、死ね、死ね、死ね、死ね、死ね、死ね。

死ね、死ね、死ね、死ね。

死ね、死ね、死ね、死ね。

死ね、死ね、死ね、死ね、死ね。

もう、死ね。

絶対、死ね。

とりあえず、死ね。

必ず、死ね。

確実に、死ね。

私が呪いの言葉を心の中で唱え続けると、責留子はけらけら笑いながら立ち去っていった。別に、私が唱えたから立ち去ったわけではないが。

もし、呪文の通りになるなら、彼女は今ごろ死んでいる。生きてい

ない。

だが、彼女は生きている。私の命をジワジワと締め上げながら。私は、無力だ。何も出来ない。

そんな言葉が、無限に頭の中で再生されていた――

「うわああああーんっ！！」

涙が涸れ果ててくれないから、私は再びボロボロと涙を流してしまふ。

悔しくて、悲しくて、辛くて、惨めで、情けなくて、苦しくて。誰か、助けて。

でなければ、私は死んでしまふ。

そうだ、やっぱり屋上から飛び降りてしまおう。

世界は、私を最後まで助けてくれなかったから、消えてしまおう。

私は心の中でそう決めると、立ち上がろうと開きっぱなしになった和式トイレの入り口で膝を立てた。

その時であつた――

「ふーふふーん、トイレに来たぜ、来た来たぜ。私は男さ、だけどするなら座り小便、イエイ」その歌声は、男子生徒のものであつた。

私は耳を疑った。

ここは女子トイレである、男子が入ってくるハズがない。

そう、あるハズのないことが起きたのだ。

その歌声の主は、私が洋式トイレのドアを閉めようと立ち上がるよりも前に、目の前に現れた。

目の前に現れた男子は、やはり疑いようもなく男子であつた。

しかし、名前が思い出せない。多分私のクラスの男子だろうけれど、顔が思い出せない。

そして、あんなことが起こった後なので、私はただただ戸惑うだけで、声も出なかった。

「あっ」

「おっ」

彼も私に気づいたようであった。

二人同時に声が出る、目が合ってしまった。

私の変わりに、彼がケロッとした口調で言う。

「あ、ここ女子トイレじゃん」

本当に今気づいたような様子で、その男子は言った。

ここは女子トイレ、確かにそれもそうだが、水浸しの女子に対して何もないのだろうか。

ボブカットにされた髪に、丸い眼鏡、高い鼻、そして細くすらつと長い体、そしてそれを包む白い学ラン。

彼はそんな出で立ちであった。

こんなにも特徴的な姿なのに、名前が出てこない。

因みに私の学校の学ランは黒である。

白い学ランなど、見たことがない。

まるでジョン・レノンのような、出で立ちである彼は、水浸しの私を見てもニコニコと笑っていた。

しかし不思議と悪意で、笑っているようには思えない。

というか、私の存在が彼の気分を左右していないのだろうか。

「え…？え？」

私と対照的な彼のあまりに呑気な様子に、私はやはり、ただただ戸惑い、大きな目をさらに大きく見開くしかなかった――

ブルサーマル「前編」(後書き)

前編を最後まで読んで頂き、ありがとうございます。
この作品のご感想・ご要望をお待ちしております。

ブルサーマル「中編」

その白い学ランを着たジョン・レノン似の男子生徒は、周囲を見回しながら、眼鏡をくいつと上げた。

「ほう、私は女子トイレに迷い込んでしまったのか、迂闊だった」
うんうんと頷きながら、淡々と言う彼。

何故か、確信犯的な感じがした。

まさか、そんなことあるはずがない。

女子トイレにわざと入るような輩がいるなら、その人は完全に変態である。

「ふむ」

彼はボブカットの髪をポリポリとかくと、丸い眼鏡の奥の瞳を細め、再び床に倒れている私を見下ろす。

「はっ?!」

私は大股開きの態勢になったままだったので、とっさにスカートで足の間を隠した。

「というかこの人、なぜすぐ出ていかないのだろうか。」
「というか、

君は…」
そう、隣のクラスの筑衛投子ではないか」

私はびっくりした。

私の名前を覚えていた人が、いたんだ。

しかも、隣のクラスに。

私は貴方の名前、知らないのに。

嬉しかった。

ほぼ見ず知らずの隣のクラスメイトが、私の存在を知っていてくれたことが。

「というか、この人は本当に誰なんだろう。」

「なるほど、水が逆噴射したのか。災難だったな。クラシアンを呼べばよかったのに」

彼が、ペラペラと喋りながら倒れている私に手を差し出す。

え？

違う、私は――

私は、彼の言葉を否定するため顔をふるふると横に振った。喋ろうと思ったが、あんなことが起こった後なので、言葉が出なかったのだ。

我ながら、情けない。

彼はふむ、と頷くと、再び閃いたようすで私に問い掛ける。

「では、淹に打たれたのか？悟りを開くために」

手を突き出したまま、彼は続ける。

しかし、またしても違う。

というか、説明出来ない私も私だが。

言いたくなかった。

同じクラスのいじめグループの三人にいじめられて、水をぶっかけられたなど、言えなかった。

「では、何だ？とりあえず、立つといい。尻が冷えるだろう」

確かにそうだった、水に濡れた私は、水浸しの床に転んだままなので、とてもお尻が冷たい。

こくこくと頷くと、彼の手をとって、私は立ち上がった。

細くて長い、指であったが、力強く引き付けられ、スムーズに立ち上がることが出来た。

「ありが……とう」

本当に、聞こえるか、聞こえないかくらいの小さな声で呟く。

我ながら人と喋るのは、いつまでたっても慣れない。

人と喋る機会が少ないのが、原因だが。

私は、助けてくれた人に、手を差し延べてくれている人に、御礼一つ言えない人間になっていたのか。

改めて自分が情けない、と思った。

「礼には及ばない、それより、保健室に行こう。」

私は自分の声が届いていたので驚いた。

そして彼の手に掴まると、そのまま水浸しのトイレの床の上に立ち

上がった。

「ほ… 保健室ですか？」

そういえばこの後のことを、私は全然考えていなかった。

そのまま、早退してしまおうかと思っていた。

先生もいじめを黙認しているから、早退しても、特に私に何も言わないであろう。

前回は、確かそうしたハズだ。

保健室、そういう選択肢も確かにあった。

だけど私は保健室の先生に会うのが、苦手だ。

先生というものに言っ解決することなど、なにもないからだ。

「変な意味はない。とりあえずズブ濡れだから服を借りて、ストー
ブにあたらなければ風邪を引いてしまう。安心しろ、私は保健委員
だ。医学の知識は全く無いがな。鼻血が出たら後頭部を叩いてし
うくらいだ。」

彼は本当によく喋る人で、しかも全て正論だった。私なら、この台
詞を言うのに何度も噛んでしまうであろう。

まるで、声優さんみたいであったー

「は、はい、行き… まず、保健室」

ふむ、と頷き、彼はきびすを返し、歩きだしたー

「そうか、では行くか。因みに私は隣のクラスの両手花下義だ、りょうてはな・したぎま

あ、それはどうでもいい話だが」

両手花下義。

両手に花に、下着。

私が言えたことではないが、変わった名前だなと思った。

休み時間が終了するチャイムが鳴っているが、彼はーそんなことに
全く動揺せず、私の前を歩いていく。

私は彼の細長い背中を見つめて、不思議な気持ちになっていた。彼
は掴み所のない人で、話は正直噛み合っていない。

しかし彼は、結果的に私を助けてくれた。

でも、私はいじめを受けている事実を言うべきなのか、どうか。

引かれはしないだろうか。

彼もまた他の人のように見て見ぬフリをするのだろうか。

しかし、黙っているわけにもいかないだろう。

彼は保健室に行ったら、はいサヨナラ、とすぐに教室に戻るような人に見えなかった。

私はそれが少しだけ、不安であつた――

消毒液の匂いが少しきつい小さな保健室には、幸いなことに先生はいなかった。

しかし、休んでいる生徒がいるらしく、三つあるベッドは二つだけ使われているらしく、カーテンが閉じられ、小さいびきが鳴り響いていた。

サボっている生徒だろうか、本当に具合が悪いなら昼休みの時に帰宅したはずである。私は、空いているベッド付近で保健室に運よくあつた落とし物のジャージ上下を拝借し、着替えていた。

彼は、両手花さんはストーブのスイッチを押すとカーテンの向こうの保健室の先生の椅子に座り、落とし物の籠からルービックキューブを見つけて弄んでいた。

「さつきはすまなかつた、今、思い出した」

カーテン越しに、彼が話し掛けてきた。申し訳なさそうな、口調であつた。

ルービックキューブをカチャカチャと弄ぶ音が、聞こえている。

私は本当によく喋る人だなあ、と素直に感心していた。

多分この人は一時間で、私の一週間分くらい喋っているんじゃないかなあ、と思う。嘶家の、家の子なのだろうか。私も見習わねば。

「隣のクラスでも、いじめが結構流行っていたんだっただね。確か影^{かげ}・せめ^{せめ}出責留子を筆頭にしたいじめグループが、筑衛投子、つまり君に陰湿ないじめをしているんだっただか、確か」

そんな下らないことを考えているうちに、彼が核心をついた。

私は、声が出なかった。

今更遅いが、思考を巡らす。

今、このタイミングで切り出すとは、このタイミングで彼そんな事実を思い出すとは、思っていなかったのだ。

というか、水浸しの私を見た時点で気づかなかったのだろうか、この人は。

「な、なんでも… 知ってるんですね」

私は、こう言うのが精一杯だった。

私はジャージのチャックを上げて、ベッドに座った。

ストーブが効きはじめてたのか、保健室は暖かい空気に包まれていく。もう、話すしかない。

彼と、私の受けているいじめについて。

「ああ、私はある慈善組織の一員だね。この学校の周辺区域を担当しているんだ、だから大体は知ってる——君みたいな人のことは」

よく分からないが、そんな組織があるのだろうか。慈善組織ということは、困っている人を助けてくれる人々の集まりなのだろうか。

彼も、人助けをしている人なのだろうか。

なら、助けてくれるかもしれない。

私は、こんなにも悩み、苦しんでいるのだから。

中東の難民のように、私は苦しんでいる。辛い、苦しい、助けて欲しい。

「誰も… 助けてくれないんです」

「だろうね、誰も巻き込まれたくないだろうから」

彼は、即答した。

やはり、周囲の人は巻き込まれたくないのだ。だから、私を見て見ぬフリをする。

分かってはいたが、他人に言われ事実を再確認すると、絶望が深まっていくような感覚になった。

だから私は、自分の中にあるありったけの勇気を振り絞ってみた。そう、自分の気持ちを、今一番言いたいことを、この人に言ってみ

よう。

「でも私は… 苦しいんです… つ、辛いんです。助けて欲しいんです」

私はカーテン越しに、彼に全てを話した。

私は、助けて欲しいのだ。

救いの手を差し延べて欲しいのだ。もう、追い詰められていて、死ぬか、助けてもらうかの二択しかないのだ。

だから、お願い―

「……………」

彼は、珍しく黙っていた。

ルービックキューブを弄ぶ音も、止んだ。

少なくとも、私に会ってから初めての沈黙である。

気まずい、非常に気まずい。

私が喋らなければ、いけないのだろうか。

では、もう質問しかない。

どう、思ったんだろうか。

「あの…」

「筑衛さんは、フランチャイズの下僕いぬという作品を知っているかい？」

完全に、彼の言葉に遮られた。

完璧に私の言葉が、消えた。

そして、彼の聞き慣れない言葉に、私は思考を巡らす。

「え？」

フランチャイズの下僕いぬ。

作品ということは、小説なんだろうか、或は漫画か、アニメか。

読書が比較的好きな私でも、聞いたことがないタイトルであった。

マイナーな作品なのだろうか。

それが、私の現状を打破してくれるものなのだろうか。

彼と私の会話は、もう少しだけ続く―

プルサーマル「中編」(後書き)

プルサーマル「中編」を最後までお読み頂き、ありがとうございます。

よければ、感想下さい。
でわ！

ブルサーマル「後編」（前書き）

この物語はフィクションです、実際の登場人物、組織、団体は現実のものとは全く関係ありません。

この物語の主人公と同じことをしたら捕まります、現実とお話の区切りをつけて楽しく読みましょう。

最近インターネット上での不正な利用が多発してます、多分。

作品の文章を権利者の承諾なくインターネットを通じて配信、配布することは法律で固く禁じられていたりするハズなのでご注意下さい。

ブルサーマル「後編」

ストーブの効き始めた保健室のベッドに、私は腰掛けていた。
私は筑衛^{つくえ・なげこ}投子。

髪は腰まで長く、目は居眠りができないほど大きく、縦長の顔で唇が少し薄くて、体はちよつとガリガリしていて背が高い。

そんな、貧相な力カシのような女。

現在、クラスの皆からいじめを受けている。

水浸しの制服をコンビニのビニール袋に入れ、落とし物のジャージに着替えた私は、私をこの保健室まで連れてきてくれた彼と話していた。

彼の名前は、両手^{りゅうてはな}花下義^{したぎ}。

隣のクラスの男子生徒で、謎の慈善組織の一員。

見た目は白い学ランを着た、背の高いジョン・レノン。

私は、彼に気持ちを打ち明けた。

もう限界であることを、そして助けて欲しいことを。

そして彼は、私に質問した。

「フランチャイズの下僕^{いぬ}という作品を知っているかい？」

フランチャイズの下僕^{いぬ}。

それなりに読書が好きな私でも、そんな珍妙なタイトルの作品、知らなかった。

と、ここまでは、前回までのお話――

――
どんなに思い出してみても、記憶にない。

フランチャイズの下僕。

奇つ怪なタイトルだなあ、と思った。

「世界名作劇場にもなった作品だ、日本でも有名なハズだけどなあ」
世界名作劇場といえば、少公女セーラやあらいくまラスカルなどが代表作のアニメのシリーズである。

そのシリーズで犬といったら、私に思い当たるのは一つしかなかった。

「それって… フランダースの犬、じゃ」

カーテンの向こう側で先生用の椅子に座っている彼に、恐る恐る聞いてみた。

違っていたら、すみません。

「そう、それだ。知っているね」

当たっていたようである。

しかし、どうやったらフランダースをフランチャイズと間違えられるのだろうか。

「じゃあ、なぜ、ネロは死んだんだと思う？」

彼は、真面目な口調であった。

語気が強く感じられたのだ。

「え…」

私はカーテンの方を向き、その向こうにいる両手花さんの様子を感じた。

何をしているのだろうか。

なぜ、こんな質問をするのだろうか。

私は突拍子もない質問に答えられなかった。

「彼は吹雪の夜に、町に出たから死んだんだよ。主張すればよかったのに、『こんな純朴な少年を殺す気か！』と。『一晩でもいいから泊めやがれ！』と。」

彼は呆れたように言った。

まるで、全てネロ少年が悪い、と言わんばかりの口調だった。

そんな、と私は思った。

彼の口にしたそれは、強いものの理屈だからだ。

選択肢のある人間の考えだ。

不幸の連続で、最後に選択肢が全てなくなった少年が、自分がどうしても見たかったルーヴェンスの絵を見に飛び出したのだ。

その、何が悪いというのだろうか。

「そうすれば、彼を画家としてスカウトしに来た奴が来るまでに生きた、彼は選択ミスをしたんだよ」

私が黙っているのも彼の言葉は続いた。

私には彼の言葉が全て理不尽に感じられた。

そして最後に「選択ミス」という言葉で、彼は不幸な少年を切り捨てた。

私はそれで核心した。

この人は、私を助けてくれない。

所詮、傍観者なのだ、と。

「でも、あの場合……」

「ん？」

ならば、私は傍観者に一言、言わなければいけない。

彼は悪くない、私をここまで連れてきてくれた。

だけど、やはり傍観者だった。

見て見ぬふりはいじめているのと同じ、とは言わない。そこまで私は頭が悪くない。

だけど、彼に、私は言いたかった。

弱い者の言い分を。

選択肢のない人間の、心情を。

ベッドに腰掛けていた私は立ち上がり、ベッドを覆っていたカーテンを開けた――

「仕方なかったんじゃないですか？ 私もよく話は知らないけど、あんなに不幸になつたら――」

「世界が理不尽だから死んだのではない、弱いから死んだのだ」

私が言い終わる前に、彼は眼鏡のズレをくいと直して反論する。

彼はストープに両手を向けて、暖をとっていた。

因みにストープの上には、ヤカンと白くて四角いお餅が置かれていた。

しかし、体は完全に先生の机の横のストープの方向に向いていたが、彼のその瞳は、私の目を真っ直ぐに見ていた――

弱いから死ぬのは必然。仕方ないのだ。

彼もそう結論づけている。

結局、私は死ぬしかないのだ。

死ぬことでしか、救われないのだ。

「じゃあ私は、死にます。誰も助けてくれなかったし、私なんかいても仕方ないし、死んでも誰も悲しまないと思うし」

涙が、ぽろぽろと流れた。

もう、救われない。

なら、助けてくれなくてよかったのに。

こんなに中途半端なら、いつそ、最初から放っておいてくれた方が楽だったのに。

涙でよく見えなかったが、彼はそんな涙を気にもとめず、目を見開いて私を見ているだけであつた。

「自業自得と思うなら、そう思つて下さい」

最後の最後に突き付けられた現実に絶望した私は、涙と鼻水をジャージの袖で拭いながら、彼にこう言っていた。

「そうか、短い一生だったな。」

彼は、私の言葉を聞くとふうむ、と頷き、こう言つてストープの方に視線を完全に移した。

私に対して、真横を向いている状態だ。

私は拍子抜けしてしまった。

それだけなのだろうか、私の死などは。

それしか、反応がないのか。

私の死に対し、そんなに短い言葉で処理するのか、この人は。

全く私が言えたことではないが、彼は普通ではない、と思つた。

普通ならば死ぬ人の背中では、押さないはずだ。

「ただ投身自殺はやめておけ、この近辺の地価が下がる、学生達が落下死体を拝む可能性があるしな。電車や車に轢かれるのも止める、迷惑だ。首吊りも後処理が面倒だから止める」

彼はストープの上で焼いた餅に醤油をかけて、ハフハフと冷ましな

がら食べている。

そして、餅を食べながら、起用に喋り、私がやろうと思っていた色々な自殺方法に規制をかけていく。

やれ、東尋坊もどうせ阻止されるから止める。

やれ、集団自殺も犯されるから止める、やれ、入水自殺も助けに入った人が道連れになるからやめろ…

エトセトラ、エトセトラ…

「じゃあ、どうやって死ねって言うの？！死なせてもくれないの？

！ふざけないで！！」

私は叫んでいた。

彼の態度に、完全に頭にきていた。

久しぶりだった、こんなに叫ぶのは。

それくらいに、彼に理不尽を感じた。

弱いから死ぬ、周りは悪くない。

しかも、周りが悪くないので、周りに迷惑がかかる楽な死に方が選べない。

完全自殺マニュアルの九割くらい規制されたであろう、多分。

「ふざけてなどいない、死ぬ人間が生きる人間の足を引っ張るな、と言うことだ。そうだな、まあ樹海だな、しっかり遺書を書いて、

樹海で頸動脈を切る。それにしておけ」

彼は酷く淡々と言いつつ放った。

ジョン・レノンのような出で立ちの少年が白い学ランを着て、保健室の先生の椅子に座り、餅を食べながら、弱者は自業自得だから周囲に迷惑のかからないように死ぬ、と相談者に語っている。

オノ・ヨーコが勘違いしたら、本当に驚くような光景である。

「そう、しときます！」

私はジョン・レノンもどきに向かって叫んでいた。

普段から声を出していないため、あまり、大きな声が出ないが、私は叫んだ。

もう、何もかもが嫌であった。

彼には悪いが、やはりこの校舎の屋上から投身自殺をしてやろう。

「全く、死にたい願望の強い奴だ。一つだけ——状況を打破する方法が一つだけ、あると言うのに」

ジョン・レノンもとき、もとい両手花さんはいつの間にか私に背を向けて机に向かっていた。

そしてストーブで温めたヤカンから出したお湯を使い、マグカップを使用しコーヒーを作っていた。

用意のいい人だ、というか、どこに餅やマグカップやコーヒーがあるんだろう。

と、そんなことより、私は耳を疑った。

「え？そ、そ、それって、え？」

状況を打破する？

どうすればいいの？

私があたふたとして質問しようとするよりも早く、彼が私に言う。

今度は全身を私の方に向けて、両手は膝の上で、瞳を大きく見開き、全く微動だにせず。

そして、彼は言った――

「死ぬんだよ」

え？

私は耳を疑った。

何を言っているのか、意味が分からなかった。

死なない方法を、助かる方法を、なんとかする方法を彼は教えてくれる流れではないのか？

私は、死ぬのか？

「だから一回、死んだと思うんだよ。君は今、私に殺されたんだ。ナイフで、心臓を刺された。想像してみて下さい。」

彼が言うに、私は彼に殺されたらしい。

意味が分からない。

「え？」

私は何も言えなかった。

だが、彼の言葉の上では、もう私は死んでいる。
呆気ない最後だった。

「四肢はもがれ、その肉塊はあとで変態共が美味しく頂きました。
そう、お前は死んだのだ。」

しかも彼は、ジョン・レノンもどきの殺人鬼はあろうことが変態どもに私の肉塊を与えて、タレをかけてステーキにして出しやがった。
最低だ。

やはりトイレにも、ただただ覗きに來たに違いない。

この人は、そういう人なのだろう。

理不尽過ぎる。

いや、理不尽などという言葉で片付けられないシロモノだった。

私は殺され、辱めを受け、尚且つ、変態どもに食されてしまったのだ。

「さあ、お前はもうさっきまでの投子じゃない。お前は新・投子だ。
好きな風にやればいい、やりたいように生きればいい。君は自分の
好きなように、生きていいい」

それが、その惨劇が彼の言葉の上だけのことであることを、私が忘れてしまうくらい、衝撃的な洗礼であった。

そう、彼の言葉は、私を生まれ変わらせたのだ。

私は、彼の言葉に、ハッと我に返る。

「さあ、生まれ変わった君はまず、何がしたい？何でもいいんだ、
君がまず、したいことを、するんだ」

他人が何かをしてくれるだろう、他人が助けてくれるだろう、という甘ったれた気持ちで何もしなかった私は確かに、さっき死んだ。
そして、私は生まれ変わったのだ。

この少年、両手花下義によって。

「私はあのクラスが嫌い。いじめをする奴らが、それを見て見ぬフリをする奴らが嫌い——」

本音が口について出る、もう我慢はしない。他人には頼らない。怖いものなど、ない。

私は、彼がポケットから取り出し、差し出してくれたチョコ味のカロリーメイトと苺味のソイジョイを二本ずつ食べると、保健室の冷蔵庫を思い切り開けた。

「だから……」

冷蔵庫の中には冷えた1.5リットルペットボトルのアクエリアスをがぶがぶとラッパ飲みする。

口から数滴こぼれジャージに落ちるが、気にしない、気にしない。

どうせ他人のジャージ、事が終わったら洗って返すし。

別に、今からボロボロになると思うし。

「ぶはあ…… だから、破壊する」

そう、私は破壊する。

そして示すのだ、私を一度殺したこの世界に、私が、この筑衛投子が生きていることを、存在することを。

私は、宣言した。

ソイジョイとカロリーメイトをアクエリアス1リットルで流し込み、栄養補給完了。

本当はご飯が食べたいが、食べていたら時間がなくなる、忙がねばならない。アドレナリンやドーパミンが、多分多量に出ているのだろう。

脳内麻薬とはよくいったものだ、まるで世界が違って見える。

今まではモノクロに見えていた校舎が、今、生まれて初めて総天然色に映った気がする。

そして、私は周囲を見回す。

「これで、いいかな？」

私は床に打ち捨てられていた、小さな鉄アレイを拾う。
4Kと書いてあった。

よし、これを使おう、丁度よい重さである。

「エモノは、デカイ方がいいぞ」

彼は、私が座っていたベッドに向かい歩き、座りこむ。
獲物？

それは、獲物は大きいが、言われなくとも。

「武器だ、武器。まあ、頑張れよ。アディオス」

彼はそう言つと、空いているベッドに横になり布団を被った。

ああ、エモノとは、武器のことか。

分かった、ならば野球のバットも使つてしまおう。

運よく、壁に立てかけてあるし。

武器は多いに越したことはない、ハズ。

そうだ、これを取り上げられたら、アレを使おう。

私は、布団の中の彼に一礼すると踵を返し、廊下を走り出した。

さよなら、私を殺してくれた変態――

あの日、その後起こったことだけを話そう。

私は4キログラムの鉄アレイと鉄バットを手に自分の教室に乱入、
運よく実習になっていたため教師のいらん介入が入る前に殆どの目
標を達成することが出来た。

まず、消火剤を噴出している消火器を投げ込み、教師の後ろの入口
のガラスを叩き割った。

後ろが消火剤で真っ白になっており、私の目論み通り教室は混乱に

包まれた。

そしてそのスキに私は武器を持ち直し、鉄バットで前の入口をガラスで叩き割り、教室に入場。

靴を履いた私は床に散らばる無数のガラス片をもつとせず、黒板に向かつて鉄バットを振るい、深い緑色の板を歪ませた。

女子生徒は悲鳴をあげ、二、三人が教室から飛び出していった。

ガタイのいい男子生徒が数人、私を静止させようと背後に迫ろうとするが、あまりに気前よくバットを振っているため、攻めあぐねるばかりであった。

弱い。武器をもった男子は怖い、武器をもたぬ男子は武器をもつ女子に勝てぬのか、とその時は思った。

そして私はクレータが出来た黒板に唾を吐きかけて蹴飛ばすと、バットを思い切り振るい男子生徒と机を払いのけて窓際に走る。

そして、窓ガラスを破壊した。

砕け散ったガラスが三階から飛び散った。それが刺さった怪我人は、いなかったらしい。

私はそんなこと、考えられなかった。

もう完全に軸が歪みし字に近い形になったバットを、天井に投げる。投げ捨てられたバットは目標である天井に備え付けられたスプリンクラーに直撃した。

スプリンクラーが勢いよく水を放射している教室の中で、私は鉄アレイを握りしめいじめグループの女子AとデブBの机を、4キロのアレイで数回叩き、小さなクレータを作る。

本人達は、最初に消火剤がまかれた時に、そそくさと逃げていた。名前なんか完全に忘れた。

これから覚える気もない。

最早使用不可能になった机を尻目に、私は数人の男子に取り押さえられそうになった。

もう武器が鉄アレイだけなので、何とかなると思ったのだらう。甘い。

男子という生き物は、総じて腕つぶしだけで頭が悪い。

そして女が股を開けばすぐ言うことを聞き、いじめにも喜んで参加しやがる。

自分よりも弱い女を、平気で数人で囲みやがる。

バカが。

だから、いじめはなくならない。

別になくならなくてもいい、また私を標的なんかにしてみろ、次はお前達自身をの教室のようにしてやる。

「エモノは大きいほうがいい」

という彼の言葉を思い出しながら、私は最後の手段に出る。

ポケットに隠し持っていた防犯アラームを三つ起動させ、男達を一瞬だけひるませる。

耳をつんざくような音の中、私は近くにあった机の足にあたるフレームに手をかけ、握りしめ、振り上げた。

後は、その机を武器に男どもを牽制しながら教室の机を叩いていく。

破壊。

破壊。

破壊。

スプリンクラーから放射される水。

消火剤がぶちまけられた白い床。

飛散する文房具。

教科書。

化粧品。

避妊具。

週間少年ジャンプ。

エトセトラ、エトセトラ…

そんな混沌とした教室の中で、全ての人が私にくぎ付けになる。

騒ぎを聞き付けた隣のクラスの人達、元々のクラスの人、殆どの人が教室の外から私を見ていた。

見ておくが いいよ。

そして、網膜に焼き付けてほしい。
生まれかわった私の存在を。

私はもう、他人に助けを求めない。

私はもう、嘆かない。

私はもう、悲しまない。

私はもう、さつきまでの弱い私ではない。

生まれ変わったのだ。

そう思いながら私は、破壊を続けた。

そして、私はその日、最後の最後、数人の体育教師と野球部に取り
押さえられるまで、机を振り回していた。

生まれ変わった私を、かつて私を排除した世界に見せつける。

私の初期目標は、完全に達成された。

ただ、一点、いじめグループの頭である影出責留子^{かけて・せめるこ}を倒すことが出
来なかったのが、私の最大のミスである。

彼女だけは、一発殴りたかった。

いや、本当は机でボコボコにしたかった。

停学期間を無事終えたら、確実に次は潰す。

まずは様子を見て、また私に突っ掛かるようなら、容赦なく私は奴
を潰す。

守りに入ったら、奴は私をまた舐めてかかる。

だから私は、もう守りはいらぬ。

言い訳もしない、言い訳のために生きる気もない。

だから、私の戦いは終わらない。

続く、続いていく。

私が、生きている限り。

私は、戦い続ける――

ブルサーマル「後編」(後書き)

私、両手花下義はそんな騒動の中、保健室のベッドで眠っていた。

「ふあゝ」

餅も結構食べたし、冬だけ暖房が効いているし、何より今、向こうは授業どころの騒ぎじゃないだろうから、静かに寝ていられそうだった。

また私は、人を助けたのかな。

助けるという表現はおこがましいと、いつも私は思っている。助かったのは、彼女自身の力だ。

「んゝでも、彼女。やっぱり相方が必要なんじゃないかな」

隣のベッドから、ボイスチェンジャーで変換された声が響く。

そう、彼こそが私達の組織の一番上にいる、一番偉い人。

総統である。

姿は、見たことがない。

しかも、私の思考を読まれている。

「総統も、そう思いますか」

声のする方のカーテンに向かい、僕は言う。

「うん、彼女は『机』の属性持ちだから、少数派の中の少数だし」

淡々と、総統は機械で変換された声で語る。生の声など、私も聞いたことがない。

属性というのは、例えばルールに厳しい『定規』とか、『ストーリー』とか、今日の筑衛さんの『机』とか、そういうおおざっぱな分類。

メジャーなのが「ツンデレ」とか「眼鏡」とか「メイド」ね。

君達の好きな人も、この属性という「記号」で大体分けられるでしょう？

でも、「机」や「ストーカー」とかのスキマ属性は少数派の人間だから、共に生きる「相方」が必要になってくる。

だから今日の投子さんにも、相手が必要だと総統は考えたんだろうね。

私もそう思うよ。

相方は、多くが異性だ。

因みに私は「両手に花」のスキマ属性をもっている。

二人を愛してしまう体質なんだよね。

でも今は相方が、恋人いる、勿論、二人ね。

ん？しっかり相手二人の了承を得てるし相思相愛だよ。

まあ、私の話はいいんだ。

話を戻そう。

私が所属している秘密結社「スキマクラブ」は、そんなスキマ属性の人間達の生活を陰からサポートする集団。

例えば「迷った猫」と一緒に「助けてくれた恩人」の居場所を探してあげたりとか、「鞘」に「刀」の居場所を教えたりとかしてる。

あ、でもスキマ属性の人が上手く生きていけるかは本人次第、あくまでサポートが目的だからね。

今日の投子さんの物語は、最終的に投子さんの力でいい方向（？）に向かつていったし。

ん？

君もスキマ属性なのかな？

なら、ここに電話するといい

00…

「君は一体、誰に説明しているんだい？両手花くん？」

あ、総統のツツコミだ。

それもそうだね、寝よう。

おやすみ。

187524の弾幕「前編」(前書き)

本編内容

全武鮭留
ぜんぶさける

センシティ部部長。

戦闘機王子。

最大加速。

完全回避。

高校三年生。

青い学ラン。

甘味狗久
あまみいぬく

製菓の弾丸。

鉄壁の彼女。

完全防御。

圧倒的火力。

高校二年生。

黒いセーラー服。

分厚い弾幕、最大戦速。

超絶戦闘、学園決闘。

三角関係、恋愛感情。

完全燃烧、製菓接吻。

隙間倶楽部、第七弾。

本編開始。

187524の弾幕「前編」

私の名前は、ぜんぶ・さける全武鮭留。

襟までまっすぐに伸びた金色の髪、緑色の切れ長の瞳。

某レグザのCMの某福山を劣化させたような顔面。

まるで戦闘機のように引き締まった長身。モデル体型と言っておう。

そして、それを包む、澄み切った空のように青い学ラン。特注品だ。また、何事に対しても毅然とした態度で臨み、卑怯な事や筋の通らないことを嫌うため後輩からは「王子」と呼ばれている。

都内某所にある、都立セントガイア高等学校の高校三年生である。私は、この高校にある「センシティ部」の部長。

センシティ部というのは私が作った部活で、何でもやる部活である。人生相談や、読書、サイクリング、アニメ観賞、ソフトボール、バトミントン。

蹴鞠、踊り念仏、選挙活動、同人誌の作成、モンハン、料理。

ジエング、ルービックキューブ、手話。

ラテンダンス、パラパラ（死語）、カピパラ、蒟蒻ダイエット、ブートキャンプ、登山。

たまごっち、ガンプラ制作、アマチュア無線、ネットサーフィン、ミクシィ、グリー、パクロス、マクロス、サザンクロス、ガンダムイデオン、ザブングル、ダンバイン、エルガイム。

とまあ、各人が思いついた事をやる部活。

帰宅部に近いが、帰宅部ではない。

この学校には、帰宅部はない。

先生方の迷惑により、必ずどこかしらの部活動に入らなければいけないこの学校で、私が作り出したのが、このセンシティ部だ。

この物語は「戦闘機王子」にして、「センシティ部」の部長である私の物語。

春、出会いと別れの季節。

屋上で親友二人と弁当を食べ終えた私は、古ぼけた体育館の片隅であぐらをかき、読書をしていた。

両隣には、一緒に食事をした二人の親友が壁にもたれ掛かっていた。

「ふ、平和だ。そうは思わんか？」

私は隣で寝転んでいる友人に同意を求める。

ありきたりな話だと思うが、しかし、平和は大切だ。

その平和を享受し、こうして友人と普通に談話出来ることを、私は感謝している。

「ふ、そうだな鮭留！平和は偉大だ！俺はこのピースを五臓六腑とダンロップに沁みわたらせているゾ！」

友人は私の意見に同意し、うんうんと頷く。

彼の名前は、ビリーズ・武倒^{ぶとう}・チャンプルー。

私の青い学ランとは対照的な赤と黒と茶色の迷彩柄の学ランを着て、白いマフラーをした彼は、その学ランのボタンを開き、バタバタと扇いでいる。

ドレッドヘアーに、黒いサングラスに隠れた切れ長の瞳。

縦長の顔、小麦色の肌、まるでダビデ像のような巨大な体。

熱いならまずマフラーを取るべきだと思うが、彼のポリシーに反するのだろう。

彼はセンチティ部の副部長、私のクラスメイトにして古くからの友人。ひたすらに熱血漢で情に厚く、礼儀を知らないが、嘘を何よりも嫌う誠実な男。

ひたすらに熱い男だが、その熱さ故に周囲が見えなくなる所もあり、服と同じく中身まで私と対照的である。

まあ、共通する部分も多いと思うが。

「テンション高いねー！私はもうご飯食べたらそこまで張り切れないよ全く！しかも晴れた晴れた！よく晴れたよ、青いねー、青春だねー。ほんと平和って大切だよね！でも午後の授業がもう少しで

始まると思うとちょっと憂鬱、でもおゝ鮭留の隣の席だから、別に授業も悪くないかなあゝなんて、なんてね！じよ、冗談だよ、あははー！」

私の右隣りで寝そべり、脳天気及早口で喋る少女は散々喋った挙句、赤面して照れ笑いをしてそっぽを向く。

彼女は私達と同じくセンチティ部の自称副副部長のはなしか・かたり嘶家渦里、実際には書記をやってもらっているが。

彼女は有名な落語家の家の次女に生まれたため、よく喋る。

私の偏見かもしれないが。

肩まで届くほどのポニーテールの髪に、セーラー服に身を包んでおり、真っ直ぐな二重の瞳、すっと通った鼻筋、全体的な顔と体型の造形はよい。十代の頃の広末涼子に、よく似た容姿をしている。

よく見ると綺麗だが、喋り始めるとその独自のリズムに圧倒されるため、男の人気はまずまず、と本人は言っている。

「つつか渦里はいつもよく舌回るなあオイ！つつか、舌噛まないのか？噛みちぎってるのかレバーを？」

ビリーズはサングラスのズレを人差し指でくいつと上にあげて直し、少し呆れたように言う。

ビリーズに言われ、渦里はムツと頬を膨らませた。

「ふん！エセ外人のビリっちとは鍛え方が違うんだよ！ビリっちこそ変な英語ばつか使ってたら日本語が可哀相だよ。変な喋り芸ジ・エンド！」

立ち上がり、ビリーズに近づき軽いチョップを頭に叩きつける渦里。ポカッという漫画みたいなマヌケな効果音がして、壁にもたれ掛かっていたビリーズは姿勢を崩した。

全く、こいつらは本当に昔からこうだ。

まあ、それだけ暇で平和ということか。

もはや止める気も起きぬ。

「ぬアゝにいゝ？！俺様はこれが地だコラ！バーニング顔面掴み！」
姿勢を直して床に座り、ビリーズは壁にもたれ掛かったまま渦里に

アイアンクローを放つ。

まるで野球のグローブのように巨大なアイアンクローが渦里の顔を掴み、比較的小さな体を引き寄せる。

痛そうだ、女性にやる技ではない。

まあ、渦里は昔から頑丈だから大丈夫だろうが。

「ぐああっ！ギブギブ！暴力反対！色即是空！空即是色！悪霊退散！！」

五里霧中、四捨五入、自由奔放！罵詈雑言、etc…

知っている限りの四文字熟語を叫び、じたばたと暴れる渦里。

この無駄に語彙の多いところが、彼女らしいといえば、らしい。

見ていて飽きない奴だと思う。

「全く、相変わらず暑苦しい奴らだ——」

そんな二人を尻目に、私はあぐらをかいたまま、体育館内でバスケットに興じる生徒達を見つめていた。

五、六人で互いのゴールに向かって攻防を繰り返している、確かバスケット部の生徒達だ。

一生懸命だ、彼らは彼らで。

我らセンシティ部もそうなのだが、教師達からは合法的帰宅部と呼ばれることがある、困った話だ。

私はそんなつもりで、帰宅部のつもりでセンシティ部を作ったわけではない。

スポーツや芸術、慈善活動などの枠にとらわれず、高校三年間のうちに、放課後の時間を自由に使い、自分を探す、他人と関わる、何かを成し遂げる、自分の可能性の幅を広げる。

その起爆剤になれば、と思い、私はセンシティ部を作った。

確かに帰宅するのも自由だ、だが、今や80人以上となったセンシティ部の部員達の殆どが、自主的に学校内で活動している。

「悪くは、ないがね」

そんな部を作れたのは、真っ直ぐなビリーズと、他者とのコミュニケーション能力、喋る力に長けた渦里、この二人の協力があつたか

らこそなのだ。

私達は、笑っていた。

休み時間、春の日差しがけだるい体育館の片隅で。何事もないことが、今の私達三人の幸せだった。

と、そんな時だった――

「あの、すみません」

「あなたが、センシティブ部の部長さんですか？」

体育館の中に入ってきた男子学生二人組が、私達の前に現れる。

一人は坊主頭をしたえなりかずき似の顔面の学生。

もう一人は、野球帽に眼鏡をかけている、やや知的そうな学生であった。

まるで、日曜の夕方6時あたりにやってるアニメに出て来る小学生のような風貌であった。

あまり見たことのない顔と、学ランの新品さ具合からいって、新入生であろう。

私はゆっくりと立ち上がり、彼らに会釈した。

「ああ、私は――」

「うん！そうだよ！この人がセンシティブ部の部長の全武鮭留！さそり座で趣味は読書とアウトドア関係、好みのタイプは私みたいな元気な娘でーす！なんて……えへへ。中学生の頃は帰宅部だったんだけど私達と一緒に毎日ボウリング行ったりカラオケ行ったりアウトドアシヨップ行ったり、色々なことをして、結構多趣味というか、何でもやっちゃう好奇心と探究心の強い少年です！あ！因みに私は副副部長の嘶家渦里です、よろしくね！」

私の言葉を、渦里が完全に遮る。

そして、物理的にも私と新入生二人の間に割って入る。

このタイミングで渦里が喋り出す技術は、『言葉のシャッター』と異名がついている。

この『言葉のシャッター』よりも早く喋れる人を、私は見たことがない。

私は気を取り直し、潟里の両肩を掴んでどかし、二人と握手を交わす。

どかした潟里が「やん」と変な声を出したが、私は気にせず続けた。「すまない、彼女は無視してもらって構わない。そう、私がセンシテイ部の部長をやっている全武鮭留だ。今日は何か用かな？」

私の質問に、彼らは少し俯き加減で答える。視線を合わせてくれない。

まあ、私の所に訪れる新入生は八割がこんな感じではあるが。

「あの、俺達、特にやりたいスポーツも無いし、かといって美術部とか音楽には興味ないし……」

富永みーのような声の坊主の新入生が言う。

「でもこの学校、何かしら部活に入らないといけないから、俺達センシテイ部に入りたいんです」

メガネをかけた少年も、申し訳なさそうに言う。

二人とも、センシテイ部を帰宅部に近い組織と思っているのだろう、無理もない。

だが、それは誤解だと、私は教えねばならないのだ。

「大丈夫だ、このセンシテイ部では各人が自由に活動していい。」いつも私はこう説明する。これ以上は付け加えない。

どう受け取るかは、彼ら次第。

放課後を有意義に使えるか、使えないか、それは各人の考えであり、そこで私は何かを強要しない。

より良い時間を過ごしてほしいと、望んではいるが。

「自分の自己責任において、だがね」

そして、一つだけ付け加える。この自己責任は大切なのだ。

センシテイ部の活動と謳い、他者に迷惑をかけるような輩が現れないようにするためだ。

自由には責任が付いて回るのだ。

「そうさ後輩達！俺達若者はまだ色々な可能性を秘めたプレシャスさ！だから一つの事に縛られることなんてナイッ！だから、自由に

していいんだぜ、センシティ部は！」

「買い食いとかジェンガとかもいいんだよ？あと、オセロだったら受けて立つからね！」

二人が新入生二人に、それぞれセンシティ部に思うことを伝える。こう三人で言うのと、先週まで行っていた新入生の部活勧誘を思い出す。

「あ、はい！わかりました！磯野伊、入ろうぜセンシティ部！」

「おう、中之島！よろしくおねがいします先輩方！」

二人はうれしそうに顔を見合わせると、私に向かって頭を下げる。

潟里がどこからかセンシティ部の部員リストを取りだし、ニヒヒと笑いながら新入生二人の名前を書いていた。このあたりは、さすが書記、と素直に思う。

「ああ、歓迎しよう、磯野伊君。そして中之島君。」

名前まで、日曜夕方六時あたりのアニメだな、と思いつつも、私は二人と再び握手を交わす。

そして、走り去っていく二人を、私は見つめて、静かに笑った。

そろそろ、昼休みも終わる時間である。教室に戻らねば。

学生の本分は学業なのだから、教員のような台詞ではあるが。

そんな時であった。

「ん、なんだ…メールが来てるぜ」

軽快な電子音が響き渡る。着信音だ。

するとビリーズが懐から携帯を取り出し、画面とにらめっこをする。

「あ着メロ、変えたんだ」

潟里がどうでもいいことに気づく、よく気づいたな、と素直に関心した。

「な…なんだって」

ビリーズの表情が曇り、携帯を握る拳に力が入っているのが分かる。

何かが、あったのか。

私は、嫌な予感がした。

「どうした？」

ビリーズに聞くと、彼は携帯を閉じ、眉間にしわを寄せて右腕で壁に八つ当たりに一撃を加える。

ダビデ像のような男の拳は、木造建築の体育館の壁に一気にクレーターを作り出した。

「シット！クソっ！！センシテイ部員二人が俺達のクラスの前でボッコボコにやられてるらしい！！」

怒りの感情むき出しで叫ぶビリーズ、サングラスの奥の瞳は大きく見開かれていた。

「なにっ？！」

「えーっ！！」

私と渦里はほぼ同時に反応する。

私は耳を疑った、センシテイ部員がやられた？

どのセンシテイ部員が？

一体なぜ？

何のために？

誰に？

幾つもの疑問が頭を過ぎるが、今は此处で考えていても仕方がない。実際に今、センシテイ部員が誰かにやられているのだ。

こんな事態、今までにそうはなかった。

二、三度くらいであろうか、不良達に絡まれた後輩を助けたのは。部員達の平和のために、戦うのも私達の使命だ。

誰が命じたわけでもない、使命だと俺が感じるのだ。

「くっ！！行くぞ二人共！！」

いや、俺達の使命なのだ。

「おう！！くそっ！！一体どこの誰だド畜生が！！」

「もぉ——う！ほんつと誰なのよっ！！」

こういう所は阿吽の呼吸である、私たち三人は一気に駆け出し、体育館を後にした。

人ごみをかき分け、ひたすらに長い廊下を、階段を駆けていく。間に合え、間に合ってくれ。私は、それだけを考えて廊下を走って

いた。

P M O : 4 6

私達の昼休みは、まだ終わらない――

――

間に合わなかった。

二人のセンチティ部員は、ボロボロになって廊下に倒れていた。しかも三年の使う校舎の三階、私のクラスの前で。

彼らは、倒れていた――

「ぐうつ、やられちゃいました…… 部長」

へへッと笑いながら、橙色の学ランを着た、背の高い長髪の少年は力なく瞳を閉じる。

彼は井伊直助、センチティ部に所属している三年生である。いい・なおすけ

彼はセンチティ部誕生の頃から入部していた古株であり、主な活動内容はアマチュア無線と筋トレ、そして作詞。

得意技は空中二段蹴り。

のはずだ、そんな簡単にやられる男ではない。

しかし今その体には制服を貫通し無数の小さな棒が突き刺さっており、所々から流血していた。

痛々しいほどの傷であった。

「これは、ポッティー？ えっ？ これで！？ これでやられたっていうの！？」

二人の体に突き刺さったチョコレート菓子、ポッティーを引き抜き、瞳を見開いて驚く瀧里。

確かに、それはポッティーであった。

どのような仕掛けがあるのかまだようわからんが、確実にそれは貫通力をもったポッティーであった。

しかも一発ではない、一人につき全身に数十発突き刺さっており、その体はまるで散弾銃に射抜かれたようになっていた。

そして、さらに驚くべきは、周囲の廊下の壁と床。

まるで針の山のようにポッティーが突き刺さっており、チョコレー
トの匂いが充満している、異様な光景である。

「俺達、一個下の後輩の甘味狗久あまみ・いぬくつて女子に告白したんですけど……
ぐうつつ」

そう言い申し訳なさそうに俯き、膝を立てながら壁にもたれている
もう一人の部員はハリス・マッケンジー。

金髪、碧眼、色白の肌、ビリーズほどではないが、まるで彫刻のよ
うな筋肉を纏った体、そしてそれを包む緑色の学ラン。

直助と同じくセンチ部の古株で活動目的は同人誌の作成。

同人誌といっても漫画ではない、文集だ。

あいだみつおにインスパイアされた作品達は、文学に疎い私にも分
かりやすく、共感できる部分が多い。

しかしそんな彼もまた、ボロボロにやられていた。

その巨体はまるで、朽ち果てた大木のように動かない。

「返り討ちにあったと？ お前達ほどのセンチティ部員が？」

二人を凝視し、眉をひそめる。

私は不可解であった。

二人はそれなりのスペックを誇る男子だ、はつきり言ってモテなく
はない。

そしてひ弱なモヤシっ子ではない、それなりに強い。

だが、その二人をこんな形で拒絶し、圧倒するとは。

一体、その甘味狗久とはどのような女なのか。

「すみません……」

瞳を閉じたまま、力無く謝る直助。

救急車の音が、近くに聞こえる。

ビリーズが手配した四、五人の救急隊員達が二人を担架に乗せる。

「こつちだこつち！！ハリーアッ！！急いでくれえー頼む！！ジー
ザスー！！」

「わかってますから落ち着いて！！」

ビリーズが救急隊員達を誘導しつつ、急かしながら一緒に担架を運ぶ。

「くっ！！何もできなかった…何も」

私はその場に落ちていた二人のドッグタグを握りしめ、学ランの胸ポケットに入れた。

運ばれていく二人を見送りながら、私は誓った。

センシティブ部長の誇りにかけて、敵は討つぞ、ハリス、直助。

「しっかしこれだけのポツティー、よくお金だせるよ。すごい量だよこれ、1、2、3、4…数えきれないし」

自分持ちのイチゴムースポツティーを食べながら周囲を見回して溜息をもらす渦里に同意し、床から引き抜いたポツティーを凝視する。「確かに不可解ではあるな。貫通力だけで考えてたら、もっと強い物はいくらでもあるはずだ。なぜ、ポツティーなのだ」

しかし、よく今ポツティー食べるな、と思いながら私は頷いた。と、その瞬間。

「んっ！！」

私の頬を、まるで弾丸のように何かがかすめる。

しかし一瞬で、私はそれが何であるかを確信した。

ポツティーだ、確実に。

これが、製菓の弾丸。

不覚であった、不意打ちとはいえ、戦闘機王子である私が被弾とは。「えっ！？何っ何がおきたの！？えっ！えっえっ！？」

渦里が、私の後ろに隠れた。

私は弾丸が来ても避けるから、そこは一番危ないぞ渦里。

頬をつつと血が流れ、そのポツティーの軌道から、私は敵の…甘味狗九の位置を特定した。

「その威力なら、余計なお世話だというのが分かったでしょう？」

冷たい口調で言い放つその女は、ポツティーが突き刺さった床をゆ

つくりと歩き、真っ直ぐに歩いてきた。

姿を現したのだ、センチティ部員を倒し、私を令、怒りに駆り立てる存在が。

金色のツインテールに、キレ長の赤い瞳。厚みのある整った唇。顔の造形はよいものの、眉を顰め、口は横一線に閉じられ、まるですべてを憎むかのような、冷たい怒りの表情をしている。

比較的小柄な体型に、それを包む黒く、袖の長いセーラー服。そして、ミニスカートに、黒いニーソックス。

「ほう、探す手間が省けたぞ。貴様がその甘味狗久か」
私は、彼女の前に立ちはだかる。

そして、その瞳を、怒りに燃える瞳で真っ直ぐに見つめる。
もう感情を抑えることなでできない、ここまでされて平然と対応できるほど、私は冷たくはない。

なぜ、ここまでした。

なぜ、二人をあそこまで追い詰めた。

そんな私の感情を感じ取ったのか彼女は、小さな白い人差し指と中指の先にポッティーを挟み、私に突きつける。

「そうよ、私が——甘味狗久。」

そして小さく頷くと、彼女——狗久はこちらを真っ直ぐに睨み、一歩、こちらに近づいた。

二人の距離は、数メートル。

彼女の立っている位置が、ギリギリ、私の間合いの内側。

そして、私の立っている位置が、多分彼女が敵を確実に仕留められる間合いの、ギリギリ一歩外。

そんな立ち位置で、二人は睨みあっていた。

彼女が、二人の仇。

彼女が、製菓の弾丸の使い手。

彼女がその少女、甘味狗久。

P M 0 時 5 4 分

私達の昼休みは、まだまだ終わりそうになかった――

続
く

187524の弾幕「前編」(後書き)

今回はちよつとキャラ達に動きがあるので不安です。
読者様のご意見、ご感想をお待ちしております。

187524の弾幕「中編」(前書き)

本編内容

ビリーズ・武道チャンプル・

センシティ部、副部長。

サングラス、ドレッドヘア。

人間戦車。

完全鉄壁。

高校三年生。

褐色の肌、青い学ラン。

はなしか・かたり
嘶家潟里

嘶家の家系。

お喋りな彼女。

圧倒的語彙。

高校三年生。

泣かない約束。

泣かせない約束。

分厚い友情、最大火力。

超絶死闘、株価上昇。

三角関係、恋愛感情。

完全燃烧、嘶家接吻。

隙間倶楽部、第七弾、第二部。

本編開始。

187524の弾幕「中編」

襟までまっすぐに伸びた金色の髪、緑色の切れ長の瞳。
某レグザのCMの某福山を劣化させたような顔面。

まるで戦闘機のように引き締まった長身。モデル体型と言っておこう。

そして、それを包む、澄み切った空のように青い学ラン。特注品だ。
また、何事に対しても毅然とした態度で臨み、卑怯な事や筋の通らないことを嫌うため後輩からは「王子」と呼ばれている。

都内某所にある、都立セントガイア高等学校の高校三年生である。

私は、この高校にある「センシティ部」の部長。

それが私、ぜんぶ・さける全武鮭留だ。

そんなことより、問題は――

センシティ部員の二人が、告白した二年生により返り討ちにあい、
病院送りにされてしまったことだ。

春の暖かな日差しが差し込む、学校の校舎の三階。

三年生の私の教室の前、ポツティーが至る所に突き刺さり、針山と化した廊下。

壁や床が穴と血とポツティーだらけになったその場所で、私と彼女は対峙していた。

彼女の名前は、あまみ・いぬく甘味狗久。

「なぜ――なぜこんな真似をした!？」

目の前に立ちはだかる少女、狗久に向かい問いかける。

金色のツインテールに、キレ長の赤い瞳。

厚みのある整った唇。

顔の造形はよいものの、眉を顰め、口は横一線に閉じられ、まるで
すべてを憎むかのような、冷たい怒りの表情を、彼女は保っていた。
出るところが出ているらしい比較的小柄な体型に、それを包む袖の
長い、黒いセーラー服。

そして、ミニスカートに、黒いニーソックス。

そんな彼女に対して、私は問いかける。

私は、不可解でならなかった。

なぜ、愛の告白をしただけで、ここまで惨い仕打ちが出来るのか。

すでにセンチティブの副部長であるビリーズ・武道・チャンプルーぶどう

の通報により救急車により搬送された二人のセンチティブ部員の二人、
いい・なおすけ井伊直助とハリス・マッケンジーは目を覆いたくなるような状態で

あった。

だから私は、問わずにはいらなかった。

「答えてもらおう！！甘味狗久！！」

思わず、声を荒げて回答の要求をする。

私は冷静ではいらなかった、友を、我が部の古くからの部員を仕留めた女が目の前にいる。

顔色一つ変えず、私の前に立っている。

それが許せないのだ、私は。

「いきなり告白されたから、力を試してやったのよ。私に相應いかどうか」

ふん、とそっぽを向きながら、先ほどまで二人が倒れていた壁際を見つめる。

なるほど、いきなり告白されたら戸惑うこともあるだろう。

無理もない。

いや、だが、ここまでする必要があるのか？

断るだけでは、いけなかったのか？

廊下を針山に変えてしまう、この力の片鱗だけでも、あの二人を追い返すことはできたはずだ。

なぜ、ここまでしたのだ、この女、甘味狗久は。

やはり、理解できない。

そして、それ以上に、納得できなかった。

「全然、箸にも棒にも引つ掛からなかったけどね！！」

くすつ、と蔑むかのような笑顔を見せ、血痕が残るその壁際にポツ

ティーを放つ狗久。

まるで忍者がクナイを使うようなモーションであった。

放たれたポツティーは弾丸のように空中を直進し、二人が倒れていた場所に突き刺さる。

やはり、ただのポツティーではない。

恐らく、何らかの手段により強度を

いや、私はそれよりも

彼女の嘲笑が一番、一番解せなかった。

「貴方が私の口にポツティーを突き刺せたら、謝罪でも何でもしてあげるけど。無理よねえあの二人の仲間じゃ」

「！！」

その言葉を、私は挑発及び、宣戦布告と受け取った。

考えるよりも先に、体が動いていた。

奴の武器の分析など、どうでもよい。

私は、すべて回避する。

万が一、被弾したとしても、そのまま一撃で葬る。

一撃で、だ。

私は許せなかった。

やはり、この女は理不尽に暴力を振るっただけとは思えない。

だからこそ、ここまで多弁になる、嘲笑もする。

感情を抑えきれないまま、私は床を蹴りあげ一瞬にして彼女の間の合いの内側に到達する。

「ふっ熱くなっちゃって、バツカじゃない!？」

狗久は、背後に加速した。

まるで、車がバツクギアを入れたかのような軌道。

私の脳は一瞬でその事象を理解する、彼女の上履きの下部のローラーがその不可解な動きの正体だ。

最近子供達が巷で使用しているローラー付き靴と同じような機能であるが、彼女が使用することにより、前後左右自由に機動が可能になったのだろう。

そして距離をとった狗久は、まず横一線にポッティーを放つ。

「この程度で！！」

そう、この程度ならば対処が可能だ。

彼女が弾をばら撒きながら後退するのであれば、こちらは全て回避しながら接近すればいい。

「まだ序の口だよ！！」

狗久は横一線にポッティーを放ちながら、思い切り後退し十数メートル距離をとる。

そして、次は放射線状にポッティー放つ。

予想以上の機動力と、弾幕であった。

これではあの二人があそこまで重体になるのも、無理からぬ話だ。

「だがっ——！！」

脳は冷静に物事を思考しているが、私の体はそうもいかなかった。放たれた数十発の弾幕をすべて紙一重で避け、開けられた距離を詰める。

やはり一瞬だ、一瞬で彼女が後退した分の距離を接近することが出来る。

そして、私は拳を握りしめた。

このような勝負の場合、バトルマンガなら何週かに分けて、長々とお互いの能力を使いながら、最後に奥の手を使い倒すのが王道であろう。

だが、私はそんなことはしない。

一瞬で、勝負をつける。

相手がまだ実力を出し切っていない時に、こちらが全力で攻め落とせば、勝利する可能性は圧倒的に高くなる。

幸い、相手はまだ油断している。

一撃を加えれば倒せる。

「砕け散れッ！！」

すでに、彼女との距離は2メートル、34センチ。

私は拳を握りしめ、その標的を捉える。

爆発した感情がすべて込められたその拳と、怒りの矛先は。

狗久の、脳天。

「なっ?!」

驚きの声をあげる狗久。

しかし、そこからは予想外であった。

狗久の右腕の手の甲とセーラー服の袖の隙間から、まるで杭のように太く、先端の尖ったポッティーが出現する。

そして狗久は左側に体をねじらせ、私の右腕による一撃を避けようとする。

「ぬうおおーっ!!」

だが、このままなら、私の拳は当たる。

しかし、狗久の腕はアッパーカットのような軌道を描く。

そして、その杭のようなポッティーの先端は、私の喉元を捉えていた。

多分、普通のポッティーのサイズで床や壁に突き刺さるのだ。この五寸釘のようなサイズのポッティーは、確実に私の頭を吹き飛ばすであろう。

だが、私の拳は、彼女の脳天を砕き、一撃で脳髓を吹き飛ばすであろう。

いや、最初から相打ち覚悟であったのだから、まあいい。

これでいいんだよな、直助、ハリス。

「ストオ——ッブ!!」

その時であった。

狗久の額を捉えていた私の拳は、一人の男により受け止められた。

そして私の喉元を捉えていた狗久の、杭のように太いポッティーもその男の拳により、防がれた。

「!?!」

「!?!」

とっさの事に、狗久も私も、声がでなかった。
ブリーズである。

ビリーズ・武倒・チャンプル。

赤と黒と茶色の迷彩柄の学ランを着た彼は白いマフラーを靡かせ、ダビデ像のような巨大な小麦色の体で私と狗久の間に割って入り、その両腕で二人の攻撃を受けきる。

その動きは、まるで某風の谷の某ウパ様のものであった。

いや、いくら「戦車男」との異名を誇るこの男の腕でも、渾身の力を込めた私の拳と、彼女の袖から出現したポッティーの杭の衝撃を受けけきれぬわけがない。

「でうえええいッ!!」

ビリーズの両手は血を吹き出し、指の幾つかの骨が砕けながらも、私と狗久の裾を掴み、それぞれ左右に投げ飛ばす。

まるで投げ捨てられたボールのように、俺と狗久は床に転げ落ちた。「女、そして鮭留! てめえら二人だけのバトル空間の中にいたから分らないかも知れないが、もうチャイムは鳴ったんだぜ? 早く教室に戻って勉強しやがれ!!」

サンングラスの奥の鋭い瞳が、怒りに燃えていた。

両手から滴り落ちる血を制服のポケットから取り出したハンカチで拭きとり、ビリーズは俺達を交互に睨みつける。

「くっビリーズ! 私は…私は!! なぬっ!?!」

反論しようとした私に、一人の少女が覆いかぶさる。

渦里だ。

はなしか・かたり
嘶家渦里。

ポニーテールの髪を揺らし、セーラー服に身を包んだ彼女は、真っ直ぐな二重の瞳からボロボロと涙を流して私を抑えつけていた。

「もうやめなよ!!! このままじゃ二人とも死んじゃうよ!!! 何でこんなになつてんの!?!」

「はっ 離せ!!! 渦里!!! まだ勝負が…」

その手を振りほどこうとするが、彼女は全力全霊で私の腕を拘束していた。

十代の頃の広末涼子によく似た容姿をしている彼女は、ボロボロと

泣きながらも、全力で私が狗久と戦うことを中断させようとしていた。

スレンダーで出るところは出ていないその体からは想像できないぐらいのバカ力で、彼女は私を抑え込んだ。

「離さないやバカ鮭留！何やってんのよう！バカ、バカ、バカあ！」

しかしその力は徐々に弱まっていく。

渦里は感情が爆発してしまつたらしく、泣く事に力が集中したのだ。私はその時にはもう、彼女を無視して動くことなど出来なかった。

泣いている彼女を見て、すこし冷静になったのだらう、と自分では思う。

「なんであんな無茶するの?!死んじやうとこだったんだよ?!ねえ、あなたが死んだら、私どうすればいいの?!」

彼女の言葉が、私の心に突き刺さる。

心の奥の奥へ、鋭く突き刺さる。

まるで、雨水を飲みほしたような気持ちであつた。

「くっ私は、私は…」

仇を討つ。

そのために戦い、玉碎覚悟で突撃しようとしていた。

友が、ビリーズが身を挺して中止させてくれなかったら、きっと取り返しのつかない大惨事になっていただらう。

そうだ、私は何をしようとしていたのだ。

大切なものを傷つけられて、怒りの感情に支配され、一番大切な存在の事を忘れていたのか。

だが、私はどうすればいいのか。

泣いている渦里を前にして、思考が堂々巡りを繰り返す。

「くっ！邪魔が入ったようだね!!」

「この決着は放課後までお預けだ、再戦の場所は旧校舎一階の教室!!!いいな!!!ヘイ!解散!!!教室の中のギャラリーも席に着きやがれ!!」

ビリーズは狗久にそう言い放つと、教室の中から恐る恐るこの戦闘を見つめている学生達に怒鳴り散らした。

教室内の学生達は、ガヤガヤと席についている様子であった。

「逃げないでよ！！今度こそ倒す！！」

彼女は、狗久はそう言つて、二年生の階へ走り去つていった。

まるで、風のような速さで、彼女は消えた。

そしてポッティーだらけの廊下に残ったのは、泣きじゃくる渦里と泣きやませる私、そして怒鳴るビリーズだけとなった。

「泣き止め渦里、もう終わったから……だから、泣きやんでくれ」

もう、勝負は放課後に持ち越したのだ、だからお前が泣く理由なんてない。

だから泣きやんでくれ、お前はいつも笑っているだろう？

お前はもう泣かないって、あの時、約束しただろう？

私も、あの時約束したんだ、もうお前を泣かせないって。

今はどうすればいいか、狗久とどう対峙すればいいかわからないが、とりあえず、お前が泣くのが一番辛いのだ。

「やだあ！！私は鮭留が死なないって約束してくれるまで、このままでいるんだから！！授業なんて知らないよ！！どうせ受けても将来使わないもん！！私は鮭留と私の気持ちが一番大切なんだもん！！だから絶対泣きやまないから！！」

「分かった、分かったから。頼む、お前はまず泣きやめ。私は大丈夫だから」

死なない、か。

難しい注文だ、甘味狗久は強い、多分今の私と互角ぐらいの強さだ。だが私は、泣いている彼女に何度も言つた。

死なない、と。

私は渦里を泣かせてはいけないのだ、昔そう約束したから。

そう、約束したのだ。

それは、少し前に起こった、ある事件の最後の結末。

その話は、またこの物語とは別の話になるわけだが。

今はその約束を守るため、彼女に新しい約束をした。
死なない、と。

数分後に分かったことだが、午後の時間の授業は自習になったらしい。

先生は放課後まで来なかった、いい加減な学校だ。

どうやら姉妹校で、一人の女子生徒が校内で大暴れした事件が起こったため、職員会議が行われていたらしい。

その後の私は、放課後まで、校舎裏でわんわん泣いている瀧里を泣きやませるのに終始した。

ビリーズは、そんな俺達のそばで、ただ黙っていた。

私とビリーズと、そして瀧里の物語の続きの、この甘味狗久（製菓の弾丸使い）と全武鮭留（戦闘機王子）の物語。

それはセンチティブにしてアクティブな、戦いと和解の物語。

まだ、この戦いは終わらない。

このままでは、終われない。

つづく

187524の弾幕「後編」

6限目の終わり頃。

あと数十分で、放課後といった時間。

そんな時に、私は校舎裏で友と戦っていた。

先に説明した通り、午後の授業が完全に自習になり、渦里もようやく泣きやんでくれたため、約束の放課後まで少しばかり時間的な余裕が出来たのだ。

戦う友の名は、ビリーズ・武道・チャンプルー。

何故戦っているのか、簡単に言ってしまうおう。

彼は、私に託したいのだ。

戦えない自分の力を。

誰も悲しませることなく、この物語を終結させる力を。

そして、その戦いもそろそろ終着する所であった――

「絶技、エクスポンバー!!!」

ラリアットの構えのまま、私に突撃するビリーズ。

その鋼のような筋肉を纏った巨大な腕は、私の首を狙い、一直線に迫る。

エクスポンバー。

それは右腕のラリアットを首に直撃させ、相手が吹き飛ぶ前に、ほぼ同時に左腕でラリアットを放ち、首を完全に粉碎する破壊の奥義である。

まあ彼の完全オリジナルの技ではないらしく、キン肉マンの劇中でネプチューンマンとビック・ザ・武道がやってたクロスボンバーを一人でやってみた、と本人は解説していたが。

しかし、その破壊力は正にエクスポンバー（交差する爆弾）。

普通の人間ならば、かすただけでも即死である。

だが、私は負けるわけにはいかない。

「ビリーズ!!!お前の絶技はかわしたが――」

回避した。

私は、回避した。

ビリーズの絶技エクスポンバーは完全に空を切り、その凄まじい破壊力により生まれる衝撃波により空間が歪む。

校舎の硝子が轟音を鳴らして砕け散り、地面が激しく砂を巻き上げる。

その余波で周囲の鉄網や電柱が飴のように折れ曲がった。

しかし、その衝撃波ごと、私は跳躍して避ける。

そして、一瞬にしてビリーズの背後に回った――

「その想い、確かに受けとった!!」

連続で、ビリーズの首目掛けて回し蹴りを繰り返す。

そのあまりの速さに衝撃波が何度も発生し、回し蹴りは竜巻の如き勢いでビリーズに連続で直撃する。

私の一撃は、鉄壁のビリーズを倒す威力はない。

だが、人体の急所を連続で攻撃すれば、倒せる。

「うっがッ… 馬鹿なっ!! ジーザスッ!!」

反撃すら許さない、連続攻撃の直撃により、ビリーズは始めて呻く。そして、当事者としては長かったように思える勝負は決した――

「ぐうっ!! 前にも増して… 強く、なったな、鮭留」

膝から崩れ落ち、倒れるビリーズ。

ダビデとあだ名がついているだけあって流石に頑丈らしく、それ以上のダメージは見受けられない。

ありがとう、友よ。

私はボロボロになった青い学ランを風に靡かせ、血の混じった唾を吐き出した。

全身が痛い。

まるで熊と戦ったかのような、疲労感だ。

いや、この場合、熊の方がまだまともな相手だったかもしれない。

思考は人間、破壊力と防御力は戦車、明らかに熊よりも強力な敵であった。

「ぐつ、さて、行くとするか… 旧校舎、だったな。」

私は、踵を返して歩き出す。

その体は既に、ビリーズとの戦いにより完全な覚醒を迎えていた。

そう、この戦いは、最近の平和な学園により鈍ってしまった私の体を覚醒させるためにも必要だったのだ。

今の私は全ての神経が研ぎ澄まされ、思考と反射の間のタイムラグが消失している状態である。

まさに、戦闘機となったような感覚。

もう使わないと思っていた、この力。

しかし、私が私であるために。

嘶家潟里、彼女との約束を守るために。

あの「製菓の弾丸」、甘味狗久と対等以上に戦うために。

そして、狗久の真意を、なぜ、そこまで苛烈で攻撃的な性格と化してしまったのかを問うために。

そう、そのために、この力があるのだ。

「そ、その前に、あいつの所に行ってやれ」

背後で膝をついているビリーズが、私の背後で言う。

「あ、ああ。そのつもりだった」

そう、私には行かねばならぬ所がある。

ポッティーの弾丸を撒き散らす少女よりも先に、私は向き合わなければならぬ人がいる。

それは、私が何よりも優先して守るべきもの。

私と、そしてビリーズと共に、今までセンチティ部を作り、センチティ部で過ごし、本気で怒り、笑い、泣きあえた少女。

その少女は、多分旧校舎の入口の中、上靴を脱ぐ下駄箱置場にいる。その場所は、私達三人にとって特別だからだ――

だから、そこにいる。

それは、ただの勘だが、多分合っているだろう。

私は、薄暗い校舎裏から離れ、巨大な学校の敷地内の外れにある、小さな旧校舎に移動した。

旧校舎は3階建てになっており、既に一部が取り壊され、入口付近は完全に封鎖されている。

終戦後に建てられた年期のある木造校舎は至る所がボロボロであり、近所でも有名な心霊スポットでもある。

巨大な本校舎により太陽光が遮られ、日光にあまりさらされないため、カビ臭く、薄暗い場所のため不気味な雰囲気を実感させている。「まあ、壊されても、それはそれで悲しいがな」

そう、思い出深いここは出来る限り残っていてほしいものだ。

旧校舎は私達が入学した時から既に廃墟と化しており、別にここで勉強に勤しんだわけではないのだが、ここにはセンチティ部誕生にまつわるエピソードがあるため、あまり消えてほしくないのだ。

多分ビリーズがここを再戦の場所に選んだのも、そういった思惑があるのだろう。

この特別な場所なら、私がああ甘味狗久を更生ないし、説得できると思っただけに違いない。

まあ単純に、これ以上普通の校舎をポツティーの針山にしてはいけないので、周囲の被害を考えたとでの選択、というのも大きい。

私はそんなことを考えながら、その旧校舎の入口に無数に貼ってあるキープアウトと書いてある帯と、看板を無視して歩を進めた。

彼女は、日の光がすこしだけあたる、下駄箱置場の段差に座っていた。

「やっぱボロボロじゃん、バカ鮭留」

彼女は呆れた様子でため息をつき、頬杖をしている。

確かに泣く以外には、呆れるしかないのだろう。

私は、どうしようもなく感情的になり、取り返しのつかないことをしようとして、自分の命を粗末に扱い彼女を悲しませた。

そして、泣き止んだ矢先に、そうするしか仕方がないとはいえビリーズと戦った。

戦って、戦って、また戦うのだ。

これがジャンプのマンガなら、まだこの程度の連戦は許されるだろうが、私たちは普通の高校生である。

そう平和極まる高校で、ごくごく普通に学園生活をエンジョイしていただけなのである。

甘味狗久のような、告白されたぐらいで、あそこまで苛烈な反応を起こし、破壊と殺戮行為を行うような存在のほうが、言葉が悪いがマイノリティなのだ。

まあ、だからこそ、何とかしたい、とマイノリティであつた私とビリーズは思うのだが。

そう、既に仇打ちではなく、あの普通ではない狗久を何とか、私たちのような「普通に近いマイノリティ」にするための戦いなのだ。年齢17歳の少女には、拳と拳の会話、などというのは、言い訳にか聞こえないのであろう。

「すまない」

突つ立つたまま、私は謝罪した。

何度、この言葉を口にしただろう。

しかし、不器用な私は、この言葉しか彼女にかけられなかった。

「いいよ謝らなくて。私との約束守るために、戦ってたんでしょ？」
彼女は理解してくれていた、二度目の、ビリーズとの戦いの意味を。彼女は普段はポヤツとして、ただ喋りまくっている印象が強いが、実は頭がかなり良いのである。

「ああ」

「なら、いいよ。」

もう仕方ないからいいよ、という意味の「いいよ」である。

潟里は、私の体を見つめていた。

至る所に傷と血の付いた青い学ラン、そして擦り傷だらけの顔。

高校に入ってから、いつも手当や服の補修をしてくれていたのは潟里であつた。

だから、今も、私の状態をよく見て、どう手当するか考えているのであろう。

本当に、彼女には心配と迷惑ばかりかけてしまい、私の胸は申し訳ない気持ちでいっぱいであった。

「なんかさ、鮭留が戦つてると、あの頃思い出すよ。私が今の私じゃなかった、あの頃」

潟里は苦笑いをしながら、旧校舎の外の草むらを見つめている。

あの頃とは、私とこの少女、嘶家潟里が出会った頃の事である。

二人の出会いは二年前、高校一年生の春頃であった。

因みにビリーズの奴は幼稚園の頃から一緒に腐れ縁である。

その潟里との出会いからとある事件を経て、私はセンシティブ部を作り、今に至っている。

「ああ、確かに。あの頃は色々全てが駄目だった。今みたいにみんなが毎日笑えなかったよな」

彼女に釣られて、私も苦笑いをしていた。

私は、あの頃を思い出すたびに、今の自分がどれだけ満たされているか、幸福であるかを噛みしめる。

高校一年の五月。

まだ、センシティブ部が無かったあの頃。

私は、やりたくもない事を淡々とこなしていた。

ビリーズは、やりたくもない事を完全に放棄していた。

そして、潟里は――

「鮭留が全部変えてくれたんだよね。凄いよ、鮭留は」

彼女は立ち上がり、下駄箱入れにもたれかかった。小さな体重により、埃が小さく舞った。

そう、そんな三人は変わる事が出来たのだ。

今は、三人が思ったことをすぐに実行できる。

自己責任において、自由に活動できる自由な場所がある。

そのために、「センシティブ部」がある。

だが、それが出来たのは私一人の力ではない、三人の力だ。

私がいければ人は集まらなかっただろうし、趣味が多彩なビリーズがいなかったら人は定着しなかっただろうし、言葉巧みに畳みかけ

る潟里がいてくれたから、学園の先生方を説得し、二年間という極めて短期間で正式な部活動というポジションになったのだ。

誰一人、欠けていたら作れなかったものである、センシティブ部というものは。

「ふっ、流石は私だ」

だが、それを言葉にするのは、さすがに私でもこっ恥ずかしいので、彼女の言葉を肯定してみる。

「ちよつとは謙遜しろっ、ふふっ。いいなあ、鮭留は。何でも変えちゃうんだ、いい感じに」

買いかぶりすぎ、と思った。

彼女は困ったような、嬉しいような笑顔で、胸を右手で押さえながら私を真っ直ぐに見つめていた。

やっと、泣いていた、呆れていた彼女は、笑顔になっていた。

私は、ホッと胸をなでおろした。

彼女の笑顔を、ようやく拝むことが出来たのだ。だが。

「ふふっ…ズルイなあ」

だが、ホッとしたのもつかの間であった。

潟里は、私に接近する。

近い、近い。

ちよ、ほんとに近い。

ちよ、ホントニチカスギルンデスケド、カタリサン。

「ズルイよ鮭留は、格好よすぎる」

「うなっ?!」

唇を、奪われていた。

この私、全武鮭留は、嘶家潟里に唇を奪われていた。接吻、俗に言うキスというものである。

魚のキスではない、粘膜同士の接触である。

「格好良すぎる、よ…」

唇が離れた後、彼女はそう言って視線をそらし、頬を赤らめた。

「ふふっ… 不意打ち成功、やつちゃったもんね、ふふっ。鮭留に『はじめて』あげちゃった」

彼女はキャッキヤとはしゃぎながら、ぴよんぴよんと跳ね上がっていた。

私といえば、自身の唇にあった感触を確かめていた。

というか、なにが起こったのかを確認していた。

えーと、何が起こったのであろうか。

何度も自問自答してみる。

しかし、何度も同じ結論に達する、キスであった。

そう、キスであった。

「勝つたら続きも鮭留にあげる。私の『はじめて』は全部、鮭留にあげる」

熱烈な告白を、私はぼうつと惚けたような顔で聞いていた。

いや、本当は半分聞き逃していた。

「嬉しくなかった？」

惚けている私の顔を、笑顔だった漑里が不安そうに覗き込む。

え、いや、その。

そうじゃないんだ。

その次元の問題じゃないんだ、私の問題なんだ。

すまない。

「漑里は私の事を、異性として見ていたのか」

はつきりと、自分の言葉を口にしていた。

そう、私は知らなかったのだ。

彼女にとって、私はただの友人、もしくは親友、という認識しか、

今の今までしてこなかったのである。

確かに、彼女とはよく遊ぶ、が、それは友人としてだと、思っていた。

自分の唇に残された感触を、いまだに手のひらで確かめながら。

「はあ?!」

漑里は、あんぐりと口を開けて肩を落とした。

「すまん、今まで私は気づかなかった。そうだったのか… 湯里が私を」

どうしていいか、わからなかった。

彼女のことは勿論、当然嫌いではない、好きだ。

だが、そのその好きはまだ、友人としての好きなのだ。

かといって、女性として見れないわけではない、彼女は女性としても魅力的だ。

断る理由は見あたらない。

しかし、しかしだ、あまりに突然ではないか。

彼女が私を好きな描写など、この作品が始まった時から、今までだって、一つとしてあつただろうか。

あつたとしたら、どの部分なのか、私に分かりやすく教えていただきたい。

どうすればよいのだ、私は、どうしたらよいのだ。

「帰って来たら土下座で詫びろ！」

彼女から、その問いが返ってきた。

怒りの、鉄拳と共に。

「グフツ?!」

覚醒した私でも反応出来ないほどに、速い一撃であつた。

例えるならば、雷。

モビルスーツみたいな呻き声をあげた私は後ろに吹き飛び、下駄箱に後頭部からぶつかった。

そして右足による下段攻撃、それにより浮き上がった私の体を、彼女は全身全霊をこめたタックルで突き飛ばす。

視界がぐらりと揺れるのを感じた。

「この私のセンチティブな乙女心にジャンピング土下座で詫びろ！」

今度は下駄箱ごと吹き飛び、私は完全に体力の限界値を迎えていた。

「ギャーンッ!?!」

間抜けな悲鳴が、木造の旧校舎に響く。

あまりの一撃に、一瞬にして脳震盪を起こし、下駄箱共々倒れた。

「もう、最低っ！！」

そう言い放ち、怒り心頭で旧校舎から飛び出していく潟里。

「ぐっ……」

意識が、消えていく。

五体の感覚が、鈍くなっている。

すまない、潟里。

私は色恋沙汰には鈍いのだ、疎いのだ。

だから、君のいきなりの接吻があまりの衝撃で、どうすればいいかわからない。

そんな思考を繰り返しているうちに、視界がどんどん狭くなっていく。

虚ろになる意識の中、私はふと思った。

狗久との約束の時間に間に合うのか、これは？

12386の弾幕の物語は、これで終わり。

187524の弾幕「後編」(後書き)

「12386の弾幕」はこれにて終了です。
続きは

「12387の回避」という三部構成の作品で完結予定です。
「12387の回避」では、狗久と鮭留の戦いの決着や、その後が描かれます。

でも、あまり需要がなければ執筆しないかも知れません。
今回は何か上手く書けたか否か、自分でよくわからないので、
需要のないに書いても、仕方ないですし。
作品のご意見、ご感想をお待ちしております。

187525の回避（前書き）

主人公、全武鮭留^{ぜんぶ・さける}は、普通の高校三年生である。

しかし彼の作った部活の部員二人が、告白した高校二年生の少女、甘味狗久^{あまみ・いぬく}に病院送りにされ、昼休みの学校は戦場と化した。そして放課後となった今、再戦の時が来ていた。

PM6:30

旧校舎を舞台に、再び超小規模な若者達の戦争が始まる。

187525の回避

襟までまっすぐに伸びた金色の髪、緑色の切れ長の瞳。
某レグザのCMの某福山を劣化させたような顔面。

まるで戦闘機のように引き締まった長身。モデル体型と言っておこう。

そして、それを包む、澄み切った空のように青い学ラン。特注品だ。
また、何事に対しても毅然とした態度で臨み、卑怯な事や筋の通らないことを嫌うため後輩からは「王子」と呼ばれている。

都内某所にある、都立セントガイア高等学校の高校三年生である。

私は、この高校にある「センシティ部」の部長。

センシティ部というのは私が作った部活で、何でもやる部活である。
人生相談や、読書、サイクリング、アニメ観賞、ソフトボール、バトミントン。

蹴鞠、踊り念仏、選挙活動、同人誌の作成、モンハン、料理。

ジエンガ、ルービックキューブ、手話。

ラテンダンス、パラパラ（死語）、カピパラ、蒟蒻ダイエット、ブートキャンプ、登山。

たまごっち、ガンπρα制作、アマチュア無線、ネットサーフィン、ミクシィ、グリー、パクロス、マクロス、サザンクロス、ガンダムイデオン、ザブングル、ダンバイン、エルガイム。

とまあ、各人が思いついた事をやる部活。

帰宅部に近いが、帰宅部ではない。

この学校には、帰宅部はない。

先生方の迷惑により、必ずどこかしらの部活動に入らなければいけないこの学校で、私が作り出したのが、このセンシティ部だ。

倒れても、ただでは起きない男とよく言われる。

月に一度の贅沢は、『ハーゲンダッツ』をスーパードではなく、コンビニで買うこと。

好きな風景は、学校の屋上から眺めるビル街。

好物はたこ焼き、嫌いな食べ物はワサビだ、よく潟里からは子供っぽいと言われるが、あれは人間の食べ物じゃない。

そして恋愛事情に凄まじく鈍感な男。

身長177?。

体重58キログラム。

パンチ力1t。

キック力3t。

走力は100mを8秒。

身長と体重以外の能力値は、電波人間タックルと同じスペックである。

それが私、ぜんぶ・さける全武鮭留だ。

この物語は「戦闘機王子」にして、「センチティ部」の部長である私の物語の続き。

長々とした説明ですまなかった、本編再開といこう。

すっかり暗くなってしまった旧校舎の廊下で、俺は目を覚ました。

まだ鈍痛がするが、それでも私は復活をした。

時計を見たら、既に六時の後半になっていた。

なぜ、ぶっ倒れていたのか、それは…

今まで傍にいてくれた少女、はなしか・かたり嘶家潟里の好意に、接吻されるまで気づかず、その事に逆上した彼女にボコボコにされたからである。

なんとも不甲斐ないと、自分でも思う。

友達だと、ただの仲間として、彼女を認識していた。

それ以上に考えられないわけでは決していないのだが、どう接すればいいか、どう切り返していいか、わからない。

そういう事に、私は凄まじく鈍感なのだ。

もう言い訳のしようがない。

「瀧里の好意に気づかないとは、私は…なんてダメな男なのだ」

今はそのことより、優先すべき事がある。

私の作った部活『センチティ部』の部員二人を病院送りにした少女、甘味狗久。

彼女と、再戦しなければならないのだ。

助けなければならないのだ、そのひたすらに武装された、心を。

私は、老朽化しすぎて、腐りかけた廊下を駆け抜け、教室に向かった。

「遅かったね。貴方がごちゃごちゃとしているから、帰ろうと思っただけ」

甘味狗久の声だった。

彼女は薄汚れた教室の教卓の上に立ち、私を見下ろしていた。

黒板には、新しいチョークでデカデカと『完全粉碎』と書かれていた、ちょっと怖い。

「それはすまなかった、それについてはこちらは謝罪するしかないしかし…フルアーマー、といった所か」

狗久は黒いガスマスク、黒いヘルメット、そして黒いマントに身を包んだ、黒尽くしの出で立ちであった。

恐らく、マントの中には無数のポツティーのストックなどがあるのだろう。

何故だ。

何故なんだ、甘味狗久。

お前は どうして、なぜ闘争本能を剥き出しにしようとする。

この私の戦いは、ただの敵討ちを越え、友人と一人の少女の想いを背中に受け、ただの私闘ではなくなった。

そう、私はこの女を助けなければならないのだ。

なのに、なぜ君はそこまでして自分を守ろうとするのか。なぜ、そこまで武装する必要があるのか？

私は知りたい。

だが今は聞いても、教えてくれないだろう。

彼女に全力で挑み、勝つ。そのことによってのみ見える、真実があるというなら――

「私は今、駆け抜けるだけだ!!」

私は、旧校舎の木造の床を踏み抜き、一気に走り出した。

一直線に、ただ一直線にフルアーマー状態の甘味狗久へと。

「全武鯉留!! 私は全力全霊をもってあなたを粉碎する!!」

狗久は、ガスマスクとヘルメット、そしてマントを剥ぎ取り、一気に翻した。

なるほど、そうきたか。

「マントに搭載したポッティーを全て放出するとは!!」

翻した黒いマントの中に装備されていた数千にも及ぶポッティーが、教室内に飛び交う。

武器のストックをチマチマ出しにするのではなく、一気に使用し畳みかける。

たしかに、いい戦闘センスをしている。

以前も似たようなことを思ったが、勝負の世界は常に、絶対的に『先手必勝』だ。

1000の技があるなら、先にそれを何の躊躇いもなく出せる奴が勝利するのである。

ウルトラ兄弟やライダーで言うなら、戦闘開始三秒ぐらいで光線技かライダーキックを放つ、ということが、重要なのだ。

「だが、しかし!」

私は教室の床を蹴り天井に跳ぶ、そして次は天井を蹴り、床へ跳ぶ。私はポッティーの段幕を全て髪一重で避けつつ、上下左右前後に加速する。

軌道だけでいったら、スーパーボールのような動きをとりながら、私は少しずつ狗久との距離を縮めていく。

しかし、彼女の放つポッティーの弾は依然、凄まじい勢いで放出さ

れていき、尽きることを知らない。

「すごい！この技を避ける人はあなたが初めて！でも、もう駄目——もう消えてよ——」

彼女はポニーテールを振り乱し、その中に仕込まれたポツティーをも放出する。

しかし、私は回避する。

「私は悪くない！！仇討ちなんてされる覚えなんてない！！だから貴方は、消えてよ！！」

更に、袖の部分から更に弾幕を放射する。

しかし、私は回避する。

「最初は確かに敵討ちだった！！センチティ部の部員二人を病院送りにされた私の、怒りに任せた死闘だ！」

数百を越す製菓の弾丸が、教室の中を弾け飛ぶ。

だが、私は回避する。

「何で！？何で一発も当たらないの！？」

そう、全てを、紙一重で避ける。

それが、今、私に出来る全て。

「だが今は違う！お前は助けを求めている！その弾幕を越えて、自分を助けてくれる誰かを、お前はずっと待っている——そう、私は感じたのだ——」

「そんなことなんて……私は——」

彼女の顔は確実に戸惑っている。

が、体は依然、弾幕を放射している。

全自動で迎撃しているというのか、この少女は。

「だから、私は——この『戦闘機王子』の全武鮭留は、負けるわけにはいかないのだ——」

そう、私は救いたい、この少女の心を。

私の言葉に戸惑う彼女の弾幕が、やや薄くなる。

と、言っても比較的、放出される量が減少しただけであり、気を抜いたら、ハチの巣になってしまうのだが。

「私は… 私は！！これで終わりにする！！私の最終必殺！！」

彼女は両腕を構え、一気に凄まじい量のポッティーを放出した。

それは、弾丸というより黒い壁となって、私に向かってなだれ込んだ。

テンミリオンチョコレートインバルス
「十万製菓衝撃弾！！」

眼前に迫る、回避不可に思えるチョコレートの弾幕の壁。

最終必殺と名が付いているだけあって、さすがに、普通に回避することは不可能であろう。

「ならばこちらも、奥の手で応えよう！！」

目の前を覆い尽くさんばかりのポッティーを前にして、私は決意を固める。

今こそ、彼女の全力全開に、私の最終必殺で応えるべき、と。

アーマーフルバジ
「制服全脱衣！！」

叫ぶと共に私は、制服を全て脱ぎ去る。

と、言っても全裸になるわけではない。

体にピッタリとフィットする黒いインナースーツのみを上下に着た私は、今まで以上の加速力を手にする。

このスーツはオリンピックで水泳選手が着ていたレーザーレーサーのように、空気抵抗を限りなく減らすための特殊な素材で出来ており、全裸よりも速い加速力と、それにより生じる衝撃波から私を守る防御力を私に与える。

そして、この次の技が本当の私の絶技。

ヒューマンリミッターブレイク
「超反射戦闘機解放！！」

私は胸の秘孔を、自らの右の人差し指で突く。

すると、私の体中の神経に稲妻が流れ、私の感覚器官はそれ程までに研ぎ澄まされたのだ。

そして、全身の色が赤銅に変わった私は、一気に加速した。

そう、インナースーツはこの尋常ではない加速力に耐えるために着こんでいるのだ。

ライトニングスピード
「閃光無限加速！！」

私は加速する。

教室を覆い尽くし、壁となって迫るチョコレートの弾丸を、全て避ける。

まるで、弾のわずかな隙間に針を通すかのように通り抜け、加速し、加速し、加速し、加速し更に加速する。

そして、技の名前通りに閃光と化した私は、狗久に肉薄した。

ほぼ、零距离であつた。

「なっ、早!?!」

と狗久が驚いた瞬間には、もう勝負は決していた。

既にポッティーを放つ攻撃の起点である両腕は、私が完全に抑え込んでいる。

そして袖と手の甲の間にある隠し武器である太い杭状のポッティーも、砕かせてもらった。

「私の、勝ちだ。」

私は先程の無数の弾の中から拝借したポッティーを口に含み、そのまま狗久の口に挿入した。

ポッティーを口の中に突き刺せば、勝利。

彼女の宣言通りの方法で、勝利させて頂いた。

こんなにも少女と零距离で肉弾戦をするほど、私はサディステックで人間から離れた人格を持ち合わせてはいないし、そもそも、彼女を傷つけてしまったては、この戦いの意味がない。

これで勝負が、ついたのだ。

ポッティーを口から離れた、このままではただのポッティーゲームになってしまう。

王様ゲームでよくやる、ポッティーを両端から食べていくという、あれだ。

「もう、自分をこんな手段で守らなくていいんだ。」

ポロポロになった教室の床に、ぺたんとへたり込む狗久。

「……」

甘味狗久はポッティーを口に含んだまま、黙って俯いていた。

「センシティブ部に入ってみないか？そうすれば私が、私達が、仲間がお前を全力で守る。センシティブ部は自己責任において、何をするにも自由な部活だ、まずは体験という形でも構わない、とりあえず、私たち若者は互いに接点をもつ事、多かれ少なかれ、それが大切なんだと思う。とにかく、もう、独りで全て抱え込むな」

言いたい事は、全て言った。

あとは狗久の出方次第だ。

彼女は頷き、そして…

彼女は一気に立ち上がり、私に向かって飛び掛かった。

回避、出来なかった。

「ありふあと、ごふあいます（ありがとうございます）…」

ポッティーを口に含みながら感謝の言葉を口にして、押し倒した私に抱き着く狗久。

私は、頭が真っ白になった。

意味が、分からない。

「なっ?!」

接吻していた。

まさにポッティーゲームのように、彼女の口に含まれたポッティーは私の口に挿入され、彼女はそれをパクパクと食べ、接吻に至っていた。

そう、至っていたのだ。

気づいた時には、既に接吻していた。

「んっ!?!」

私は彼女を引き離す。

本日二度目の、しかも二度ともいきなりの接吻だったため、思考がパンクしていた。

「なっ?!どっ… どういうことだ甘味狗久?!」

「私は貴方に、惚れました。だから…って、女の方から言わせないでください」

赤面しながら俯く狗久。

すまん、どうやら女の方が言うまで気づかないのが私のキャラ設定らしい。

「私、小学生の頃にクラスの男子に告白されて…私が断ったら逆上されて、本当の目的は『結婚したら、狗久のお父さんの会社のポッティーが毎日食べられそうだから』てぶっちゃけられて…私、ショックで」

そう言えば、甘味製菓という日本でも有数の製菓メーカーの会社の本社がこの学校の近隣にある。

甘味狗久は、その会社の令嬢だということなのか。

ああ、だからこんなにポッティーがあるのか、製菓を武器にするのはいただけないが。

「酷い小学生だな、そいつは」

「それで他人が怖くなって、ポッティーで私に言い寄る男の人達から自分を守っていました。怖かったから」

彼女は抱きついたまま、針山と化した教室を見回した。

なるほど、彼女の過剰なまでの攻撃はそういった過去があったからなのか。

「でも、そんな弾幕^{かべ}を壊してくれたのは、貴方だけでした、嬉しかった…」

だから接吻したのか、なるほど。

先ほど起こった事象を、冷静に考えようとする私。

しかし、臆面もなく、思いのままに一気に唇を奪うのだから、少女というものは恐ろしい。

まあ、我々男子がただただヘタレなだけ、という考え方もあるが。

「あなたの部の部員さん達は『私を倒せたら、つきあってもいい』って言ったら、二人で一辺にかかって来たから。私も、怖くて怖くて、だからあんなに過剰に攻撃してしまったんです、私…」

私はその事実、甘味の過去以上の衝撃を受けた。
狗久に告白し玉砕して、病院送りになった井伊直助いい・なおすけとハリス・マツ
ケンジー。

彼らは紳士的な男だとおもっていたのだが、そうではなかったとい
うのか。

二対一で少女を倒そうとするなど、どれだけ戦闘力が開いていても
言語道断である。

そんな手段でこの少女の作った壁は壊せはしないし、そんな卑怯な
手段を使うくらいであれば、素直に倒された方が潔い、というもの
である。

「そ、そうだったのか… それは、私の部の部員達が失礼をした」
謝罪の言葉を口にする。

元はといえば、我々センチティ部が悪かったのだ。

二人を信頼していたのに、完全に見損なってしまった。

二人は退部である。

もう、そんな輩をセンチティ部に置いてはおけない。

冷たいと思われるかもしれないが、自由には責任が伴う。

だから、二人には責任をとってもらおう。

「あの二人は退部処分しておく。なにか、私に出来る償いはない
か？ 私は鈍感だから、恥ずかしながら、わからんだ。すまない」
私は二人のドッグタグを投げ捨てた。

「い、いいんです。最終的にこうして、私を抱きしめてくれる人に
出逢えて、居場所まで与えてくれるなんて…」

いや、抱きしめているわけではなく、抱き着かれているわけなんだ
が…

振りほどくわけにもいかず、私はただプルプルと奮え、両腕が彼女
の体に触れないようにバンザイの格好をしていた。

なんと間抜けなポーズだろうか。

「私、入部します。センチティ部」

それは凄まじく有り難いし、万々歳だ。

だから、頼むからもうちょっと距離をとって。

なんか柔らかい物が私の胸にぴとぴと触れてるし。

こんな時、この空気を変えてくれる存在がいてくれたら。

誰でもいいから助けてくれ、誰か…

「なーッ！なにくつついてんの鮭留？！というか離れてよチョコ女！！鮭留は私のもんだ！！」

一番、今の状況を知られたくない少女が来てしまった。
はなしか・かたり
嘶家 潟里

嘶家の家系で、お喋りな少女。

肩まで届くほどのポニーテールの髪に、セーラー服に身を包んでおり、真っ直ぐな二重の瞳、すつと通った鼻筋、全体的な顔と体型の造形はよい。十代の頃の広末涼子に、よく似た容姿をしている。

クラスメイトにして、センシティブ副部長（自称）。

「なっ！？潟里、お前ちよつと待て！」

潟里は私から狗久を強引に引っぺがす。

私は慌てて、乱入して来た潟里を静止しようとするが、全く止まる様子が無い。

あまりの自体に、啞然としてしまう。

そして、潟里と狗久の二人はそんな私にお構いなしに、互いに睨み合い、火花を散らしている。

凄まじい争奪戦が繰り広げられようとしているが、私はどうすることも出来なかった。

ヘタレと言うなら言ってくれて構わない、私はまだ二人をそういった対象として見ていなかったのだ。

だから何とも言えない、二人の戦いに介入出来ない。

「チョコ女じゃないです！それより貴女こそ、鮭留さんから離れて下さい！！これから私、鮭留さんと楽しくポッティーゲームやるんだから！」

「そんな甘ったるいゲーム、この嘶家瀉里をブツ倒してからにしないさいこのチヨコ女があー!!」

「またチヨコ女って言った!!! 負けないもん!!! 貴女には負けないもん!!! 鮭留さんは私だけの王子様なんだもん!!!」

「なっ!? 言わせておけば、こんなにやろう! 絶対に負けないからなあっ!!! 瀉里ピンポイントバリアパンチ!!!」

「そんなの当たらないから!!! ポッテイーリロード、狗久いぬくスターライトブレイカー!!!」

針の山のようになってしまうた教室。

その中で凄まじい気迫で取っ組み合いの喧嘩をする二人を前に、私は立ち尽くしていた。

愛が、重い。

「俺は、どうしたらいいんだ?」

凄まじい三連戦を経て体力の限界を超えた私に、彼女達を止める力は残されていない。

「よう、モテモテじゃねえかプレイボーイ!」

ビリーズ・武道チャンプルぶとうが、にやにやと笑いながら私の背後に現れた。

センシティブ部、副部長。

ダビデ像のような巨体。

サン格拉斯に、ドレッドヘア。

褐色の肌、赤い学ラン。

そんな敵つい彼が、今は天使に見えた。

「もう放つというて帰ろうぜ、鮭留。狗久かのじょも大丈夫みたいだし、後は女の戦いみたいだが、見ていくか?」

マンガみたいにボスボ力殴り合っている瀉里と狗久をチラッと見て、私は彼女達を背にした。

「辞退させてもらおう、全力で」

悪いが、キャットファイトを見物する趣味はない。

とりあえず、今はとにかく休みたい。

「あと、直助とハリスの二人、全然大丈夫みたいだったし、見舞いにでもいくか？」

その二人は狗久を二人がかりで倒そうとしたらしいから、優しい言葉など不要であろう。

「ああ、あの二人には少し説教しなきゃならんし」

私は踵を帰して、教室から立ち去った。

友よ、ありがとう。

君がいなかったら、雰囲気は吞まれて帰れなかった。

「つつか、お前、明日から学校どうすんだ」

「とりあえず、相談には乗ってくれるか？」

「てめえも悪いんだぜ、潟里の件についてはよ」

サングラスの奥の瞳を細めて、褐色肌の彼はハッキリと言った。

「ああ、分かっている」

そう、分かっている。

多分何日かは、彼女の機嫌を直すために費やすのだろう。

そして、二人の関係を見直す必要もある。

それだけでも、それだけでも私には難しいというのに。

甘味狗久も、私に心を開いたばかりか、好意を寄せるなど…

予想外であった。

ああ、どうすればいいんだ。

私は、どうすればいいんだ。

誰か、誰でもいいから、私はこれからどう立ち振る舞えばいいか、教えてくれ。

187525の回避（後書き）

いかがだったでしょうか？

とりあえず狗久と鮭留の戦いはこれで終着です。

187526の世界／スキマクラブ終章（前書き）

これでスキマクラブは終了です。

今まで読んでくださった皆さん、ありがとうございました。

187526の世界／スキマクラブ終章

襟までまっすぐに伸びた金色の髪、緑色の切れ長の瞳。
某レグザのCMの某福山を劣化させたような顔面。

まるで戦闘機のように引き締まった長身。モデル体型と言っておう。

そして、それを包む、澄み切った空のように青い学ラン。特注品だ。また、何事に対しても毅然とした態度で臨み、卑怯な事や筋の通らないことを嫌うため後輩からは「王子」と呼ばれている。

都内某所にある、都立セントガイア高等学校の高校三年生である。

私は、この高校にある「センシティ部」の部長。

センシティ部というのは私が作った部活で、何でもやる部活である。人生相談や、読書、サイクリング、アニメ観賞、ソフトボール、バトミントン。

蹴鞠、踊り念仏、選挙活動、同人誌の作成、モンハン、料理。

ジエンガ、ルービックキューブ、手話。

ラテンダンス、パラパラ（死語）、カピパラ、蒟蒻ダイエット、ブートキャンプ、登山。

たまごっち、ガンπρα制作、アマチュア無線、ネットサーフィン、ミクシィ、グリー、パクロス、マクロス、サザンクロス、ガンダムイデオン、ザブングル、ダンバイン、エルガイム。

とまあ、各人が思いついた事をやる部活。

帰宅部に近いが、帰宅部ではない。

この学校には、帰宅部はない。

先生方の迷惑により、必ずどこかしらの部活動に入らなければいけないこの学校で、私が作り出したのが、このセンシティ部だ。倒れても、ただでは起きない男とよく言われる。

月に一度の贅沢は、『ハーゲンダッツ』をスーパーではなく、コンビニで買うこと。

好きな風景は、学校の屋上から眺めるビル街。

好物はたこ焼き、嫌いな食べ物はワサビだ、よく潟里からは子供っぽいと言われるが、あれは人間の食べ物じゃない。

そして恋愛事情に凄まじく鈍感な男。

身長177?。

体重58キログラム。

パンチ力1t。

キック力3t。

走力は100mを8秒。

身長と体重以外の能力値は、電波人間タックルと同じスペックである。

それが私、ぜんぶ・さける全武鮭留だ。

そう、それが私であるはずであつた。

あの甘味狗久との戦いから、一週間ほど後の話である。

「だから、どうということだと訊いている。ここはどこだ?」

私は、巨大な格納庫の中にいた。

小さな部品を作る工場や、車などの製品を作るようなラインが敷かれていないその巨大で閉鎖的な空間であるここは、格納庫であつた。なぜ、格納庫だと思つたかというと、まるでアニメの画面から出てきたような、13メートルというサイズの巨大なロボットが多数並んでいいたからである。

「オイオイ! 大丈夫か鮭留? ここはアメリカ連合軍新兵器研究所だろうが、何いつてやがるんだ?」

そういうことらしい。

この体にびったりフィットする黒いパイロットスーツらしきものを

着こんだビリーズ・武道・チャンプルーは、戸惑いながらも、そう何度も説明してくれた。

もともとダビデ像のような体型の彼は、その格好がサマになっていた。

本当に軍人なのだな、と思わせるほどの風格は確かにあった。

ここは、エリア0。

UFOなどを研究している施設と同じレベルの機密処理がされている。

そして、秘匿されたその内部にあるアメリカ連合軍新兵器研究所、第六工廠、装甲機神ハンガー前が、ここである……らしい。

どうやら、この世界は、私が昨日までいた世界と勝手が違うようである。

私が目覚めたら存在していたこの世界は、明らかに、昨日までの世界と違い過ぎた。

全ては目の前にいるビリーズが教えてくれた。

昨日までいた世界と違い、世界全体が全面的に戦争をしている事。

各国がそれぞれ、装甲機神アームテウスとよばれる一体の巨大ロボットを製造し、機動決戦ウォーと呼ばれる1対1の戦いを繰り返し、最終的の勝利した国の

順位が高いほど、世界を統治する権利の高い順位となる独自のシステムを構築している事。

そして、私とビリーズ、そして渦里はアメリカ代表の装甲機神のパイロットである事。

新たに開発された装甲機神MRX24の稼働実験のために、私が最終的に選ばれた事。

どこかのリアルロボットアニメや携帯サイトの小説で何度も、何度も何度も、何京回使いまわされたか分からない設定であるが、ビリーズは糞真面目に私が理解するまで説明してくれた。

その彼の真剣さから、私はこの事態が夢ではない事を自覚したのだ。「まったく！バカ鮭留！！あんたに任せて大丈夫なの！？私が変わりに乗ろっか？大丈夫だよ、私は模擬戦では負け知らずの不死身の

エースパイロット、嘶家渦里ちゃんなんだからさ!!」

そして、その横で相変わらず口数だけは多い嘶家渦里がきゅんきゅん叫んでいた。

どの世界でも、こいつはこういうキャラなのだろうか。

とりあえずピンクのパイロットスーツを着込んでいるが、全く軍人には見えず、ただのコスプレにしか見えなかった。

ボディラインも丸見えのデザインであり、彼女自身普通の体型なので見栄えがよいのが唯一の救いではあるが。

「ジーザス…。鮭留、頼むぜ…。このセンチティブはお前の機体なんだからよお…」

状況を呑みこむので精いっぱいポカンとしている私を見て、ビリーズが不安そうな声でばやく。

そして彼は、私達の目の前の巨大な純白のロボットを見上げた。

その純白の装甲は、周囲の黒色や灰色のいかにも戦車に手足を生やしてみました、といったデザインのものとは一線を画しているようであった。

純白の全身がまるでイルカやシャチのように流線型で出来ており、背中にはジェット機のような翼が生えてた。

そして、（全身もそうであるが）顔面はありがちなリアルロボットアニメの主人公の乗るロボットのような造形であった。

「センチティブ…だと?」

私は耳を疑った。

センチティブ。

それは確かに、私のネーミングセンスである。

私はその名前に、因果関係を感じていた。

どうやら、この世界にいた「全武鮭留」も、私とほぼ同じ存在だったというのか。

ビリーズ達が、私のいた世界の彼らとほぼ同じ人格であるのと同じように。

だとしたら、彼女は、この世界ではどのような役割をもっているというのだろうか。

そう、あの少女、甘味狗久は……

「鮭留が名付けたんでしょ?! ほんと大丈夫? この機体、突貫工事で製造されたから、明日の本番までもう時間ないんだよ? やっぱ私がやるのか!? おの瀧里チャンが!!」

『全武搭乗員! 速くMRX24に乗って下さい! 第36次世界機神大戦まで、あと16時間34分24秒しかありません!』

瀧里の声をかき消すように、サイレンがけたたましく鳴り響いた。

「だよ、どうする?」

ビリーズが不安げに顔を覗き込む。

「やるしかないと言うのか……」

私はパイロットスーツの右腕に装備された無数のキーボードを操作し、センシティブの胸部のコクピットを開放させる。

すると、センシティブの両の目がぎらりと輝き、その鋼の全身はふるえていた。

「内装はいたってシンプルだな、」

私はとりあえず、内装を確認した。

もう、やるしかないようだ。

ここで口論しても、返って面倒になりそうであるからだ。

「レバーでナツクル、トリガーで射撃武器、左で左腕、右で右腕が反応。右ペダルを緩く踏むと前方に歩行、強く踏むとブースト……」

実際にセンシティブを動かし一連の動作を、巨大な格納庫の中で確認する。

黒い巨体には狭く、操縦には慎重さを要したが、それでも、動かさませんでした、なんて言える空気ではないため、必死であった。

そんな気持ちを全く知らぬ眼下の整備兵らしき人達は、歓声が起っていた。

どうやら、この機体の動作のスムーズさは画期的なものようで、確かに初めての操縦でも難なく一通りの挙動をすることが出来た。「なるほど、思った以上にシンプルだ。そして反応速度が速い」というか、なぜ私はこんなに順応しているのだろうか。分らない。

なぜ、私はこんな世界にいる。

なぜ、アニメに出てくるような巨大ロボットを操縦している、それも難なく。

なぜ、本当に私があるべき世界と同じ容姿の人間がいる。

無数の謎を脳裏によぎるが、それでも私は機体を格納庫から、移動させていた。

だが、分かった事が一つだけあった。

この世界には、私とまったく同じ姿、同じ名前をした、全武鮭留と呼ばれる存在がいた、ということ。

そして、もうひとつは、この世界にいたであろう、甘味狗久は、この世界の全武鮭留と結婚している、ということであった。

それを証拠に、コクピットの右上のコンソールに、一枚の写真が貼ってあったのだ。

どこかの病院を背景に甘味狗久と私が肩を寄せ合い、小さな赤子を抱いている写真であった。

「ちょっと、本当に負けられる雰囲気ではないな、これは……」

なにか大きなものが、肩に乗ったような気がした。

それは、ただの高校生であった私にはあまりにも大き過ぎるようなものにも、感じられた。

ハンガーから一直線に続く通路を移動すると、そこは野球スタジアム並みに巨大な空間であった。

薄暗いその空間には、空中や壁に計測装置などがあるだけの、そっ

けない空間であった。

『最終調整は模擬戦で行います、相手機体はMRX22、サンダーエースです。武装は各機体、ペイント弾を装備したマシンガン、カーボンブレード、シールドのみ。時間無制限』

先と同じ声の主が、機体の内部に設置された通信機から私に指示を出す。

異議あり、二対一とは卑怯なり、と言えるような状況でもないようだった。

『それでは対戦開始！！』

淡々とアナウンスが開始の宣言をして、アリーナ内部に証明がついた。

まるで野球スタジアムである。

「さて、俺達が相手だぜ！！」

「新型なんだから、一発も当たるんじゃないわよ！！」

戦車然とした先ほどの兵器とこのセンチタイプとの中間とも言つべきデザインの機体が二体、私の前に立ちふさがる。

乗っているのは、ビリーズと渦里のようであった。

「相変わらず無茶を言ってくれる、渦里は。もうちょっと思考してから発言した方がいいぞ」

一応挑発し、動きを鈍らせて勝率を上げようと足掻く。

「安い挑発に乗るほど、間抜けじゃないんだけどなあ！！」

無駄のようであった。

もといた世界の渦里であつたら、ちよつとは動揺してくれるのだが、やはり、この世界の彼女はその程度で冷静さを見失う少女ではなかった。

勝てる見込みはなかった。

先の挑発で分かった通り、この世界の二人は正真正銘のエースパイロットのようであった。

もう小細工など通用しない、情けなど。

私は覚悟を決めて、センチタイプを加速させた…

「ま、マジかよ……」

「試作機だからって、まさかこんな…強すぎる……まるで本当の人間のようないや、機械なぶんだけ、人間より柔軟に動いて見せていた、とりあえず強い、私達が、即死なんて……渦里ちゃん、シヨツク」

数秒後のことである。

結果は、ビリーズ機、渦里機のダメージポイントが規定数を超えたため、私の勝利であった。

自分でも信じられないが、そういう事らしかった。

ビリーズ機が起き上がり、無傷のセンチタイプに接近した。

「心配したが、どうやら明日は大丈夫そうだな、グレートな戦い方だったぜ。」

「あ、ああ……」

通信回線を開き、私はモニター越しのビリーズに頷いて見せた。

出来てしまった以上、やるしかないようであった。

私が戦うことで二人を……いや、この世界の三人を守れるのだとしたら、戦う理由としては十分だ。

そして、戦い続けていけば、私がこの世界に來た理由わかるかもしれない。

とりあえず、決意した以上、もう戦うしかないのだ。

「あれ、明日の……一回戦の対戦相手てどこの国だったけ？」

渦里が間抜けな声で、私達に聞いた。

私は知らなかった、当たり前であるが。

「あ、ああ。明日はドイツ代表の夜乙女朝男と極楽追尾音子の二人が駆る装甲機神、『ワイルドリンクス』だったぜ。つか知つとけ

それぐらい」

「なんかドイツっぽくない名前だね、日本人みたい」

お前が言っなよ、とツッコミかけて、私はやめておいた――

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5935i/>

スキマクラブ

2010年10月11日03時55分発行